『さうか〳〵……まあ坐れ、坐れ！』とロマショーフは愛想よく從卒の肩を撫でゝ、『同じことだ、ガイナーン。お前のアルラは俺にもアルラだ。一つのアルラがすべての人にあるのだ。』

（感心な奴だ！）と少尉は室へ入りながら思つた。（だが、俺は彼と握手もしないぢやないか、さうだ、できないのだ。敢てしないのだ。あゝ畜生！今日から自分で衣物を着換へなければならん。こんなことを自分の代りに他人にさせるのは無精極なる。）

その晩ロマショーフは、將校集會所へ行かずに箱の中から細かい不揃ひな筆蹟で書き散した厚い罫引の手簿を出して深更まで書いてゐた。それは『最後の處女作』と題してロマショーフの綴つた第三の小説であつた。少尉は自ら自分が小説に身を入れてゐるのを愧ぢて、何人にもまた、どんなことがあつても、決してその事を知らせなかつたのである。

八　集會所

聯隊を收容する兵營は町外れの鐵道線路の彼方、所謂郊外といつたやうなところに建て始められたばかりで、その落成までは、聯隊は凡ての設備と一緒に私人の宅に移されてゐた。將校集會所は鍵形に建てられた小さな平家であつた。通りに沿うてゐる長い方には舞踏室と客間とがあつて、汚い庭の奥の方に突き出てゐる短い方には食堂と厨房と來訪將校の部屋とがあつた。この兩部は煩はしげな狹い曲りくねつた廊下のやうなもので續いてゐた。どの曲角も皆他の入口に通じてゐた。で、ちやうど小さな部屋が幾個も連續したやうであつた。そしてそれ等の部屋はみな食堂や、玉突場や、カルタ室や、客間や、婦人の化粧室などになつてゐた。食堂のほかのすべての室には、平常人が住はないため、風を通したことがないので、濕々した、酸ッぱい、人氣のない空氣がこもつてゐた。それに混つて、器具に被せてある古ぼけた絨氈の覆の一種特別な臭ひもした。

ロマショーフは九時に集會所へ行つた。五六人の獨身將校達はもう夜會に集まつてゐた

が、婦人達はまだ來てゐなかつた。彼等の間には昔から立派な音樂を聽かうといふ妙な競爭があつた。だが、そんな音樂などは舞踏會の花形役の一人にもならうといふ婦人達に取つては見下げたものと思はれた。音樂隊はもう硝子窓の廊下に席を取つてゐた。その廊下はいろ〳〵な硝子を嵌めた一つの大きな窓で大廣間に續いてゐた。大廣間の四壁には窓の間々に三脚燭臺が點つてゐて、天井には顫えてゐる硝子の飾の付いた釣ランプが懸つてゐた。白い紙で貼りつめた裸壁や、その傍に並んでゐるウキンナ式の椅子や、長春藤のカーテンなどの懸つてゐるこの大きな室は、テカ〳〵した光で一際がらんとして見えた。

玉突場にはベーク・アガマーロフ中尉とオリザール中尉との二人の大隊副官が五個の球にビール一本の賭をして遊んでゐた。オリザール中尉は聯隊ではオリザール伯爵と呼れた。彼は春のひよろ長い痩せぎすな、髪の毛には油をコッテリ塗つて撫で付けてゐる男で、鬚はないが皺の澤山寄つた顏をめかしてゐる若い老人である。彼は間斷なしに玉突の通語を振廻してゐた。ベーク・アガマーロフ中尉は負けてぶん〳〵腹を立てた。二等大尉レシチエンコは窓床に腰を掛けて彼等の遊戯を眺めてゐた。彼は四十五歳の、見た丈でも欠伸の

出さうな憂鬱な男で、その顏や體格のすべての點がやるせない哀愁の影を帶びてみな下へ垂れかゝつてゐる。長い、ぶく〳〵とした、赤い萎びた鼻はちやうど胡椒の莢のやうに垂れ下つてゐるし、鼻髭はほつそりした二筋の鳶色の絲のやうに下顎までぶら下つてゐるし、眉は鼻梁から顳顬へ垂れ下つて、彼の眼にいつも泣き出しさうな表情を與へてゐる。その古ぼけた服までが、彼の撫肩や落ち凹んだ胸の上に、まるで衣紋掛にでも掛つてゐるやうに、ぺら〳〵してゐる。レシチエンコ二等大尉は少しもウオッカを飲まず、カルタ遊びもせず、煙草すら喫はなかつた。が、彼にはカルタ室や玉突場へ行つて遊び人の背ろに居たり、または殊更がたくさしてゐるやうな時を選つて食堂に入つて行つたりすることが、他人にはとても解らない妙な快感を與へるのであつた。幾時間でも彼はそこに口も利かず默つて憂鬱に坐り通してゐるのであつた。聯隊では誰も皆これに慣れてゐた。そしてもし集會所に沈默家のレシチエンコ二等大尉が居ないと、なぜか遊びも酒宴も却つてはずまないといふ程であつた。

ロマショーフは三人の將校と挨拶してレシチエンコ二等大尉の傍へ坐つた。が、レシチ

エンコはそれより先に脇へ退いて溜息を吐いた。そして悲しさうにまめやかな犬のやうな眼付をして若い將校を見た。

『マリヤ・ウイクトロウナさんは御變りもありませんですか？』とロマショーフは無遠慮に、まるで聾者か、解りの鈍い人にでも向つて話すやうに、聲を大きくして訊ねた。聯隊ではレシチエンコ二等大尉に向つては見習士官までがこんな大きな聲で話すのであつた。

『ありがたう！』と、ほつと深い溜息を吐いてレシチエンコ二等大尉は答へた。『彼女は神經がその…何分時候が時候だからね。』

『ですが、あなたはどうして奥さんと御同伴でないのですか？それともマリヤ・ウイクトロウナさんは今日はお出でになりませんですか？』

『いや、どうして、來るとも。彼女は來るよ、君。ただ四輪車に明いた席が無かつたもんだから。彼女はライサ・ペテルソン夫人と一緒に馬車を雇つて、僕にかう言ふのさ、（あなたの靴は汚いから私共の着物を汚します）と。』

『さア、クルアーゼを中の穴へ入れるぞ！スーッとかうなだらかにな。したらベーク君、

球を穴から抜き給へ』と、オリザール中尉は叫んだ。

『さア突いて見給へ、後で僕が抜くから』と、ベーク・アガマーロフは腹立たしく答へた。

レシチエンコ二等大尉は蒼色の鼻髭の端を口に咬へてそれを無暗に嚙んでゐた。

『僕は君にお願ひがあるよ、ロマショーフ君』と、彼は願ふやうに訥りながら言つた。『今日君は舞踏會の幹事ぢやないか？』

『さうです。あの畜生奴等が、みんなしてかう決めてしまつたのです。私は聯隊副官の前で、病氣屈ぢで出さうとしていくらくるくる廻つたか知れやしません。ですが、彼奴てんで受付けないのです。（そんなら醫者の證明書を出せ）とかう言ふのです。』

『ぢや、僕は君にお願ひだがね、君！』とレシチエンコ大尉は優しい口調で、『何卒、彼女を餘り坐らせておかないやうにしてくれ給へ。ね、朋友の好誼でお願ひするよ。』

『マリヤ・ウイクトロウナさんのことですか？』

『え、さうだよ、どうぞね、君！』

『さア黄ろいドウブレートを隅へやるぞ！』と、ベーク・アガマーロフは聲を放つた。彼

は背が低いので球を突くのに都合が惡かった。で、彼は球突臺に腹をのしかけなければならなかった。顏は緊張して眞赤になつて、額には鼻梁のところで一緒に結ばつたV字形の二本の筋が立つてゐた。

『そりやづるい！』と、オリザール中尉は自信のある調子で彼にけしかけて、『そんなことは僕だつて遣りやしないぢやないか。』

アガマーロフ中尉の棒はカチッと音を立てゝ球を擦つたが球はその儘動かなかつた。

『滑つた！』とオリザール中尉は嬉しさうに叫びながら玉突臺の周圍でカンカン（カッポレのやうな踊）を踊つた。『おめえさんは寢たとちや、ひびちをかくかい？』と、アルメニア人の發音を眞似ながら。

アガマーロフ中尉は棒の太い方の端で床をどしんと突いて、

『君そんなに騒ぐなよ！』と彼は黑い眼をぎら〳〵させて叫んだ。『僕はもう突くのを止さう。』

『さう、固くなるなよ、君、血が腐つちまふぢやないか……さあモヂスッカを隅へやるぞ！』

玄關で婦人客を應接してゐる一人の盛裝した傳令使がロマショーフのところへ飛んで來た。

『少尉殿、御婦人の方があなたを廣間でお待ち申して居ります。』

廣間には今來たばかりの三人の年增の貴婦人が靜かに行つたり來たりしてゐた。そのうちで一番年を取つた主計夫人のアンナ・ミグノーワは鹿爪らしい氣取つた調子で言葉尻を引延して、世故慣れた鷹揚な態度で頭を振りながら詰責るやうに言つた。

『ロマショーフ少尉さん、何ぞ聽かれるやうな音樂を演るやうに吩咐けて下さいな、後生ですから……』

『承知しました。』

ロマショーフ少尉はお辭儀をして音樂隊のゐる窓のところへ近いて、『ヂッセルマン！』と彼は樂長に向つて叫んだ。『何か清々するのを一つやつてくれ！』

廊下の開け放たれた窓から『命は王のため』（グリンカ作有名な歌劇）の序曲の最初の音が響いた。そ

の拍子に連れて蠟燭の炎が上下にゆらめいた。

婦人達はだん〳〵集つて來た。一年ほど前にはロマショーフも舞踏指南者の役として應接間で婦人客を迎へる舞踏前の僅かな時間が酷く好きであつた。明りや、音樂や、ダンスを待ち兼ねて興奮してゐる婦人達が愉快さうにやきもきしながら自分達のボンネットや、襟飾や、毛皮の外套などを脱いでゐる姿が彼にはどんなに神秘な美しいものと思はれたらう。狹い玄關は俄かに女の笑聲や、甲高なお饒舌に混つて、香水や、お白粉や、犬の皮の手袋や、それから舞踏前のめかした美しい女達の、捉へ難い、深く心をとらかすやうな香で充された。彼女等は鏡の前へ來ては手早く髪を直したが、その鏡に映つた彼女等の眼がロマショーフにはどんなに輝かしく惚々しく見えたであらう。彼女等のスカートのサラ〳〵鳴る音が彼にはどんな音樂と響いたであらう。彼女等の纖細な手や、肩掛や、扇子の感觸がどんなに優しく感じられたであらう！……

ところが今はその魅力も消え失せてしまつた。ロマショーフはもうあんなことは二度と再びないだらうと思つた。今では彼はこの魅力が多くはフランスの淫本——それはダス

タフやアルマンがロシヤ大使館の舞踏會へ來て内玄關を通る有樣などを描いたものであるが——その淫本に讀み耽つたところから來てゐるといふことが解つてやゝ羞しくなつた。彼はまた、將校夫人等が毎年同じ一つの「華美」な着物を着て、唯特別に華かな夜會の時にだけそれを繕つたり、手袋を揮發油で拭き清めたりするのをよく知つてゐた。いろんな肩掛や、大きな人造寶石や、鳥の羽根や、大きなリボンや、彼等一般の嗜好がロマショーフには可笑くも、片腹痛くも思はれた。そのうちには一種穢褻臭い無趣味な手製のはでやかさが現れてゐた。彼等は贅澤な白粉や口紅などを使ふのだが、幼稚な程下手でぞんざいであつた。ある婦人などはそれがために顔が氣味惡い程蒼ざめて、陰影を帶びてゐた。だが、ロマショーフにとつて何より不快なのは彼が聯隊の他の人々のやうにすべての舞踏會や、すべての晴衣や、すべての媚びるやうな言葉の裏に隱れてゐる祕密な由來を知つてゐることであつた。それらの蔭には慘めな貧困や、努力や、遺繰や、讒誣や、嫉み合や、生氣のない、田舍じみた遊びや、それから退屈な下らないいざさつなどが隱れてゐるのを彼は知つてゐた……

タリマン大尉は夫人と一緒に來た。二人とも非常に脊が高く、がつしりしてゐた。夫人は優しい、しとやかなブロンドであつたが、夫の方は陰鬱な强盜のやうな顏をして、しよつちう咳をして啜れ聲を出してゐた。ロマショーフは今にタリマンが例のお定りの文句をいふだらうと、言はない前から豫期してゐた。と、果して彼はッイガン人のやうな眼付で、啜れ聲を出した。

『どうだな、少尉！カルタ室ではもうやつてゐるかな？』

『いえ、まだです。皆さん食堂にお出になります。』

『まだだつて？そら見い、ソーネチカ！俺の言つた通りぢや……俺は食堂へ行つて『廢兵』(軍事雜誌)でも讀まう。君、ロマショーフ君、彼女を案内して呉れ給へ……そして何の舞踏の組でもいゝから入れてやつて呉れ給へ。』

軈て玄關へルイカーチエフの家族がどや〳〵と入つて來た。母親を頭に、美しいのや、笑ひ上戸や、舌縺のするのや、いろんな娘を殆ど一群も連れて來た。おつかさんは活潑な女で四十になつても疲勞も知らずにダンスをして、絶えず子供を生んでゐた。聯隊での滑

稽家と言はるゝアルチャコーフスキイ中尉の言草ではないが、彼女は殆んど「第二舞踏と第三舞踏との間に」子供をひり落してゐた。

娘達は片言葉で笑ひながら、そしてお互にがや〳〵と言ひ爭ひながら、ロマショーフを目蒐けて駈け出した。

『何うしてあなたはわたし共の家へいらつしやらないの？』

『わるいひとだわ！』

『ほんとにいけないひとよ！』

『わるいひとだわ！』

『私第一舞踏にあなたをお招きしてよ。』

『マダーム……マダーム』(貴婦人方と云ふ意味)と、ロマショーフは厭々ながら愛嬌のいゝ紳士のやうな風をしてみんなに挨拶した。

その時彼はふと入口の方を見ると、そこの窓硝子の外に白いハンカチを帽子の上から箱のやうに被つたライサ・ペテルソン夫人の痩せた、唇の厚い顏が見えた。ロマショーフは慌

て、まるで小兒のやうに客間の方へ、こそ〳〵と隱れてしまつた。しかしそれがほんの僅かな間なので、ロマショーフはライサが彼を見附ける暇はなかつたらうと無理に信じようとした、がやつぱり彼は何だか不安を感じた。彼の情婦の小さな眼の表情のうちにはなんだか新しい不安な心持と、一種のきつい意地惡い自信のある威嚇とを含んでゐるやうに見えた。

彼は食堂へ通つた。そこにはもう大勢の人が集つてゐた。卓布を被せた長い食卓はほとんど凡ての席が塞がつてゐた。青い煙草の煙が室一杯漂つてゐた。厨房からは油の燒ける臭がぷん〳〵と匂つて來た。二三組の將校達はもう飲み食ひし始めた。ある者は新聞を讀んでゐた。低い樣々な話聲がフォークの音や、玉突の球のかち〳〵といふ音や、厨房の戸のガタビシいふ音と入り混つて聞えた。足元には玄關から涼しい風がそよ〳〵流れて來た。

ロマショーフはボベチンスキイ中尉を探し出してその傍へ行つた。ボベチンスキイ中尉は食卓の傍に立つて手をチョッキの隱袋へ突込んで足の爪先を立てたり、踵を上げたりしながら眼を煙草の煙にしよぼつかせてゐた。ロマショーフは彼の袖を曳張つた。

『何だね？』と中尉は振り返つて手を隱袋から出して相變らず眼を細めたまゝにやけたなりをして長い赤髭を撚つた。そして彼を流眄で見ながら臂を擧げて、『やあ！君か、よく出掛けたね……』

彼は自分でも氣附いてる通り近衞の立派な青年將校を眞似ながらいつも斯んな訥るやうな氣取つた調子で話すのであつた。彼は自分を偉いものゝやうに思つて、自分が馬や女性の通人でもあり、美しい舞踏手でもあり、立派な、世間慣れた人でもあると考へてゐた。それぱかりではない。まだ二十四歳の青二才の癖にもう何もかも經驗した悟り切つた人であると思ひ込んでゐた。だから彼はいつも肩をへんてこに張り上げて、厭にフランス人を氣取つて、げんなりした歩き付をして、話をする時はさも疲れたやうなぞんざいな身振をするのであつた。

『ボベチンスキイ中尉殿！、どうぞ御願ひですが、今晩私の代りに幹事になつて戴かれませんでせうか』と、ロマショーフは訊いた。

『メ、モン、アミイ！』とボベチンスキイ中尉は肩と眉とを同時に怒らせながら、愚かしい

眼付をして、『だが、君！』と彼は今のフランス語をロシヤ語に譯して言つた。『どういふ譯で？ほんとに君は僕を……なんと言つていゝか……君は僕を吃驚させたよ。』

『あなた、さう仰有らないでどうぞ……』

『待ち給へ……先づそのお馴染ぶりは拔きにしてね。なんだつて急にあらたまつて、あなたなどゝいふんだ？』

『まアお願ひですから中尉殿……私は頭痛がして困るのです……それに喉も……とても勤まりません。』

ロマショーフは長いこと熱心に友に願つた。お終にはお世辭まで言ひ出した。

聯隊ではボベチンスキイ中尉のやうに、美しい樣々な舞踏の出來る人は一人もゐないとか、それからある婦人が彼を舞踏の指揮者にするやうに願つてゐたとか、さういふことを並べ立てた。

『婦人が？……』ボベチンスキイ中尉は呆氣に取られたやうな憂鬱な顏付をして、『婦人が？ね君、僕のやうな年をして……』と、彼は態とらしい悲しさとがつかりしたやうな調子で笑ひ出した。『一體女とは何だ？ハッハッハ……アン、エニム！（謎だと云ふほどの意味）まあいゝさ、それでは承知しようよ……うむ、僕承知した。』

かう言つて彼はがつかりしたやうな聲で急に附け足した。

『モン、シエル、アミイ！（君と云ふ程の意味）君は持つてゐないかね……あの、それ……三ルーブルほど。』

『お生憎ですな……』とロマショーフは溜息を吐いた。

『ぢや一ルーブルは？』

『困りましたなア！……』

『デザグレアブル！（殘念だと云ふ程の意味）……ぢや仕方がない。こんな時にはまア行つてウォッカでも飲むんだなア。』

『悲しいことには募債に應ずる者が居ません。』

『さうか？、オー、ボーブル、アンフアン！（氣の毒な坊ちやんだと云ふ程の意味）……まアなんでもいゝから行かう』と、ボベチンスキイ中尉はさも寛大らしいぞんざいな身振をして、『僕がおごるから』

と言つた。

そのうちに食堂ではだん〳〵話聲が大きくなつて來て、同時に集つた人々にはだん〳〵と面白くなつてきた。話題は近頃やつと許されたばかりの將校の決闘に關する問題に移つて行つた。

一番よく饒舌るのはアルチャコフスキイ中尉であつた。彼は極めて陰險なごまかしやらしい男である。人々の噂では彼は聯隊に入る前豫備になつた頃停車場の驛長をしてゐて、ある車夫を擲り殺したために裁判に附されたこともあるとのことだ。

『決闘つていふ奴は近衛のいろんな間抜共やおべつか使ひにはいゝかもしれないが』と、アルチャコフスキイ中尉は亂暴に言つた。『しかし我々の聯隊では……まアいゝ、かりに獨身者の僕がリープスキイと集會所でずぶ飲に飲んだくれたとする。そして僕が醉つたふうをして、彼の耳をポカンと擲つたとする。そしたら僕等はどうなると思ふ？もし彼が僕と果し合ひをしないとしたら聯隊から逐ひ出されることになる。さうなれば彼の子供はどうして食つて行くだらう？もしまた彼が決闘を申込んだとして、僕が彼の腹をズドンと

射貫いてしまつたらどうなる。やつぱり彼の子供は食ふことができなくなるのだ……まるつきり下らないぢやないか。』

『えゝと、君待ち給へ……君は時々妙なことを言ふね』と、醉ひどれた老人のリョーフ中佐が片手に盃を持つて、片方の手首を力なげに空に動しながら話しだした。『君は軍服の名譽の何たるかを解してゐるかい？……なんだ君、そんなふざけたことを言つて……名譽といふものは……俺は今想ひ出したが一千八百六十二年に我々のテムリュクスキイ聯隊にこんなことがあつたよ。』

『いや、そのお話ならもうとても聽いちやゐられませんな』とアルチャコフスキイ中尉は打解けた調子で話を折つて、『中佐殿はゴロフ王（豆の王樣と言つて昔嘲に現はれゐる太古の王）の以前に有つたやうなことを平氣でお話なさるんだから。』

『なんだ君……君はまだ小僧ッ兒だが、俺はえゝと……俺はかういふことがあつたと話してるぢやないか……』

『恥辱を雪ぐには唯血あるのみです。』と、ボベチンスキイ中尉がさも高慢さうな調子で雜

つ返して、鷄のやうに肩を怒らせた。

『えゝと我々の聯隊にソルーハ少尉といふのがあつてね』と、リョーフ中佐はどうかして話を續けやうと努めた。

第一中隊長オサッチイ大尉が食堂を出ながら卓の方へやつてきた。

『諸君は決闘の話をしてゐるやうですね。なか〳〵面白さうですな』と、彼はみなの聲を壓消すやうな低い吼えるやうな、ドラ聲で言つた。『中佐殿御機嫌よう。諸君、今晩は！』

『あ、オサッチイ大尉か』と、リョーフ中佐は愛嬌よく彼に挨拶した。『えゝと……俺の傍へ坐り給へ、銅像君……一緒に飲まうぢやないか。』

『至極結構ですな』と低いドラ聲でオサッチイ大尉は答へた。

この將校はいつもロマショーフに恐怖のやうな、または好奇のやうな感じを起させて、妙な、イラ〳〵させるやうな印象を與へた。オサッチイ大尉はシュリゴーウイチ大佐のやうに音量と美音とに富んだ非凡な聲や、高い脊丈や、怖ろしい體力やで聯隊は勿論全師團に聞えてゐた。彼はまた隊列勤務に通曉してゐるので、彼を勤務の上に利用して中隊から中

隊へと移してゐた。彼は半年ぐらゐの間にだらしのない惡い隊を變じて、それを上官の前に非人間的に戰慄する大きな機械のやうに整頓と服從とで固つたものにしてしまふのであつた。彼は決して喧嘩などしなかつた。それどころか人を罵ることさへ特別な場合にしかしなかつた。それだのにあんな魅力と權威とを持つてゐるのが友人等には不思議に思はれた。ロマショーフはいつも彼の美しい薄黑い顏に――その顏の變な蒼白色は青つぽい黑髪と比べて一層際立つてゐたが――その顏のうちに一種緊張したやうな、壓へ付けてゐるやうな、殘酷なあるものを感じた。人にはなくて大きな强い猛獸だけに有るあるものを感じた。ロマショーフは時々そつと遠くの方から彼を見守りながら、もしあの男が憤怒つた時にはどんなだらうと想像して、思はず恐怖に慄然として、眞蒼になり、冷たい指を握り緊めることさへあつた。今も彼はこの鷹揚な强い男が壁の傍の豫め彼にすゝめられた椅子に凝と穩かに腰を下すのを傍眼も振らず見てゐた。

オサッチイ大尉はウォッカを一飲みして、ヂャレースをポリ〳〵嚙りながら中佐に向つて冷かに訊ねた。

『まア一體お集りの趣意はなんですな？』

『えゝと、俺が今話すよ……俺がテムリュクスキイ聯隊に勤めてゐた頃かういふことがあつたのだ。フオン・ゾオン中尉が――中尉のことを兵卒共は「ボツ・ズウオン」（鐘の下と云ふ意味）と呼んでゐたが――その中尉がやつばりある時集會所で……』

ふとリープスキイが話の腰を折つた。彼は四十代の二等大尉で、赤ら顔の肥太つた男である。いゝ年をしてゐて、その癖彼は將校仲間では滑稽家だと自ら許してゐた。そしてなぜか彼は變な可笑な音調を持てゐた。それは甘やかされた、然し誰にも可愛がられる滑稽じみた子供のやうな音調であつた。

『大尉殿、私が簡單に申上げます。一體話の始まりはかうなんです。アルチヤコフスキイ中尉が決鬪は下らないものだと言ひ出したのです。《我々の神學校の規則にもある通り後頭を一度敲いて、それであいこにする。》決鬪もそんなものだと言つたのです。すると血に渇してゐるボベチンスキイ中尉がそれを反駁したのです。それから中佐殿が自分の過去の生涯からある逸話を話さう、話さうと躍起となつてゐられたのですが、今迄はそれが話さ

れなかつたと見えます。それから話の最初にミーヒン少尉がガヤ〳〵してゐる中で自分の意見を述べようと努めたのですが、その音聲の不足なのと、彼の持前の處女のやうな羞恥のために折角の意見が誰にも聞こえずにしまつたのです。』

小柄の脾弱さうな青年のミーヒン少尉は忽ち顔を眞赤に染めた。彼の顔は薄黑い、あばた面のそばかすばかりあつて、その優しい黑い眼は、おづ〳〵してほとんど驚かされたやうにキヨト〳〵してゐた。が、ふと涙を催す程に眞赤になつた。

『皆さん、私は……私は或は間違つてるかも知れませんが』と、彼は兩手で自分の醜い顔を揉みながら訥つて悸々と言ひ出した。『ですけど私の考へでは、まア私はかう思つてゐます……第一その個々の場合を考へねばならぬと思つてゐます。時には決鬪も必要です。それは勿論です。我々は誰でも決鬪の場所へ出て行きます。それは勿論です。ですが時には、勿論、それは……或は最高の名譽はその……なんですな……絶對に赦すといふところにあるかも知れませんからね……ですが私はほかにまだどんな場合が出て來るか知りませんが……まア……』

『チョッ、君、デカダン・イワーノウイチ君！』とアルチヤコフスキイ中尉が荒々しくミーヒン少尉に向つて手を振つた。『君は襤褸でも咬へてゐるがいゝ。』

『えゝと、諸君、俺の話を終へさせてくれ！』と、リョーフ中佐が言つた。と、突然オサツチイ大尉がみなの聲を壓するやうな底力のある聲を響せて言ひ出した。

『諸君決鬪は重大な結果を伴はなければならん。でなければ馬鹿げたことになる！馬鹿げた憐憫や、讓歩や、謙遜や、喜劇になつてしまふ。五十歩の距離で一發宛の射擊、そんなことからは唯新聞によくあるフランスの決鬪のやうな下らん結果にしかなるまいと思ふ。二人やつて來てピストルを放つと、やがて新聞にその記事が載る。(決鬪は幸ひ無事に終りぬ。兩敵は互にピストルを發射せしが、いづれも傷を被らず。絶えず沈着なる態度を持したり。既に朝餐の時に至れば今迄の敵は和解して親しく握手を取交せり)と。斯んな決鬪なんか諸君下らんぢやないか。こんな決鬪は我々の社會になんの改良も與へるものでない。』

彼に向つて一度に幾人かの聲が答へた。彼の話の最中に幾度か自分の話を終へようとしてゐたリョーフ中佐はまたも始めた。『だが諸君俺は……さア凝つとして聽き給へ。諸

君はまるで小馬のやうだね。』しかし彼の話を誰も聽かうとしないので、彼は將校等を一々見廻して自分に同情しさうな眼を探し始めた。みなは議論に夢中になつて、彼には素氣なく顏を背向けてゐるので、彼はなささうに重苦しい頭を振つた。が、とうとう彼の視線はロマショーフの眼に落ちた。若い將校は自分の經驗上さうした瞬間に嘗める苦痛をよく知つてゐた。さうした瞬間には幾度も繰返した言葉がまるで支へるものもなく宙に、ぶら下つてゐるやうな氣がして、あるイラ〳〵した羞恥が執念く無暗にその言葉を繰返させるものであるといふことを知つてゐた。だから彼は中佐から眼を避けなかつたのである。

中佐は喜ばしさうに彼の袖を引張つて食卓へ連れて行つた。

『えゝと……せめて君だけでも俺の話を聽いて呉れ、少尉！』とリョーフ中佐は悲しさうに言つた。『さア坐つてウォッカでも飲や……あいつらは君、皆な馬鹿なんだ。』と、中佐は議論してゐる將校等を指して、手首を弱々しく動かした。『がや〳〵言ふばかりで、ちよつとも經驗なんかないのだ。俺は自分が經驗して來た事を話さうとしてるのに……』

片手に盃を持つて、あいた方の手を樂隊でも指揮するやうに振つて、首垂れた頭を振り

ながら中佐は自分の數多い物語のうちの一つを話し始めた。それ等の話で彼はちやうど獸の臓腑を詰めた腸詰のやうに塡め込まれてゐた。そしていつもその物語をしてゐるうちに後戻りをしたり、挿話に逸れたり、比較をしたり、謎になつたりして、終ひまで話し終へることはなかつた。今の彼の逸話といふのはかういふことであつた。ある將校が、ある將校に――勿論これはずつと昔のことであるが――アメリカ式の決闘を申込んだ。その決闘といふのが闘の代りに紙幣を隠して、その紙幣が奇數であるか、偶數であるかと當つこするのであつた。すると二人のうち、どつちかゞ――それがボッ・ズウオンだか、ソルーハだかは分らないが――ごまかしをやつたのだ。(其奴がね、君、二枚の紙幣を一緒に掴んでピッタリくつ着けてしまつて、一面は偶數で、一面は奇數で、どちらでも出るやうにしたのさ。さうして二人が引始めた……一人がいふには……)

此度も中佐は例の通り自分の物語を話し終へることが出來なかつた。それといふのは食堂にライサ・ペテルソン夫人がふざけながら飛び込んできたからであつた。彼女は食堂の入口に立つて、中へは入らずに(規則が内へ入れないことになつてゐた)ちやうどあまや

かされた、しかし誰にも可愛がられる娘の叫ぶやうな、燥いだ、かたいぢな聲で叫んだ。

『皆さん。まア何といふことです！婦人達はもう皆な集つてゐるのに、あなたがたはそこに坐つて飲み食ひしてさ！私達は早くダンスがしたいぢやありませんか！』

二三の若い將校は廣間に行かうとして席を立上つたが、他の人々は坐つて烟草を喫かしながら媚びるやうなペテルソン夫人には見向きもせずに話し續けた。が、リョーフ老人はひよろ〳〵した小刻みな歩調で彼女の傍へ行つて手を十字形に重ねて、自分の胸に盃から酒をこぼしながら酔ひどれた優しい調子で叫んだ。

『やア素的な別嬪さんだ！どうしてお上ではかういふ美人を生しておくんだらう。お、お手を……接吻させて下さい……』

『ロマショーフさん』と、ペテルソン夫人は饒舌り續けた。『大方今晩はあなたが當番なんでせう。まアほんとに何んといふ指揮者でせう！』

『ミル、バルドン、マダム、セ、マ、フ ポート！(何卒御免下さい奥さん是れは私の過失ですといふ程の意味)これは私の過失です』

と、ボベチンスキイ中尉は彼女の方へ駈け寄りながら叫んだ。彼は歩くのにばた〳〵と迅

い足音を立てゝ體をぐつと屈めて、胴を振り振りある晴やかな舞踏會に出る時の踊りの支度でもしてゐるやうに垂れた兩手を振つた。『あなたのお手を。ウオツル、メン、マダム（奥さん貴女のお手を。と云ふ意味）。さア皆さん廣間の方へお出下さい。廣間の方へ！』

かう言つて彼はペテルソン夫人と手を相携へて高慢さうにそり身になつて行つた。と、もう他の室から彼が得意の世間慣れた指揮者らしい聲が聞えた。

『ムシユー、御婦人方をワルツにお呼び下さい。音樂隊ワルツだ！』

『ご免下さい中佐殿、私はいろ〳〵やらなければならぬ役目がありますので』と、ロマシヨーフが言つた。

『え？君も！』とリヨーフ中佐は悲しさうにぐたりと頭を垂れた。『君もやつぱり彼奴等の樣に意地惡だな……えゝと……ちよつと、ちよつと少尉……君はモルトケ將軍のことを聽いたことがあるか？偉い沈默家で、元帥で、戰術家の……あの……モルトケ將軍のことを？』

『ですが中佐殿、全く、あの……』

『君、そんなにばた〳〵するなよ……敎訓はごく簡短だ……大沈默家は將校集會所に行つていつも食事の時になると、自分の前の食卓の上に、黃金の一ぱい入つてゐる財布を置いたさうだ。そして將軍はその金を集會所でたゞへ一度でも有益なことを言つた將校にやる積であつた。しかし彼は九十までも長生きして死んだが、その財布はそのまゝ殘つてゐたとのことだ。どうだ？この胡桃の味がよく解つたか？さあ、もう行つていゝ、行け、行け、雀の子……飛んで行け……』

九夜會

耳を聾するやうなワルツの響さに、ビリ〳〵震へてゐるやうな廣間の中に二組の男女がくる〳〵廻つてゐた。ボベチンスキイ中尉はまるで石像のやうに悠々と落着拂つて踊つてゐる背の高いタリマン夫人の周圍を兩臂を翼のやうに擴げながら早足に廻つてゐた。背の高い毛深いアルチヤコフスキイ中尉は小さな薔薇色がゝつた顏の若いルイカーチエフ夫人の上に心持ち體を乘せ掛けるやうにして、彼女の髮の分けめを眺めながら、自分の周圍をくる〳〵引廻した。彼は步調も取らずに恰度子供を相手にしてゝもゐるやうに、懶さうにぞんざいに足を運んだ。十五人の他の婦人達は壁際にいかにも淋しさうにして坐つてゐた。が、彼女等はどうでもいゝといつたやうなふりを强ひて粧うてゐた。聯隊の夜會ではいつでもこんなに男子が婦人より四分の一程少なかつた。そして夜會の始めはきつと退屈なものと決まつてゐた。

いつも婦人達の特別な誇りにしてゐる舞踏會をつひこのあひだ開いたばかりのペテルソ

ン夫人は今しも身體のしなやかなスラッとしたオリザール中尉と組んだ。彼は自分の左の胸にぴつたり釘付けにされたやうな彼女の手をしかと握つた。彼女は彼の肩に置いた他の手の上に顎をぐつたりと凭せかけて頭を後の廣間の方へ態とらしく不自然に向けてゐた。一舞踏濟んでから彼女は態と婦人化粧室の入口の傍に立つてゐたロマショーフの近くに坐つた。彼女は急に扇子を振つて自分の方に乘りかゝるやうにしてゐるオリザール中尉を眺めながら心地よげに疲れた調子で言つた。

『ちよいと、敎へて頂戴な、伯爵。どうして私はいつもかうむし〳〵してるんでせう。どうぞ、理由を聞せて頂戴な！』

オリザール中尉はちよつと頭を屈めて拍車をがちや〳〵鳴しながら片手で鼻髭を右左に撫で下した。

『奥さん、そんなことはマルツイン・ザデーカでさへ言やしませんよ。』

その時オリザール中尉は彼女のスベ〳〵したコルセットを見てゐたので、彼女はせかせかとわざとらしく深い呼吸をした。

『あゝ、私の體溫はしよつちう高まつてるのよ！』と、ペテルソン夫人は自分の言葉の蔭には特別な不穩當な意味が含まれてゐるといふことを微笑に示しながら言ひ續けた。『私はかうした熱烈な氣質を持つてゐるんですわね!!』

オリザール中尉はちよつと曖昧に笑つた。

ロマショーフは立上つて、流眄でペテルソン夫人を眺めながら、嫌惡の感を抱いて、心の中で、（あゝなんといふ厭な女だらう）と思つた。そしてこの女との以前の關係を思ひ出して、ちやうど數ケ月も湯を使はず、衣物も着換へないといつたやうな不快を感じた。

『まア、あなた、伯爵、お笑ひなすつちや厭よ。あなたは私のおつかさんが希臘生れだといふことをご存じないのね！』

『いやはやなんといふ厭な口の利き方だらう。』とロマショーフは考へた。『俺は今迄あれに氣が付かなかつたとは實に變だ。彼女はちようど慢性の鼻感冒か、鼻加答兒にでも罹つてゐるやうに、（私のおつかはんは希臘生れよ）といつたやうな言ひ振だ。』

その時ふとペテルソン夫人はロマショーフの方を振向いてぢつと眼を細めながら彼を挑

ひやうに眺めた。

ロマショーフは例の通り心の中で言つた。

（彼の顏は假面のやうに見透されなくなつた。）

『今晩はロマショーフさん！どうしてあなたは挨拶にもいらつしやらないの！』とライサ・ペテルソン夫人が囀り出した。

ロマショーフはその傍へ寄つた。彼女は忽ち瞳を非常に小さく鋭く意地惡さうにして彼の手を固く握り緊めた。

『私はあなたの御要求通りに三番目のダンスをあなたのために殘しておきましたよ。あなたはお忘れぢやないでせうね？』

ロマショーフは點頭いた。

『なんてあなたは不愛想な方でせうね。』とペテルソン夫人は顏を歪めて、『あなたはアンシヤンテ、マダム（奥さんそれは嬉しうございますといふほどの意味）ぐらゐは仰有つてもいゝぢやありませんか』――ロマショーフにはそれがアドシャッテ、バタブと聞えた――『伯爵、ほんとにこの人は粉袋み

たいな方ですわね？』

『どうして……いや、私、やつと氣が付きました。』とロマショーフは不確かに呟いて、『名譽のために感謝致します。』

ボベチンスキイ中尉は身を入れて夜會を賑はさうとはしなかつた。彼は興醒めしたやうな、そして疲れて夜會の世話に堪へないやうなふうで指揮をしてゐた。それが恰も自分はうんざり飽き果てゝゐるけれど、皆の人々には大事なある責任を果してゐるといつたふうであつた。が、第三舞踏の前になつて俄かに彼は元氣づいて、廣間の中をまるで小馬に乘つて氷の上でも滑るやうに飛んで歩いて、特別に大きな聲で叫び出した。

『これからカドリール・モンスツル（舞踏の名）です！男の方は御婦人の方と組みなさい！』

ロマショーフはペテルソン夫人と組んで、ミーヒン少尉とその肩までしかないレシチエンコ夫人とに向ひ合つて、音樂隊のゐる窓の近くに立つた。第三のカドリールには舞踏手が著しく加はつたので、組々は廣間の中を縱にも横にも擴らなければならなかつた。そして交る交る順に踊らなければならなかつたので、一々の曲を二度づゝ躍るやうになつた。

『譯を言つて彼女の始末を付けなければならん。』ロマショーフは窓から鳴り渡つた太鼓と喇叭の響に耳を聾されながらかう思つた。『もう澤山だ！』彼の顏には破ることのできない堅い決心が現れてゐる）と例の三人稱で考へた。

聯隊の舞踏指揮者は昔からある特別な手段と無邪氣な滑稽とを弄することに定まつてゐた。で、第三舞踏ではきつと曲と曲とを入れ交ぜて、さも偶然にしたかのやうに、大まごつきにまごつかせなければならないものゝやうに思はれてゐた。そしてそれがいつも決つて騷ぎと笑聲とを誘ふのであつた。ボベチンスキイ中尉は第二の曲からふいにカドリール・モンスツルを始めて男子に獨舞をさせたり、またはすぐに氣がついたやうに彼等を相手の婦人に返したり、或はGrand-rond を始めて、それを雜ッ返して男子に婦人を探させたりした。

『御婦人方はどうぞ前へ出て下さい……いや間違ひました。後ろへ退つて下さい。男子の方は一人々々になつて下さい。失禮ですが少し後ろへ。御婦人方と手を取つてクル〜廻つて下さい。もつと後ろへ。』

ライサ・ペテルソン夫人はその間憎惡の情に喘ぎながら毒々しい調子で、けれども顏には非常に面白い愉快なことを話してゐるかのやうに微笑を浮べながら言つた。

『私はあんな仕打をされて默つてゐる譯には參りません。いゝんですか？私は小娘ぢやありませんよ。ねえ、紳士ともあらう方があんな仕打をしていゝものですか。さうでせう？』

『腹をお立てなすつてはいけません。ライサさん』とロマショーフは宥めるやうに柔順しく願つた。

『いゝえ、怒るくらゐのことはまだ名譽だと思ひなさい！私は貴方を輕蔑することもできます。ですけれどこの私を馬鹿にすることだけは誰にも免しませんよ。なぜあなたは私の手紙にお返事を下さらなかつたのです？』

『ですが、私はあなたのお手紙の來た時ちやうど留守でしたから。ほんとです。』

『へえ、あなたは私を胡魔化さうといふ氣ですね！私があなたのおいでなさるところを知らないとでも思つていらつしやるのですね……ですがまア、さう信じてゐなさるがいゝでせう！』

『男子の方は前へ出て下さい！男子の方だけで手を取つて輪になつて下さい！左の方へ、左の方へ！さう〳〵左の方へ、皆さん！あゝ解らないね！プリユ、デ、リカ、メシエ！（皆さん最つとしなやかにといふ程の意味）』と、指揮者のポペチンスキイ中尉は舞踏者達を圓形に指導したり、ヤケに足踏をしたりしながら叫んだ。

『私はあの女の、あの脊蟲の奸計をなにもかもよく知つてゐますよ。』と、ロマショーフが席に歸つた時ペテルソン夫人は言ひ續けた。『唯、彼女は無暗に自分のことを偉さうに妄想してるんですよ。なんだ彼女は、泥棒した公證人の娘の癖に……』

『どうぞ私の前で、私の知人の惡口はよして下さい』と、ロマショーフは荒々しく遮つた。

そこで殺風景なお芝居が始まつた。ペテルソン夫人はシューロチカのことを口汚く罵り散らした。彼女はもう自分の造り笑のことも忘れてしまつて、體中汚辱に染まつたやうに、自分の鼻聲で音樂も掻き消す程の勢であつた。ロマショーフは自分の無氣力と狼狽のために涙の出るほど赤くなつた。そればかりではなく侮辱されたシューロチカを思ふの悲痛、耳を聾するばかりの舞踏の響に遮られて自分が一言も言ひ返すことができなかつたといふ

口惜しさ、取別け人々が、もう自分達を注目し始めたといふ恥しさ――それ等のために彼は顔を赤らめたのである。

『さうですよ、彼女の親父は泥棒なんです。それを考へたら、あんなに鼻を高くしてゐられる義理のものではありません！』とペテルソン夫人は叫んだ。『ねえ、さうぢやありませんか。あの女は私共を馬鹿にしてゐますわ。私共だつて彼女のことを少しは知つてますからね！さうですとも！』

『ほんとに、どうぞお願ひです』とロマショーフは呟いた。

『まアお待ちなさい。あなたと彼女を私はもつとひどい目に遇せてやりますよ。私はあのニコラーエフの薄野呂さんに眼を開かせてあげますよ。あの女はあの人を三年經つてもまだ大學へよう入れないぢやありませんか。自分の鼻先でしてゐることさへ見得ないあの薄野呂さんがどこへ入れるものですか。それどころかあの女にはほかに崇拜者があるんですもの。』

『是からマズルカ・ゼネラルです！プロメナードです！』とボベチンスキイ中尉はちやうど

天使の飛んでゐるやうな形をして全身を前に屈めつ廣間に沿うて駈けながら叫んだ。

板の間はびり〳〵震へて、ドシン〳〵といふ足踏のために調子よく搖れた。マズルカの拍子に合せて釣ランプの飾がぢや〳〵と鳴つてはきら〳〵と色んな色彩の火花を散すやうに見えた。窓に掛つた網織のカーテンは調子よく搖れた。

『どうして私達は穏かに靜かに別れることができないのでせう？』とロマショーフは溫柔しく言つた。彼は、この女が彼に嫌悪の情と同時に、ある下らない、然し制し難い臆病を起させるのを心のうちに感じた。『あなたはもう私のことなんか思つてゐらつしやらない。……だから、善良な朋友として別れようぢやありませんか。』

『おやまア！あなたはそんなことを仰有つて私をごまかす氣ですね？御心配はいりませんよ、あなた！』――彼女はそれを「あだゝ」と發音した――『私は捨てられるやうな女ぢやありませんよ。厭になれば私の方で捨てゝしまひます。ですけれど私はあなたの卑劣なのにはほんとに呆れてしまひました……』

『早くお終ひにしようぢやありませんか』と、ロマショーフは堪へ切れずに齒切りしなが

ら小聲で言つた。

『五分間の休憩です。カワリエ！オクキユーペ、オー、ダーム！（男子の方は御婦人方をもてなして下さいと云ふほどの意味）』

と、舞踏の指揮者が叫んだ。

『えゝ、いつでも私の好きな時に。あなたは卑怯にも私を騙したのね。私はあなたのために何もかも犠牲にしました。正直な女の拂へるだけのものは皆あなたに拂ひました……私は自分の夫に、あの立派な理想家に眼も呉れませんでした。あなたのためには私は妻としての義務も母としての義務も悉皆棒に振りました。あ、私はどうして、どうして夫のために貞操を守つてゐなかつただらう！』

『もう廢しませう！』とロマショーフは微笑を禁ずることができなかつた。彼女と聯隊に入つて來る若い將校達との數多い情話は聯隊でも有名なものであつた。尤も七十五人の將校等や、彼等の夫人や、その親戚の女達の間にはさうした戀物語はいくらもあつた。ロマショーフはペテルソン夫人がよく手紙や口で自分の夫のことを「あの馬鹿者」だの、「あの卑しい人」だの、「いつまでも突立つてばかりゐるあの木偶」だのと言つたり、それよりもつ

と、ひどい惡口を言つたりしたのを思ひ出して可笑しかつたのである。

『あゝ！あなたは無禮にもまだ人を馬鹿にしていらつしやるのね！ようこざんすよ！』と、ペテルソン夫人は眞赤になつて怒り出したが、『さあ私達は始めませうよ！』と彼女は急に氣が付いたやうに自分の相手の手を取つて腰から上をしなやかに振りながら溢れるやうな微笑を浮べて前へ進んだ。彼等が一踊り濟ますと、又彼女の顏がすぐと腹立しさうな表情に變つた。（まるで激した蟲けらのやうだ）とロマショーフは思つた。

『私、このことは勘辨できません。いゝですか。決してできません。私はあなたがなぜそんなに卑劣に、卑屈に、私から逃げやうとなさるか、よく知つてますよ。あなたのたくむやうにさううまく物が運ぶものではありません。どうして、どうして、さううまくいくものですか！あなたは私に向つて、直接に、正直に、私はもうお前を愛さないとは仰有らずに、私を騙して、私をたゞ女として、雌として弄ばうとなすつたのですね……もしここで失敗つたらほかにも場合が澤山ありますよ、ホ、、。』

『もう、いゝでせう。綺麗さつぱりと話しませう。』と、ロマショーフは怒氣を抑へてゐる

やうな口調で言つた。彼は益々顔が蒼ざめて、唇を喰ひ縛つてゐた。『あなたが好んでなさつたことぢやありませんか。勿論私があなたを愛してゐないといふことは事實です。』

『まア、なんですつてえ、なんといふ侮辱の言葉でせう！』

『そしてこれまでも一度だつて愛したことはありませんでした。ですが、それはあなたが私を愛しなかつたやうにです。私達は二人である醜い虚僞の、穢はしい戯れをしてゐたのです。ある卑猥な戀の喜劇を演じたのです。私はよつくはつきりあなたが解りました。ライサさん、あなたには優しさも、愛も、また單純な戀着もいちなかつたのです。あなたはそれに相當するだけの資格がなかつたのです。なぜなら』と、ロマショーフはふとナザンスキイの言葉を思ひ出して、『何故なら唯選ばれたる者ばかりが、もしくは優しい人だけが戀し得るからです！』

『へえ、それぢや無論あなたはその選ばれた人でせうねえ！』

また音樂が鳴り出した。ロマショーフは窓越しに喇叭の輝かしい銅の口を恨しさうに眺めた。喇叭は平氣に吼えるやうな、唸くやうな響を室中に吐出してゐた。頰を膨まして、

眼をぎら〳〵と刺き出して、眞蒼な顔をして力一ぱいに吹いてゐる兵卒も彼には恨めしかつた。

『喧嘩をするのは止しませう。或は私は眞の愛に値ひしないかも知れませんが、しかしそんなことはどうでもいゝのです。こゝでいふのはあなたのやうな狹隘な田舍じみた見識や、田舍じみた名譽心のある方は、必ず自分を誰かに「取卷かせて」他人にそれを見せたがるものです。私はその點を言ふのです。あなたが夜會の時に人々の見てゐる前で、私に向つてなさるあの親しさや、あのやさしい眼付や、あの命令的な親しさうな調子の意味が私に解らないと思つておいでですか。あなたは確かにそれを他人に見せ付けたいにきまつてゐます。でなければ、この戯れはあなたにはなんの意味もないぢやありませんか。あなたには私の愛が必要ではなくて、自分が度々辱しめられてゐるといふことを人々に見せ付けるのが必要であつたのです。』

『そのためなら私はあなたよりも、もつといゝ、もつと面白い方を選ぶことができたでせう』と、ペテルソン夫人はつんとして高慢さうに言ひ返した。

『まア落着きなさい。そんなことを仰有つたつて私はちつとも痛痒を感じませんよ。えゝ、私は繰返して言ひます。あなたは誰かを自分の奴隷として、自分の強情の新しい奴隷としておきたかつたのです。ですが時は容赦なく過ぎてしまつてその奴隷はだん〳〵少くなつて來ました。で、最後の崇拜者を失はないためには、冷酷なあなたは自分の家庭の義務をも夫に對する貞操をも犧牲にしてしまつたのです。』

『いゝえ、そんなことはありません。いづれあなたは私のことをまたお聞きなさる場合がありませう！』と毒々しく意味ありげにペテルソン夫人は呼いた。

廣間の向ふから舞踏してゐる人々を避けたり、飛び退いたりしながらライサの夫ペテルソン大尉が二人の傍へ來た。彼は瘠せこけた肺病やみのやうな男で、頭は禿げて黄ろく、黑い眼は濕んで愛嬌はあるが意地惡い炎が底に潛んでゐた。人の噂では彼は自分の妻に夢中に惚れてゐて、彼女の崇拜者には誰にでも優しい甘つたるい態とらしい親しみを結ぶ程彼女に惚れてゐるといふことである。して彼は彼等が未練もなく喜んで彼の妻から遠退くと、すぐ憎惡と不信と有ゆる勤務上の奸計とを以て報いるといふことである。

彼は口の周圍に粘り着いてゐる蒼い唇に遠くからわざとらしい微笑を浮べながら、

『踊つてるのかい、ラーエチカ！やア今晩はジョルデク君（ロマショーフのこと）。どうして君は久しく見えなかつたのだ！僕等は君が來ないと退屈になる程君と馴染んでゐるのに。』

『え……その……つい忙しいものですから』と、ロマショーフは呟くやうに言つた。

『君の忙しいことはよく知つてる』とペテルソン大尉は指で威嚇す眞似をして喚くやうな笑聲を出した。が、彼の黄色い白眼のある眞黑な眼は試すやうに、不安さうに妻の顏とロマショーフの顏とをジロ〳〵見較べた。

『實は僕は君達が喧嘩でもしてゐるかと思つたのさ。見てると、坐つたきりで、激し合つてるやうだつたから。君達は一體どうしたんだね？』

ロマショーフは默つて當惑しながらペテルソン大尉の瘠せこけて筋張つた薄黑い頸のあたりを見てゐた。が、ライサはいつも嘘を言ふ時にする傲慢な確信のある態度で言つた。

『ロマショーフさんは哲學ばかり言つてるんですもの。ダンスは時勢遲れだの、ダンスを

するのは馬鹿馬鹿しいだの、滑稽だのッて。』

『その癖自分は踊つてるぢやないか。』ペテルソン大尉は意地惡さうな愛嬌を浮べて言つた。

『さあ〳〵みんな踊り給へ、踊り給へ、俺は邪魔はせんから。』

彼が去るや否やライサは感に迫つて、

『あの聖人のやうな非凡な人を私は欺いたのです！それも誰のためだと思ひます！あゝ、もしあの人が知つたなら、もし彼の人が知りさへしたら。』

『今度はマズルカ・ゼネラルです！』と、ポペチンスキイ中尉が呶鳴つた。『男子の方は御婦人の方と組みなさい！』

熱つた身體を長い間運動させた人蒸れと、嵌床から舞ひ揚つた塵埃とで廣間は息苦しくなつた。そして蠟燭の火が黄色いどんよりした斑點のやうに見えた。今は澤山の組が踊つてゐて場所が狹いので、てんでに狹苦しいところでばた〳〵してゐた。で、舞踏手はお互にくつ付き合つたり、ぶつつかつたりした。今指揮者の命じたダンスは相手の女から離れた男があるほかの組を逐廻す踊りであつた。その男は組の周圍を廻りながら、同時に馬鹿げ

て滑稽に見えるやうなマズルカの歩調を取りながら女が彼に顏を向けるのを頻りに探してゐた。そして顏を向けるや否や彼は素早くバチ〳〵と手を拍つて女を奪つたことを示すのであつた。だが、相手の男子は彼に邪魔をして色んなふうにぐる〳〵廻つて自分の相手の女を彼方此方と曳張り廻す。して、自分は後退りしたり、横飛びをしたり、終には相手の胸を目蒐けて空いてゐる左の肘で突いたりした。このダンスになるといつも廣間には殺風景な、荒々しい、みつともない騷ぎが始まるのであつた。

『女優さん！』ロマショーフはライサ・ペテルソン夫人の傍ちかく身を屈めて呼いた。『あなたの仰有ることは實に滑稽で、可哀さうな氣がします。』

『あなたは大方酔つてゞもいらつしやるのでせう！』とペテルソン夫人は叫んで小説によくある女主人公が惡漢を頭から足の先まで見下すやうな眼付でロマショーフを睨め付た。

『なぜあなたは私を欺いたのです？譯を言つて下さい！』とロマショーフは毒々しく言つた。『あなたは私があなたから逃げないやうにするために私に身を任せたのですね。あゝ、もしそれがあなたの愛から出たことであつたなら。いや、愛からでなくとも單に肉慾から

であつたとしても、私はそれを解し得たでせうに。が、しかし、あなたは單に自分の淫奔からでした。卑劣な名譽心からでした。私共二人が愛もなく、好奇心さへもなく、唯退屈ざましに、慰みのためにちようど下女がお祭りに蔡の種を嚙つてゐると同じやうに、お互にくつ着き合つてゐたことを思ふと、實に恐しく穢はしいぢやありませんか。いゝですか、これは女が金のために身を賣るよりも惡いことですよ。金のためならそこに貧困や誘惑がある……しかし私はあの冷い、なんの目的もない、あの免すまじき淫蕩のことを思ふと實に羞しくて嘔吐を催すくらゐです！』

彼は額に冷い汗を滲ませて、ぼんやりした、退屈さうな眼付をして踊つてゐる人々を見た。と、向ふの方から、勿體ぶつたタリマン夫人が氣六ケ敷い立腹者の怒つた時のやうな顔をして、肩も動さずに僅かに兩足を動しながら相手の男には目も呉れずに出てきた。彼女と並んで、快活な、羊のやうに飛び跳ねて歩くエビフアーノフ少尉が來た。續いて背の小さいルイカーチエフ夫人が顏を眞赤にして眼を輝かせながら眞白なあどけない處女らしい襟足を露出して來た……それからオリザール中尉がまるでコンパスのやうな眞直なすら

りとした細い足でやつて來た。ロマショーフはそれ等を眺めてゐるとヅキ〳〵頭が痛んできて泣き出したいやうな氣がした。と、彼と並んでゐるペテルソン夫人は憎惡の情に眞蒼になつて、誇張的な芝居じみた諷刺を浴せかけた。

『立派な口をお利きになりますこと！善良なイオシフの役を演じてゐる歩兵士官が！』

『さうです、演じてますとも……』とロマショーフはむつとして、『私だつてこれが滑稽で、馬鹿げてることぐらゐは知つてゐますよ……しかし私は自分の失はれた貞操、單純な肉體の貞操を悲むのを恥としません。私共二人は好んで汚水穴へ陷つたのです。私はもう純潔な新しい愛で愛することは出來なくなりました。それはあなたの罪です。あなたです、あなたです！あなたは私より年上で、それだけに經驗も積んでゐるではありませんか。あなたはもう飽きるまで戀事は經驗なさつてきた方ではありませんか。』

ペテルソン夫人は勿體ぶつた不平らしい顏付で椅子から起上つた。

『もう澤山です！』彼女は芝居じみた調子で言つた。『あなたは求めたものを得たのです。これから私共の家を訪ねるのは止して下さい。私共ではあなたをまるで親戚のものゝやう

に待遇つて、あなたに飲み食ひさせてゐたのに、あなたはこんな惡性者になつてしまつたのです。私は何もかも夫に打明られないのをほんとに殘念に思ひます。あの人は聖人です。私はあの人を崇めてゐます。あの人に凡てを打明けるのはあの人を殺すと同じことです。けれども覺えてゐなさい。彼人はきつと侮辱された、保護者のない女のために復讐しますよ。』

ロマショーフは彼女と向き合つて、眼鏡越しに酷く眼を瞪めながら、憎惡の情に拘攣つてゐる彼女の大きな、薄い、萎びたやうな口を見守つてゐた。窓からは樂隊の耳を聾するやうな響が鳴り渡つて、可厭なトロンボンが嗄拗く小止みなく、單調に咽んでゐた。してトルコ太鼓の頑固な音がまるでロマショーフの頭の中で鳴り渡つてゐるやうに聽えた。彼はペテルソン夫人の言葉を唯斷れ斷れに聽いたゞけでその意味は解らなかつた。が、彼には彼女の言葉までがあの太鼓の音のやうに眞正面に彼の頭を敲き付けて、彼の腦髓を振蕩させてゐるやうに感じられた。

ペテルソン夫人は、バチッと扇子を疊んで、

『あ、この畜生！この破廉恥漢！』と彼女は悲劇じみた調子に呟いて廣間を足早にさつさと通り抜けて、化粧室へ行つた。

何もかも濟んでしまつた。が、ロマショーフは待ち設けたやうな滿足も感じなかつた。心にかゝつてゐる汚らしい野卑な重荷は以前彼が想像してゐたやうにすぐには脱けなかつた。いやかへつて今になつて彼は自分の凡ての道德的の罪をあの馬鹿な憐れな女に被せたことが惡い、卑屈な、そして不實な行爲のやうに思はれてきた。そして彼女の煩悶や失望や弱々しい怨みを想像しながら、彼處の化粧室にゐる彼女の苦い涙や泣き腫した赤い眼を思ひ浮べた。

『俺は墮落した！俺は墮落した！』彼は嫌惡と倦怠とを感じながらかう思つた。『人生とは一體なんだ！とある窮屈な、灰色の汚らしいもの……このみだらな不要な醜關係や、飲酒や、怠屈や、勤務のたまらない單調さ。外には一つの生きた言葉も、一刹那の清い歡樂もありやしない。書物、音樂、科學――これらのものはどこにあるのか？』

彼はまた食堂へ行つた。そこではオサッチイ大尉とロマショーフの中隊仲間のウエーフ

キン中尉とが、へト〳〵に酔つぱらつてしまつたリョーフ中佐の手を取つて出口へ送り出してゐた。中佐は力なげにぐにや〳〵と頭を振りながら頻りに俺は司祭長だぞと言つてゐた。

と、オサッチイ大尉は眞面目腐つた顔をして大きなドラ聲で輔祭らしく、

『司祭長さん、祝福して下さい。祈禱が始まります……』と、言つた。

夜會が終りに近くに隨つて食堂は次第に騷々しくなつてきた。あたりの空氣は煙草の煙で一ぱい充ち寒がつて、食卓の兩端に坐つてゐる人々は互ひの顔をほとんど見別けることが出來ないくらゐであつた。一方の隅では窓際に一塊になつて歌を歌つたり、あらゆる午餐や晩饗の附物の卑猥な物語をしたりしてゐた。

『さうぢやないよ、諸君……まア、僕に話させて呉れ給へ』とアルチャコフスキイ中尉は叫んだ。『ある時一人の兵卒が小ロシヤ人の家に屯營したことがある。ところがその小ロシヤ人に素的に別嬪な妻君があつたと言ふのさ——そこでその兵卒は考へたね——どうしたら俺は彼奴を……』

彼がまだ口を閉ぢないうちに、今迄自分の番をもぢ〳〵して待ちあぐんでゐたリーブス

キイ二等大尉が口を入れた。

『なんだ、つまらない。諸君……僕はかういふ話を知つてゐる。』

彼がまだ話し終らないうちに、もうその次の者は自分の物語を急いで話し出した。

『あ、それと同じやうな話があるよ、諸君。それはオデッサであつたことだが、その際……』

どの物語もみな穢はしい、猥褻な、馬鹿げたものであつた。そしてさういふ話の時に限つてきまり切つてゐるやうに、一番おほびらにひどいことを平氣で言ふ話手だけが一人笑ひを起させた。

ウエーッキン中尉は庭でリョーフ中佐を馬車に乘せておいて歸つて來た。そしてロマショーフを食卓へ呼び寄せた。

『まア坐れ、ジョールジンカ……カルタをやらうぢやないか。僕は今日は猶太人のやうな金持だ。昨日勝つたから今日は僕が「銀行」にならう。』

ロマショーフはなんとなくしんみりと心から話をして自分の生の倦怠と嫌惡とを誰かに

打まけてしまひたいやうな氣がした。盃を飲み乾し飲み乾し彼は顧ふやうな眼付でウエーッキン中尉を見ながら說きつけるやうな溫かい顫へ聲で言つた。

『中尉殿！我々はもつと別な生活のあるといふことを忘れてゐるのです。どこだか分らんが、どこかにまるつきり異つた人間が住んでゐて、彼等は極めて充實した、極めて喜ばしい眞生活をしてゐます。どこかに人々が戰つて、苦しみ惱んで、廣く、強く愛し合つてゐます……ね、中尉殿、我々はなんといふ生活をしてゐるのでせう！我々はなんといふ生活をしてゐるのでせう。』

『まあさ、君、生活がどうだつていゝぢやないか』と、ウエーッキン中尉は力なげに答へた。『だが、一體……それや、君、一種の自然哲學だ、力學だ。まア、君、力學なんてなんといふ滑稽だらう……』

『あゝ、我々は何をしてゐるんだらう！』と、ロマショーフは興奮してきた。『今日はぐでんぐでんに醉ぱらつて、明日は中隊へ行つて、一、二だの、左、右だのと呶鳴つて、夜になるとまた飲んでその翌日はまた中隊へ出る。これが人間の一生でせうか？まア考へて見て

下さい、これが果して人間の一生でせうか。』

ウエーッキン中尉はまるで何か薄絹を透して見てゐるやうにぼうつとした眼付で彼を見てゐたが、グッと逆咳をして不意に細い顫へた中音で歌ひ出した。

田舍に住み、
森に住み、
絲車をクル〳〵廻して……

『君そんなことはみんな止めつちまつて、身體でも氣を付けた方がいゝよ。』

心のたけを盡して、
紡錘を可愛がつた。

『さあ、カルタをとりに行かう、ロマシューウイチ・ロマショーフ君、君に別嬪を紹介するから。』

（この思ひを誰も解して呉れないのだ。僕には親しい人がないのだ）と、ロマショーフは悲しげに思つた。ふと彼はあの誇り高い、美しい、強いシューロチカのことを思ひ浮べた。

そしてなんだか疲れたやうな甘いやるせない感じが彼の胸に湧いた。

彼は黎明まで集會所に居て、人々のカルタをやるのを見たり、自分でもやりたくもないのに、また面白くもないのにその仲間入をしたりした。一度などは二人の見習士官と特別な卓子を占めてゐるアルチャコーフスキイ中尉が二枚のカルタを一度に自分の方へ投げて、極く拙い手付で拔換へてゐるのを見付けたこともある。ロマショーフはそれを決め付けて邪魔をしてやらうと思つたが、すぐ止めて冷かにかう考へた。

（えい、どうでもいゝや。どうせ、どうもなりやしない。）

ウエーッキン中尉は五分間も經つと自分の賭金をすつかり負けてしまつたので、椅子に倚り掛つて、蒼ざめた顔をして口をあんぐり開たまゝ眠てしまつた。ロマショーフと並んでレシチエンコ二等大尉が悲しげにカルタを眺めてゐた。が、一體どんな引力が彼をこんなところに幾時間もひどく怠屈らしい表情をさせながら坐らせておくのか、解らなかつた。

夜が明けた。溶けた蠟燭は黃色い長い炎を發してゆら〳〵瞬いてゐた。カルタを取つてゐる將校達の顏は蒼ざめてさも惱しげに見えた。が、ロマショーフはいつまでも、カルタや

銀貨の塊や、紙幣の束や、白墨で書き散らしてある綠色の羅紗を絕えず眺めてゐた。そして彼の重苦しくぼうつと霞んだやうな頭にはいつもある同じやうな思ひがさまよつてゐた——それは自分の墮落や、退屈な、單調な、不純な生活に就いての思ひであつた。

十　教　練

きら〳〵と金色に輝いた、とは言へ、どこやらうすら寒い——ほんとうに春らしい朝であつた。野薔薇が咲いてゐた。

ロマショーフは今になつてもまだ自分の青年時代の朝寢の癖を直すことができずに、今朝もいつものやうに朝の教練に遲刻した。で、彼はさまりわるいのと心配なのとで厭々ながら自分の中隊が教練してゐる練兵場へ行つた。彼が度々經驗してゐるこの心持のうちには若い將校に取つては非常に己れを傷けられたやうな感があつた。それに中隊長のスリーワ大尉がその心持を一層焦立てゝ恥しくさせるので。

スリーワ大尉はもはや昔噺になつた舊い殘酷な軍律の重苦しい殘骸を代表してゐた。その軍律といふのは酷い鞭撻や、些々たる形式や、三拍子歩調行進や、鐵拳制裁やをいふのだ。で、まだ野蠻の域を脱しない田舍の生活に支配されて、人道的傾向の發達してゐないこの聯隊の中でさへ、彼は荒い昔の尙武時代の奇怪な紀念碑であつた。そして彼について

は奇怪な、殆ど信じられないやうな逸話が數限りなく傳へられてゐた。隊列、操典、中隊——さういふものゝ外は一切の物が彼の前には存在の權利を失つた。彼はそれ以外の物を輕蔑ひやうに、一概に下らない馬鹿げたものだとけなしてゐた。彼は生涯嚴重な、辛い軍隊生活を送りながら『廢兵』の中の公報のほかは一冊の本も、一枚の新聞も讀んだことのない男である。彼は舞踏だとか、面白い演劇とかいふやうなあらゆる娯樂を無趣味な心で輕蔑してゐた。そして彼がこれらのものに向つて自分一流の軍隊語で罵る言葉といつたら實に口汚く、聞くに堪へない野鄙なものであつた。彼に就いてはこんな噂もある——それは或はほんとかも知れない——ある素的に心地のいゝ春の夜に彼は開け放した窓際に坐つて中隊の會計決算を調査してゐると、彼の前の籔の中で鶯が鳴きだした。それを聽いたスリーワ大尉はふと從卒にかう呶鳴つた。(ザハールチユク！あの、と、と、鳥奴を石でお、お、逐拂つてしまへ、やかましいわ……)

見たところ、大尉は元氣のないグニャ〳〵した人であつたが兵卒に對しては實に亂暴であつた。そして下士達に擲り合ひをするのを許すばかりか、自分でも違犯者を捕へて血の

出るほど殘酷に打つて打つて打ちのめすことがあつた。その代り兵卒の要求は細かなところまで氣をつけて給金を滯すやうなこともなく、毎日自分で中隊の炊事まで調べてゐた。で、聯隊でも、彼の中隊より豐かに樂しさうなのは唯第五中隊だけであつた。

しかし、スリーワ大尉は若い將校達を容赦なく無遠慮な氣儘な態度で苛めたり、引摺廻したりした。彼の態度には天性、小ロシヤ人の諷刺に一層特別な皮肉を加へてゐた。例へば敎練中部下の將校が步調を過つてゞもゐると彼は例のやうに少し吃りながらかう嗾り付けるのであつた。

『おや、どうしたんだ。全列兵は步調を崩してゐるのに、少尉一人步調を取つてゐる。』

時には全中隊を口汚い言葉で罵倒して、急に肉皮にかう附足すことがある。

『但し將校と見習士官の諸君は例外だよ。』けれども大尉は下級將校が中隊に遲刻した場合には取分け苛酷に、壓制的であつた。その辛さをロマショーフ少尉は誰よりも度々經驗したのである。遠くの方から少尉の姿を見つけるとスリーワ大尉は恰も遲刻者に對してゐて、こすりの敬禮でもさせるかのやうに「氣を着け！」と中隊に號令して、自分はぢつと身動

きもせずに時計を手にしながらロマショーフが羞しさに躓いたり、佩劍に足を引掛けたりしながら少時自分の場所を見附け得ないでまご〳〵してゐる狀を眺めてゐた。時には彼は毒々しい慇懃な調子で兵卒に聞えるのも構はずに言つた。『俺は君がまだゆつくりしてゐだらうと思つた。』いつかはまた、少尉がどんな風に寢て、どんな夢を見たかといふことを、まだ聞かない前からさも氣遣はしさうに、しかし態と大きな聲で尋問した。そしてこんな戲談を言つてから、彼はロマショーフを脇の方へ連れて行つて大きな魚のやうな眼付をして彼をさよう〳〵見詰めながら荒々しく譴責するのであつた。

『えい、構ふものか！』とロマショーフは中隊に近づきながら自暴氣味に思つた。『此方も惡いが彼方も惡い——お互ひだ。俺の生活はもう破滅だ！』

中隊長とウエーツキン中尉とルボーフと曹長とが練兵場の中央に立つてみんなでロマショーフの近づくのを振返つて見てゐた。兵卒等もやつぱり彼の方に首を向けた。この瞬間ロマショーフは衆人の視線を集めながら拙い足付でギマリ惡さうに步いてゐる自分の姿を思ひ浮べて、尙一層不快になつた。

（だが、或はこんなことはさうだいして愧づべきことぢやあるまい？）彼は多くの羞恥者の癖で、心の中で自分を慰めた。（これは唯俺だけが鋭く感じるので、他人にはきつとなんでもあるまい。まア、かりに俺でなく、ルボーフが遲刻したとして俺は自分の場所に立つて彼の來るのを見てゐるとする。なんでもないぢやないか。ルボーフはやつぱりルボーフだ……下らない）と、彼はとう〳〵から心を決めてすぐ安心した。（假りに愧しいとしたところで一ケ月と續くものぢやなし、いや一週間も一日も續かんのだ。一生涯ですらその間のことは皆忘れられてしまふ程短いものだ。）

いつもと異つてスリーワ大尉は殆んど彼を意に介せざるものゝ如く皮肉一ッ言はなかつた。唯ロマショーフが彼の前一歩程の所で立停つて、恭しく擧手の禮をして、膝を合せると、大尉は五本の冷い腸詰のやうな萎びた指を彼に差し出して、握らせながら、

『よく、覺えて置き給へ、少尉。君は古參將校の來る五分前、中隊長の來る十分前には、やんと中隊へ來てゐなければならんのだ。』

『惡うございました、大尉殿！』と嗄れた聲でロマショーフが答へた。

『なんだと、惡うございました？……いつも寢てばかりゐて。寢てゐちや上衣は縫へまい。さア將校諸君は各自の小隊へ就き給へ！』

凡ての中隊は各部隊に分れて練兵場に散ばつた。小隊毎に朝の體操をした。兵卒は運動を自由にするために軍服のボタンを外して一歩宛の距離を隔てゝ整列した。ロマショーフの半中隊の敏捷な下士ボブイリョフは近寄つて來る將校を慇懃に覗いて、下顎を前へ突出して流眄をしながら劈くやうな聲で號令した。

『踵を上げ――脚を屈げ！』

かう言つて、それから低い聲で節を付けて曳き延すやうに叫んだ。

『始めーえ！』

『一！』と兵卒は一齊に叫んで徐々に蹲んだ。ボブイリョフもやはり蹲みながら嚴しい元氣のいゝ眼付で列を見廻はした。

それと並んで小柄な身輕な上等兵のセロシタンが若い鷄のやうな細い劈くやうな聲で呶鳴つた。

『脚を屈げ、腕を前へ、延ばせッ！始め！一！二！』すると、十人の若々しい活潑な聲が斷れ斷れに力を込めてウォー、ウォー、ウォーと叫んだ。

『止めッ！』とセロシタンは劈くやうに呶鳴つた。『ラアプシン！ささまはそこで何を馬鹿げたことをやつてゐるんだ。まるで、ホーウ、ホーウと唸つてゐるリヤザンの婆アみたいに拳を突き出して……俺のとこではもつときつかりやるんだ、間抜め！』

それから下士は駈歩で各小隊を、練兵場のそこここに立てゝある機械體操の所へ連れて行つた。力の強い巧者な青年で、且つ體操の上手なルボーフ見習士官は敏捷く外套と服とを脱ぎ捨てゝ、綠色の更紗のシャツ一枚になつて最初に並行棒に駈け寄つた。そして彼は双手をその二本の棒に掛けて三度身體を振つたが、忽ち全身で大きな圓を描いた。そして彼の足がちよつとの間頭の眞上にあつたと思ふと、彼はうんと力を出して弓形にそり、空中でどんもりを打ちながら前方へ二尺ばかり飛んで、巧みに猫のやうに地上に蹲んだ。

『ルボーフ見習士官！また輕業をやつてるな！』と、スリーヲ大尉が彼を態と嚴格らしく呶鳴つた。年老つた「特進將校」は優れた戰列士官で、また規律を細かに辨へてゐるルボ

ーフに對しては一目置いてゐた。『教練に必要なことだけをやれ。こゝは光明週間（復活祭週間を云ふ）の觀世物小舍ぢやないぞ。』

『承知致しました、大尉殿！』とルボーフは快活に叫んだ。『承知はしましたが實行はしませんよ』と、彼はロマショーフに眼で言つた。

第四小隊は斜梯を練習してゐた。兵卒等は一人々々梯子へ近づいて横木に摑りながら臂を張つて擊ぢ登つた。下士のシャポワレンコが下に立つて見張つてゐた。

『足をばた〳〵しちやいかん、爪先を上へ！』

順番が中隊の笑ひ草になつてゐる左翼の小柄な兵卒フレーブニコフに廻つて來た。ロマショーフは彼を見る度毎にあんな汚い、鼻毘のない、慘めな顏をした、憐れな、痩せこけた一寸法師のやうな男をどうして、兵隊に採つたかと驚くのであつた。生れ落ちる時から永久に鈍い、溫柔しい、恐怖のこびり付いてるやうなフレーブニコフの愚かしい眼付に出遇すと、少尉の心のうちには怠屈とも良心の苛責ともつかない一種異樣な感じが動き始めるのであつた。

フレーブニコフはまるで首縊りのやうにみつともない拙い手付で吊下つた。

『身體を延せ！こら！延せつたら！』と下士は呶鳴つた。『さあ登れ！』

フレーブニコフは登らうとしてあせつたが、唯徒らに足をばた〳〵させて兩方に搖れるだけであつた。彼は上にそり返つた汚い鼻が憐れに見つともなく突出てゐる灰色の小さな顏を脇の方や下の方にちよい〳〵向けた。すると、突然横木から手が離れて袋のやうにどしんと落ッこちた。

『あゝ！體操をするのが厭なんだな！』と下士は嘆いた。『こら、意氣地無し奴。小隊の面汚しだ！ きさまを打敲いてやる！』

『シャボワレンコ！亂暴するな！』とロマショーフは羞恥と忿怒に憤然となつて叫だ。『そんなことは決してしてはならん！』と彼は下士のそばへ駈け寄つて彼の肩を掴んで言つた。

シャボワレンコは眞直に起立して、擧手の禮をした。急に兵卒のやうに愚かしくなつた彼の眼には微かにそれと分る程の冷笑が顫へてゐた。

『承知致しました、少尉殿。唯一つ彼奴はどうしようもありませんといふことを申上げておきます。』

フレブニコフは脊を屈めて一緒に立つて、ぼん〳〵やりロマショーフの方を見てゐた。そして掌で鼻を擦つてゐた。ロマショーフはなんの益にもたゝない鋭い同情に滿されながら、彼を離れて第三小隊の方へ行つた。

體操後十分間の休憩が來ると將校達はまた練兵場の眞中の並行棒の傍へ集つた。話はすぐ目前に逼つてゐる五月の閲兵式のことに移つた。

『どんなところで失敗るか解らないよ！』と、スリーワ大尉は手を振りながら濕んだ眼を睜つて言つた。『俺は諸君に言ふが、どの將軍にもそれ〴〵空想がある。僕等の軍團長にリウォキチといふ中將があつた。この人は工兵隊の方から俺達の方へ移つて來たのだつた。それでこの人の時代には我々はたゞ設堡作業ばかりやつてゐた。操典だの、教練だの、步調行進だのはみんなそつちのけだつた。朝から晩までいろんな肩牆を造つてゐたのさ。夏は土で、冬は雪で造つてゐたのだ。それで聯隊中が足から頭まで泥塗れになつて步いてゐた。第十中隊長のアレイニコフ大尉——今では故人になつたが——彼はある眼鏡堡だか砲

座だかを二時間で造り上げたためにアンナ勳章を貰つたことがある。

『巧いことをやりましたな』と、ルボーフが合槌を打つた。

『それから――これは君も憶えてゐるだらう、ウエーツキン君！――アラゴンスキイ將軍の時の射擊さ。』

『あ！あの「蹲んで射擊する」ですか？』とウエーツキン中尉は笑ひ出した。

『それは一體なんのことです？』と、ロマショーフ少尉が訊いた。スリーフ大尉は輕蔑むやうに手を振つて、

『それはかうさ、その時分俺達の頭の中には、唯射擊教練のことばかりあつたので、いろいろ面白いことがあつたのさ。一人の兵卒が閲兵の時に信經十二條（正教會の信仰個條）を問れて、「我れ信ず」と答へたはいゝが、「プリイ、ポンチイステム、ピラテ」（ポンチイ、ピラトの時といふ意）の代りに、「プリモスチイフシャ、スツレリヤアチ」（蹲んで射擊するといふ意味）と言つたので大笑ひさ。それほどまでに射擊が皆の頭を惱してゐたのだ！ひとさし指のことは擊ち出し指と言ひ、右の眼のことを狙ひ眼と言つて、何から何まで射擊に結び付けてゐたんだよ。』

『ですが、大尉殿！どんな風に理屈を說いたか憶えておいでゝすか』と、ウエーツキン中尉が言つた。『彈道だの、偏流だの……私自身がてんで解りませんでした。で、兵卒に向つてはお前達の持つてゐる銃身の中を覗いて見ろ、何か見えるかてなことを言つてました。すると彼奴等は《銃身の軸といふ假定線が見えます》と言つてすぐに擊出すのでしたが、憶えておいでゝすか大尉殿？』

『憶えてるとも射擊のことでは我々の師團は外國の新聞にさへ載つたからね。何しろ優等以上のものが十パーセントもあつたからなあ。ところがその實我々は狡猾いことをして、優れた射手を借りては聯隊から聯隊へと移してゐたのさ。でない時には中隊がてんでに擊つてる傍で、下級將校が盲障からピストルを擊つてゐたのさ。で、ある中隊などは數へて見たら標的に當つた方が發射數より五發多かつたといふことだつた。つまり的中が百五パーセントといふ譯さ。』

『ではあの、スレサーレフ將軍時代のシュライベル式の體操を憶えておいでゝすか？』

『憶えてるとも！そのシュライベル式の體操とさたら、まるでダンスでも踊つてるやうだ

つた。それにあの頃はあゝいふ將軍方が大分ゐたよ。だが君、あんな事は今日と較べたらお話しにならんさ。あんなことはまあ謂はゞお終ひの接吻だつたね。それでも以前には少くとも何を求むるかを知つてゐた。だが今はどうだ。兵卒も同胞だの、人道が必要だのと言つてるぢやないか。なにが人道だい。あんな馬鹿な兵卒は、ドシ〳〵打擲するに限る。進歩も發達もいつたもんか。なんでもスウオーロフ主義でなければ駄目々々。今日では兵卒に何を敎へてるか根つから分つてゐやせん。どういふことを考へ出したかといへば新しい戰術だとか突貫だとか……』

『さうですね、戯談ぢやありませんなあ。』と、ウェーッキン中尉はさも同感らしく點頭いた。

『スレサーレフ將軍についてはいろ〳〵面白い話がある。例へば君を偶像のやうに突立たせておいて、コザックの餓鬼共を君の圍りに、どつと襲撃させる。まア謂はゞ突貫だね。それを避けでもすると將軍はすぐにこんな命令を下すのだ。《某大尉は臆病なるが故に、何人も彼を勤務に強ふべからず》と。』

『狡猾い老爺ですなあ』と、ウェーッキン中尉が言つた。

『スレサーレフ將軍は又ある時某聯隊で奇拔なことをやつて人を驚かしたことがある。それは中隊を廣い水溜りの中へ連れて行つて中隊長に「伏射の構へ！」と號令するやうに命じたのだ。ところがその先生ちよつとまごついたが仕方なく「伏射の構へ！」と號令した。さうすると兵卒等は慌てくさつて聽き違ひではないかと、マゴ〳〵してゐた。そこで將軍は下士卒の前で中隊長を呶鳴り付けたのさ。《中隊をどう統御してゐるのだ！この色男！デレ助奴！こんな水溜りへ横はるのを怖がるくらゐでは、戰時に兵卒が敵の砲火を避けて、どこかの濠の中へ隱れる時、ささまは彼等をどう指揮するのだ？ささまの部下は兵士でなくて女郎だ、ささまも女郎だ！》と。』

『ひどくきめつけたものですね！』とウェーッキン中尉は吃驚した。

『今では個性だの、人格だのと言つてるが、以前には人格も糞もなかつた。それどころか山羊や猫のやうに人間を賣買したものだ。で、我々の頭にはセバストーポルの包圍とか、イタリヤ遠征とか、さういつたやうなことばかりあつて、他のことは毛程もなかつた……』

『ですが、兵卒を擲るのは無法ですなア』と、この時まで默つてゐたロマショーフが小聲で逆つた。『復讐することも、打擲を避けるために手を頭に擧げることさへもし得ないやうな者を擲ることはできません。彼等は頭を避けることさへし得ないのです。そんなものを擲るのは恥づべきことです！』

スリーワ大尉は輕蔑むやうに眼を顰めた。そして短い白みがゝつた鼻髭の下の下唇を前へ突き出してロマショーフの頭から足の先までぢろ〳〵と眺めた。

『なんだと？』と、彼は酷く輕蔑した調子で言葉尻を長く引張つた。

ロマショーフは蒼くなつた。胸や腹が冷りとして、殆んど全身が一時に顫へ出したやうに心臟が動悸し始めた。

『私はそれはよくないことだと申したのです…では繰り返して申します…それはかうなんです』と彼は斷れ斷れに、力强く言つた。

『では聞かう、話し給へ！』とスリーワ大尉は細い聲で言つた。『我々はこんな優男を始めて見たね。まアさう氣を揉まなくてもいゝ。君だつて一年も經つて聯隊から逐出されない

限りは屹度兵の醜面を擲るやうになるさ。しかも人一倍擲るやうになる。俺にも劣らないだらう。』

ロマショーフは彼をまじ〳〵と恨しさうに眺めて殆んど呟くやうに言つた。

『もしあなたが兵卒を擲つたら、私はあなたを聯隊長に報告します。』

『何だと？』と、スリーワ大尉は威赫すやうに叫んだが、すぐに折れて、『だが、こんな下らんことはもう澤山だ。』と彼は素氣なく言つた。『少尉、君は二十五年も國事に勤めたこの名譽ある老將校を敎へるにはまだ若いよ。さア將校諸君！中隊敎室へ行き給へ！』と彼は腹立たしく言ひ放つた。

そして彼はつつけんどんに將校等に背を向けた。

『なんだつて君は口を出す氣になつたんだ？』と、ウェーツキン中尉はロマショーフと並んで歩きながら宥めるやうに話し出した。『スリーワ（李に通ず）が甘いものでないとは君も知つてゐるぢやないか。君はまだ彼を僕のやうによく知らないのだ。彼が聞くに堪へないやうなことを言つても默つてゐ給へ。それに逆ひでもしようものなら君は直ぐに監禁されてしま

ふよ。』

『まア聽いて下さい、中尉殿！これでは勤務ではなくて、一種の盲從です！』と聲に憤怒と汚辱との涙を含んでロマショーフは叫んだ。『あの老耄れた太鼓の皮奴！我々を嘲弄してゐるんです！彼奴等は態と將校間に、亂暴と殘忍と妙に野卑な元氣とを維持しようとしてゐるのです。』

『あ、さうとも、勿論その通りだ』と、ウェーッキン中尉は冷かに言つて欠をした。が、ロマショーフは躍起となつて言ひ續けた。

『一體、誰に、なんのためにこんな壓制や、咆哮や、亂暴な怒號やが必要なんでせう？あゝ僕は將校になつた時こんなことは全く豫期してゐませんでした。僕は今でもあの最初の印象を忘れることができません。僕が聯隊に入つて三日經つたばかりの時です。あの赤髭坊主のアルチャコーフスキイ奴が僕を呶鳴り付けたのです。ちやうど將校集會所で話し合つてゐる時でしたが、彼が僕のことを少尉といつたから僕は彼を中尉と言つたのです。その時彼はちやうど僕と並んで一緒にビールを飲んでゐましたが、それを聞くと急に怒りだし

て、《第一、僕は君に取つては中尉ではなくて中尉殿だ。それから……それから、君は古參將校が注意をする時には起立し給へ！》と呶鳴るのです。で、僕は起立してリョーフ中佐が彼を坐らせるまで彼の前に屈辱を忍んで立つてゐました。あ、いやだ〳〵、中尉殿！もう何も仰有らないで下さい。私はもうこんなことは堪らなく飽き飽きして厭になつてしまひました……』

十一　學科

中隊教室では「學科」が始つてゐた。狹い室の中に方形に並べた腰掛に、內側に向つて第三小隊の兵卒等が坐つてゐた。その方形の眞中あたりを上等兵セロシタンが往つたり來りしてゐた。それと並んだ同じやうな方形の中を半中隊の下士シャポワレンコがやつぱり歩いてゐた。

『ボンダーレンコ！』とセロシタンが甲走つた聲で叫んだ。

ボンダーレンコは兩足で床をどん、と踏み鳴しながら、まるで木造の操り人形のやうに素早く眞直に立上つた。

『ボンダーレンコ、もしささまが銃を持つて部隊に列してゐる時に上官が來て、《ささまの持つてゐるものはなんだ、ボンダーレンコ？》と訊ねたらささまはなんと答へる？』

『銃つていふんですか？』と、ボンダーレンコがやつと思ひ出したやうに言つた。

『嘘吐け、それが銃か？ささまそれより田舍言葉で鐵砲とでも言つた方が氣が利てらわ。

家では銃といつても軍隊ではペルダン式、二號閉鎖機附、小口經、速射步兵施條銃といふんだ。繰返して見い、鈍間野郎！』

それでボンダーレンコは、勿論前から知つてゐたので早口に繰返した。

『坐れ！』とセロシタンは寬大に命令した。『それでは、なんのため銃を持つてゐる？この問ひに答へて見ろ……』と、彼は凡ての部下の兵を嚴格な眼付で順々に見廻して最後に『シエフチュク！』と呼んだ。

シエフチュクは顰め顏をして低い低聲でハ、ロ〳〵と鼻に掛けて、言葉に一々句切りを付けたやうに斷々に答へた。

『そりや、平時には操銃法を稽古するために、戰時には皇室と國家とを敵より防禦するためにわつち共に與へたものであります』と、彼はちよつと默つて鼻をくん〳〵ひはせて、『內敵と外敵とを問はずに』と陰氣に附加へた。

『さうだ、ささまはよく知つてゐるな、シエフチュク！唯言ひ方がハ、ロ〳〵してゐる。軍人は鷲のやうな快活な心を持てゐなければならん。坐れ、その次アウェーチキン！ささま

答へてみろ、何者を稱して我々は外敵といふのか？』

すばしこいオリヨール生れのアウェチキンがさも愉快さうに急いで言葉を飾つて答へた。その聲には以前小商人でもあつたらしいやうな甘つたるい早言葉が響いた。

『外敵とは我々が戰爭をしなければならぬ凡ての國々をいふのであります。フランス人、ドイツ人、イタリヤ人、トルコ人、ヨオロッパ人……』

『默れ！』とセロシタンは止めた。『そんなことは、もう操典に書いてないぢやないか。坐れ！その次……アルヒーポフ！何を我々は內敵といふか？』

彼は終ひの方の言葉を恰も圈點でも附けたやうに特に大きな聲で重々しく言つて、志願兵のマルクーソンの方に意味ありげな眼を投げた。

氣の利かない痘痕面のアルヒーポフは中隊教室の窓を見ながらぢつと默つてゐた。彼は軍隊以外のことでは經驗ある悧口なすばしこい若者だが「學科」の時は全くの白痴のやうであつた。それは田舍の出來事の單純な明白な現象を觀たり、考へたりするに慣れてゐる彼の健全な智力が、軍隊で彼に課せられる課業と實際生活との關係をどうしても理解し得

ないからである。だから彼は小隊長が驚いて癇癪を起すほど、至つて單純なことも解し得ず、學び得ないのである。

『さあ！ささまは俺をいつまで待しとくんだ？』とセロシタンは怒り始めた。

『內敵とは……敵とは……』

『知らんのか？』と、セロシタンは威赫するやうに叫んでアルヒーポフの方ににじり寄つたが、ロマショーフ少尉の方を流眄でちらと見て、唯頭を振つてアルヒーポフに怖い眼付をして見せた。『さあ能く耳をほぢくつて聽け。內敵とは國法に背く凡てのものをいふのだ。例へば、何者だ！……』と、彼はアウェチキンが訊いて貰ひたさうな眼付をしてるのを見て、『ささまでもいゝから言つて見ろ、アウェチキン！』

アウェチキンは起上つて、嬉しさうに叫んだ。

『それは謀反人や大學生や韃靼人や猶太人や波蘭人であります！』

それと並んでシャポワレンコは自分の小隊を敎へてゐた。腰掛の間を歩き廻りながら、彼は細い流暢な聲で今手に持つてゐる手簿のうちから問題を出してゐた。

『ソルツイス！歩哨とはなんだ？』

剽輕者のソルツイスは一生懸命になつて、身體を縮めて、眼を剝き出して叫んだ。

『歩哨とは不可侵のものであります。』

『うむ、さうだ、してそれから？』

『歩哨とはある哨所に銃を持つて立つてる兵卒のことであります。』

『その通りだ。ソルツイスは大分勉強し始めたと見えるな。次はバホルーコフ！ささまはなんのために哨所に立てられる？』

『眠つたり、居眠りをしたり、煙草を喫つたりしないためであります。また誰がどんな物品や贈物をやらうとしても受取らないためであります。』

『して敬禮は？』

『それから通り過ぎる將校には規定の敬禮をしなければなりません。』

『さうだ、坐れ！』

シャポワレンコは先刻から志願兵フォーキンの皮肉な微笑を認めてゐたので、殊更嚴格

な調子で喚鳴つた。

『志願兵！そんな立ち樣があるか！上官が質問する時は、バネのやうに、敏捷に立つものだ！軍旗とはなんだ？』

胸に大學の徽章を付けた志願兵のフォーキンは下士の前に恭しく立つた。が、彼の若々しい灰色の眼には愉快さうな嘲笑が浮んでゐた。

『軍旗とは神聖なる軍隊の旗でありまして、その下で……』

『寢言を言ふな！』と、シャポワレンコが腹立たしく言つて、手簿で掌をぴしやつと拍つた。

『否、私の言ふことはほんとです。』と強情に、しかし落着いてフォーキンが言つた。

『なんだと!?上官がさうでないと言ふからはさうでないのだ！』

『ご自分で操典をご覽下さい！』

『俺は下士だからささまよりはよく操典を知つとる。言つて見い！志願兵とさたら何奴も此奴も法螺吹きばかりだ。俺だつて士官學校に教鞭を取らないとも限らんぞ。何がささま

に解るもんか。旗つて一體なんのことだ？カタと言ふんだ！決して旗と言ふんぢやない。神聖なる軍隊のカタなんだ。聖像のやうなものだ。』

『シャポワレレコ！議論は止せ！』と、ロマショーフが口を入れた。『課業を續けろ！』

『はい、畏りました、少尉殿！』と、シャポワレンコは身體を延した。『唯少尉殿に一言申上げて置きますが、この志願兵はいつも悄口ぶるのです。』

『よし〳〵、次をやれ！』

『畏りました、少尉殿……フレーブニコフ！我々の軍團長は誰方だ？』

フレーブニコフはぼんやりした眼付でぎよと〳〵下士を眺めてゐた。彼の開いた口からはちやうど嗄れた烏の聲のやうに一樣なグーグーいふ音が出た。

『はき〳〵言つてしまへ！』と下士は毒々しく叫んだ。

『閣……』

『うむ、閣……それからなんだ？』

ロマショーフはこの時ちよつと側方を向いてゐたが、シャポワレンコが低い嗄れた聲で

かう附足したのを聽いた。

『よし、待つてゐろ！學科が終つたらきさまの醜面をはりとばしてやるから！』

が、この瞬間ロマショーフが彼の方を振向いたので彼は大きな聲で何氣ないふうに言つた。

『閣下だよ……さあそれから先は、フレーブニコフ！それから！』

『それは……歩兵……中將』とフレーブニコフは悸々して斷れ斷れに呟いた。

『あ、あ！』とシャポワレンコは齒を剝き出して唸つた。『フレーブニコフ！きさまはどうしやうもない奴だな。俺は一生懸命にきさまを敎へてるのに、きさまは全然駱駝のやうになまけて、少しも勉强してゐない。「學科」の終る迄眞直に突立つて居れ。そして晝食後は俺のところへ來て、一人で稽古するのだぞ。では、クレチェンコ！我々の軍團長は誰方だ？』

《今日もこんなで、明日も明後日もこの通りなのだ。俺の生涯の終りまでしよつちう一つことばかりやつてるのだ。》と、ロマショーフは小隊から小隊と見廻りながら思つた。《いつそのこと、何もかもうつちやつて退職しようか知ら……あゝ退屈だ……』

「學科」の後に兵卒は庭で射撃をした。ある部隊では鏡を標的に狙つてゐるのもあれば、又ある部隊では散彈で標的を撃つてゐるのもある。また他の部隊ではリフチャクの器械を標的に騎銃で撃つてるのもあつた。第二小隊ではルボーフ見習士官が快活な甲高な中音で練兵場中へ響くやうに、

『前面に向ひ……横隊……一齊射撃……一、二！小―隊……』と、彼は終ひの聲を引延してちよつと間を置いて、やがて短く投げ出すやうに言つた。

『撃て！』

撃鐵が一齊にかち〳〵と鳴つた。と、ルボーフは愉快さうに氣取つた聲でまた叫んだ。

『撃方止め……』

スリーワ大尉は身を屈めてハロ〳〵したふうで各小隊を見廻つて、姿勢を直しては簡短な荒つぽい注意をした。

『腹を引け！妊み女みたやうな立ち方をしてゐる。その銃の持ち方はなんだ。ささま蠟燭を捧げてゐる輔祭ぢやあるまいし！どうして口を開けてるんだ、カルターショフ？粥でも

食ひたいのか？おい、曹長！教練が終つたらカルターショフを一時間銃を持つて立たせておけ、この鈍間野郎！ウェデネーエフ！ささまはどうして外套をずり落してるんだ？馬鹿野郎！このの、ら、くら者！』

射撃の後、兵卒は銃を組んで、と、ろ〳〵靴で踏み躙られた春の若草の上に横になつた。暖い朗かな日である。空氣は舗道の兩側を縁どつてゐる白楊の若葉の匂ひがしてゐた。

ウェーッキン中尉はまたロマショーフの傍へ來て、

『何をクヨ〳〵してるんだ、ロマショーフ君！』と彼はロマショーフの手を取つて言つた。

『何をぼんやり突立つてるんだ？今に教練が終つたら集會所へ行つて一杯やらう。さうすれば何もかも忘れつちまふさ、え？』

『私は退屈です、中尉殿！』と、ロマショーフはいかにも退屈さうに言つた。

『實をいへば面白くはないさ』と、ウェーッキン中尉は言つて、『だが、他にどうしようもないぢやないか！しかし兵卒だけは訓練しなければならぬ。でないといざ戰爭といふ場合に困る。』

『戰爭ですッて？』と、ロマショーフは悲しげに答へた。『ですけど戰爭ってなんのために戰爭をするのです？これは社會一般の迷ひか、世界的過失か、發狂じみたことか、どちらかに違ひありません。一體人を殺すといふことが自然でせうか？』

『やア、また哲學が始つたな。では、若し我々をドイッ人が襲つて來たらどうする？誰がロシヤを防禦するのだ？』

『私は何も知りません、また何も申しません、中尉殿！』と、ロマショーフは訴へるやうに優しく逆つた。『私は何も知りません。ですが、まあ例へば北米戰爭だとか、ボーア人だとか、ナポレオン時代のスペイン義勇軍だとか、またフランス革命時代のシュアン黨だとか……これらは必要に逼られて止むなく戰つたのです！普通の土百姓です、牧者です……』

『そりやボーア人のことだ……君はそれをゴッチャにしてゐるよ……まアそんなことはどうでもいゝ。僕の考へでは、そんなふうに思つてるくらゐなら、むしろ服務せん方がいゝね。それに我々の軍職にあつては一體物を考へるといふことは許れないのだ。唯問題はもし服務しなければ我々はどこへ行くといふことだね。右とか左とかいふことの他は、牛

や猫や鳥の鳴聲一つできない我々がなんの役に立たうさ。我々は死ぬことならできる。そりや實際だ。だから死ねといふなら死ぬさ。少くとも雷食つてばかりはゐないからね。さうだらう。哲學者さん。教練の後で僕と一緒に集會所へ行かうよ。』

『いゝですとも、參りませう。』と、ロマショーフはどつちでもいゝやうに承知した。『實をいへばこんなにして毎日時を送るのは實に穢しいです。もしそんなに思ふくらゐならいつそ勤務を止めるがいゝとはよく仰有いました。』

彼等は話しながら練兵場の中を行つたり來たりして、やがて第四中隊の傍に立停つた。兵卒等は組んだ銃の傍に坐つたり寢そべつたりしてゐた。ある者はパンを嚙つてゐた。兵卒等は一日朝から晩までどんな場合でも喰つてゐた。例へば檢閲中でも、演習の合間でも、「告白式」の前に聖堂にゐる時でも、それから笞刑を受ける時でさへも何か嚙つてゐた。

ロマショーフは誰かゞ冷かな、劈くやうな聲で呼んでるのを聞いた。

『フレーブニコフ！おいフレーブニコフ……』

『あ？』と澁々鼻聲でフレーブニコフが返事した。

『ささま自家で何をしてゐた？』

『働いてゐやした』と、眠さうな聲でフレーブニコフが答へた。

『何を働いてゐたかと訊くのだ、馬鹿野郎！』

『なんでも、土をほじくつたり、馬を飼つたりよ。』

『何をお前さんは彼奴に摯拗く聞くだよ？』と、古參兵のシュブイネフ爺さんが口を入れた。

『何を働いてゐたゝか分り切つてるぢやねえか。乳首にばかり嚙り付いてゐたんさ。』

ロマショーフは通り懸りにフレーブニコフの慘めな、灰色の、髭のない顏をチラと眺めた。

すると彼の心にはまたある落着かない苦痛の感が起つた。

『解け、銃！』と練兵場の眞中からスリーワ大尉が叫んだ。『將校諸君は各自の部署に就け！』

銃がが、た〳〵と鳴つて、銃劍がが、ちや〳〵かち合つた。

兵卒等は慌てゝぶつつかり合ひながら銘々の場所に立停つた。

『氣を着け！』と、スリーワ大尉が號令した。『準へ！』

それから中隊の傍へ近寄つて彼は節を付けて叫び始めた。

『操銃法を分解して各部高聲に數へよ……中隊、捧げ銃！』

『一！』と、兵卒等が呶鳴つて銃を右肩の前に上げた。スリーワ大尉は徐々と隊列を見廻りながら（床尾右！銃劍をもつと上へ！床尾をもつと身體へ着けろ！）などゝ斷れ斷れな注意をした。やがてまた中隊の正面へ戻つてきて、

『二！』と號令した。

『二！』と、兵卒等は叫んだ。

スリーワ大尉はまた隊列を見廻り歩いて操銃法の整頓と規律とを正した。

『分解操銃法の後、連續操銃法に移つて、それから方向轉換をしたり、二列になつたり、銃劍を附けたり、脫つたり、その他いろんな操作をやつた。ロマショーフは自動機のやうに操典の要求する限りのことを殘らず實行した。が、ウェーツキン中尉が何氣なく言つた言葉が彼の頭から拔けなかつた。（もしそんなふうに考へてるくらゐなら勤めてる必要はない。むしろ退職してしまつた方がいゝ。）陸軍制規の命ずる凡ての技術、例へば敏捷な旋轉

や、活潑な操銃法や、歩調行進中の確乎した足の踏方や、戰術や、築城術――凡てこれ等のことに彼は自分の生涯の最も大切な九年間を費してしまつた。そしてそれが彼の餘生を完うさせる筈であつた。つひ近頃までも彼はさうした事を非常に重大な賢い勤務だと思つてゐたのだ。ところが、ふいにこれ等のことが彼にはある退屈な、不自然な、無理に考へ出されたものゝやうに思はれた。同時にこれ等のことが世界的自欺から生じた無意味な、目的のない馬鹿げた譫言の樣に思はれた。

教練が濟むと彼はウェーツキン中尉と集會所へ行つた。そして二人で無暗にウオッカをあほつた。ロマショーフは正氣を失つてウェーツキンと接吻したり、また彼の肩に縋つて生の空虛や、退屈や、自分を解してくれるものがないといふことや、また自分をある女が愛してくれないことや、そのある女が誰であるかはいつ何人にも知ることができないなどゝいふことを訴へながら、大きな、神經質的な涙をぼろ〳〵溢して泣いた。ウェーツキン中尉は酒盃をぐい〳〵飲み乾しながら、たゞ時々輕蔑ひやうな同情を以て言つた。

『みつともないぢやないか、ロマショーフ君！君は飲めないんだな。たつた一杯飲んだき

りでもうぐでん〳〵になつてしまふなんて。』

と、やがて中尉は拳でどしんと机を敲いて威嚇すやうに叫んだ。

『死ねつていふなら、死なうぢやないか！』

『死にませう。』と、訴へるやうにロマショーフは言つた。『死ぬのがなんです。死ぬなんかなんでもありやしません……私の心は痛んでるんですから……』

ロマショーフはどうして家へ歸つたか、誰が彼を寢床に寢してくれたか覺えてゐなかつた。彼は無數の微細な火花の散り擴つてゐる濃い青い霧の中に漂つてゐるやうな氣がした。その霧が靜かに上下に搖いでゐて、その動く度毎にロマショーフの身體を上げたり下げたりするやうであつた。そしてその旋律的な動搖のために少尉の心臟は弱つて麻痺れて厭ないら〳〵した嘔煩くやうな氣分に惱んだ。頭は馬鹿に大きく量張つて、膨んだやうで、その中で何者か摯拗い殘酷な聲で呶鳴つて、ロマショーフに堪らない苦痛を感じさせてゐるかのやうであつた。

『始め一！始め二！』

十二　獸　舍

四月廿三日はロマショーフにとつては非常に忙しい、非常に變な日であつた。朝の十時頃少尉がまだ寢床に寢てゐる頃、ニコラーエフ中尉の從卒ステパンがシューロチカからの手紙を持つて來た。

（懷しきローモチカ樣）と彼女は書き出して、（あなた樣がたとへ今日の私共二人の誕生日をお忘れ被遊候とも妾は格別驚き申さず候。此事に就いてあなた樣に想ひ出させるためにこの手紙差上申候。いろ〳〵の事情も有之候へど、しかし妾は本日是非あなた樣に御目、もじ致し度存じまゐらせ候。たゞ晝間のお祝ひにはお出で下さらずとも、五時頃には是非お出で下され度候。ドゥーベチナヤへ野遊びに御伴致し度候へば。あなたのシューロチカより。）

ロマショーフが讀んでる間、手紙は彼の手の上で顫へてゐた。もう、まる一週間も彼はシューロチカの可愛らしい顏を見なかつた——ある時は愛嬌のある、ある時は嘲笑つてゐる、

またある時は懷しさうにまじ〳〵と睜つてゐる彼女の顏を見なかつた。彼女の優しい、力のある魅力に接しなかつた。（今日だ！）と彼の心の中にふと樂しい叫びが嬉しく響いた。

『今日だ！』とロマショーフは大きな聲で言つて、洗足のまゝ寢臺から板の間へ飛び下りて、『ガイナーン！顏を洗ふよ！』

ガイナーンが入つて來た。

『少尉殿！從卒が待つてをります。お返事をお書き下さりますかつて訊ねてをります。』

『おゝ、さうか〳〵！』とロマショーフは眼を睜つて心持躊躇んだ。『チョッ……彼奴に茶を出さなきやならんが、俺のところには何もない。』と、彼は躊躇ひながら從卒の方を見た。

ガイナーンはにた〳〵と嬉しげに微笑んだ。

『私にもやつぱりありまへん……あなたにもなければ私にもありまへん。えい、何が要るもんですか！無くたつていゝでがせう。』

ふと、ロマショーフの記憶に、あの闇い春の夜と、泥濘と、彼が寄り添うて歩いた、あの濡れて滑々した柴垣と、それから暗闇の中から聞えた、（毎日々々歩いて歩いて歩き拔いて

ねらあ……）といふステバンの冷かな聲とが、ちらとさらめいた。同時にあの時の自分のたゞらない羞しさが思ひ出された。あゝ彼は今二十錢さへ手に入ればどんな未來の幸福とでも取代へたゞらうに！

ロマショーフは兩手で強く顏を痙攣的に擦つて、はては昏亂してくん〳〵言つた。

『ガイナーン！』と、彼はおづ〳〵戸に觸りながら呟いた『ガイナーン、きさま行つてね、彼奴に少尉が今夜はきつと茶を御馳走するからと言へ。いゝかね、きつとだぞ。』

ロマショーフはその頃ひどく貧乏してゐた。で、食堂にも、將校會計課にも、將校貯金課にも信用がなくなつてゐた……唯集會所で食事を取ることだけはできたが、それさへ酒も肴も付いてゐなかつた。彼には茶や砂糖さへなくなつた。が、ただ一つ運命の可笑な惡戯で大きなコーヒーの鐵葉箱が殘つてゐた。ロマショーフは毎朝それを砂糖なしでぐいぐいと飲むのであつた。して彼の後で、やつぱり同じ運命に諦めたやうに、ガイナーンがそれを飲盡してしまふのであつた。

今も拙さうな澁面をして黑色の強い苦い濁り水を飲ながら少尉はつく〳〵自分の身の上

を思つた。（うむ……第一贈物を持たないでどうして出られやう。菓子折か、それとも手袋か？だが、彼女の手が何文くらゐだか分らない。菓子にしよう？いや何よりも香水が一番だ。こゝの菓子と來たら、そりや下等だからな……扇子にしようか？うむ……さうだ、香水よりかましだ。彼女はエース・ブケーが好きだつけ。それからビクニックの費用だ。往復の馬車賃が多分五ルーブルと言ふだらう。それからステバンの酒代に一ルーブル！さうだ、ロマショーフ少尉殿、あなたは十ルーブルなくつちや駄目だぞ。）

で、彼は頭の中であらゆる財源を考へて見た。俸給にしようか？だが、彼は昨日受領證に（右正に受領候也——少尉ロマショーフ）と書いたばかりだ。それに彼の俸給は、俸給仕拂簿に餘白のない程、キチン〳〵拂はれてゐたので、少尉は一錢も受取ることができなかつた。或は前借をしようかとも思つたが、この手段はもうこれまで三十回程も試みていつも失敗に終つた。それも、ドロシエンコ二等大尉が主計をしてゐたからであつた。彼は「下級將校」に對しては殊更に陰險で嚴格な男であつた。彼は露土戰爭の際負傷したが、それがあやにく踵といふ一番不都合な間の惡い場所であつた。しかし彼はその傷を逃走の際

に受けたのではなく、自分の小隊に襲撃の命令を下さうとして後ろを向いた時に受けたのであつたが、その傷に對していろんな冷笑や諷刺を始終浴せかけられたので、出征の際は樂天的であつた大尉も歸る時は怒りつぽい、いらだち易い神經質の男になつた。だからドロシエンコ二等大尉は決して俸給を前渡しするやうな男でない。それにロマショーフはもう月の十日に受領證を書いてあるんだからとても望みがない。

（だが悲むまい！）とロマショーフは獨言を言つた。（まア貸して呉れさうな將校達をみんな數へ上げて見よう。中隊から始めて、順々に。まづ第一中隊ではオサッチイ大尉だ。）

ロマショーフの前には吃驚する程美しいオサッチイ大尉の顏と彼の重々しい野獸のやうな眼付とが浮んだ。いや彼奴はいけない。彼奴のほかに誰か都合の好い奴はゐないだらうか、たゞ彼奴のほかに。第二中隊にはタリマン大尉がゐる。此奴は人は善いが、誰彼の見界なくいつも金を借りてゐる。見習士官からさへ借りてゐる。此奴も駄目だ。フーツインスキイはどうだらう？

ロマショーフは考へ込んだ。彼の頭には聯隊長のとこへ行て金を借りて來ようといふ恐

かしい、小兒らしい考へが浮んだ。（どうだらう！彼奴さつと始めは恐怖のために固くなつて、それから氣が亂れて、ふら〳〵顫へ出して、やがて曰砲のやうな聲を出してがなり立てる。なんだと？默れ！ウフ！）

少尉は聲に出して笑つた。いや、構はない。何か考へ付くだらう！こんなに樂しく始まつた日が不成功に終ることはあるまい。勿論、それはどうなるか、とても解ることではないが、しかしどこか心の奥では確かにさうと感じられた。

『チユウェルヌア大尉はどうだらう。彼を兵卒等は洒落にドウェルニイ、ノガー（足を廻せと云ふ意味）と呼んでゐた。それと同じやうにブヅベルク・フオン・シャウフスといふ將軍をその部下の卒共はブウツカ、ザチェハウズと呼んだといふ話がある。いやチユウェルヌアは吝嗇で俺を嫌つてる――俺はよくそれを知つてゐる…』

かうして彼は第一中隊から第十六中隊までの中隊長を殘らず數へ上げて、列外中隊長までも數へた。それからほつと溜息を吐いて、下級將校へ移つた。彼はまだ成功の確信を失はなかつたがそろ〳〵なんとなく心配になつて來た。と、突然彼の頭に一人の名前がチラ

と閃めいた、(ラフアリスキイ中佐！)

『ラフアリスキイ中佐に限る！ほんとに俺は頭痛がする程考へた！……ガイナーン！服と手袋と外套を、大急ぎで！』

ラフアリスキイ中佐は第四大隊長で、年取つた、風變りの獨身者であつた。聯隊では戯談に、勿論蔭口ではあるが彼をブレーム中佐と呼んでゐた。彼は復活祭と新年の公の訪問の他は朋輩のところへも行つたことがない。そして勤務には頗る無頓着で、しよつちう譴責と教練への嚴しい召出しとを受けた。彼は凡ての時間と、凡ての配慮と、さてはどこにも注ぎどころのない愛情と戀着とを自分の可憐な動物——鳥や魚や四足獸に傾けた。それ等は彼の家に一つの大きな風變りの獸舍を造つてゐた。聯隊貴婦人等は彼が自分等に眼もくれないのを心の底で恨みながら、これ等の動物がラフアリスキイ中佐のところでどうして生きてることができるか解らない、などゝ言つてゐた。(あゝ何て怖いことでせう、あんな獸を集めて！おまけに尾籠な話ですが——あの臭いことつたら！ふう！)

ブレーム中佐はあらゆる自分の貯蓄を獸舍の爲に費した。此奇人は自分の費用を極端に

節約して外套や軍服といつたらいつの時代のだか知れないやうなのを着てゐた。碌に眠もせず、また食事は十五中隊の釜のものを食つてゐた。それでも彼が賄の方へ兵卒等の副食料にと出してゐた額は極めて僅かなものであつた。しかし彼は友達、殊に下級將校等に對しては手許に金がありさへすれば少しくらゐの融通をするのは辭さなかつた。だが、事實を言へば彼に借金を返すのは何故か可笑しいやうに思はれてゐた。その爲めにも彼は奇人ブレーム中佐として聞えてゐた。

ルボーフのやうなづう〜しい見習士官達は彼のところへ二ルーブルくらゐ借りに行く時は(獸舍を拜見に上りました)と言ふのであつた。これが老獨身者の心と懷とへ近づく手段であつた。(中佐殿！新しい動物はゐませんか？何うか見せて下さい。あなたのお話はほんとに面白いです……)

ロマショーフもやつぱり彼のところへ度々出掛けた。が、これまでは別段利慾のために行つたのではなかつた。彼は實際特殊な、優しい、熱切な愛情を籠めて動物を愛してゐた。モスクワで、幼年學校にゐた時も、士官候補生だつた頃も、彼は劇場などよりは競馬場へ

行く方が遙かに好きであつた。動物園は尙更好きで、あらゆる獸舍へ度々足を運んだ。小兒の時代の彼の空想はセン、ベルナールを持つことであつたが、今は縞かに大隊副官になつて馬を得たいといふ望みを抱いてゐた。しかし二つの空想がいづれも實現されさうもなかつた。小兒の時分には彼の家庭の貧しいために實現されなかつた。それからまた大隊副官にはとても任ぜられさうもない。なぜなら、彼は所謂「代表的タイプ」を備へてゐないから。

彼は家を出た。暖い春の空氣はしつとりと、愛嬌よく彼の頰を撫でた。雨あがりの乾いた土の粘りッけが足の下から心地よく感じられた。塀の中から野薔薇や連翹の白い蕾が濃く低く往來に垂れ下つてゐた。ふとロマショーフの胸の中には、恰も彼が今にも飛び上らうとしてゐるかのやうに非常な力を以て何かしら込み上げて來た。あたりを見廻したが街道には誰も居なかつたので、彼は懷からシューロチカの手紙を取出して讀み返した。そして彼女の名の所へきつく唇を壓し當てた。

『愛らしき空よ！愛らしき樹々よ！』と彼は濕んだ眼色をして呟いた。

ブレーム中佐は高い綠色の透垣を繞してゐる庭の奥の方に住んでゐた。耳門には簡單な貼札がしてあつた、(犬あり鈴を押して入るべし)と。ロマショーフは呼鈴を押した。と、耳門から髪の蓬々した、懶さうな、ぼんやりした從卒が出て來た。

『中佐殿は御在宅かね？』

『さアどうぞよ少尉殿！』

『まアきさま先に行つて取り次いで來い！』

『ようがすよ、さア、お入んなせい。』と從卒は寐ぼけたやうに腿をぽり〳〵搔いた。『主人は取次ぎなんかすることは大嫌ひでがす。』

ロマショーフは煉瓦を舗いた道を家の方へ通つて行つた、隅の方から二匹の、大きな、若い、耳の短い鼠色の犬が飛び出した。その一匹が大聲で、しかし愛想よく吠えた。ロマショーフは、犬の方へ指をバチ〳〵鳴した。と犬は躍氣となつて前足を左右に蹈かせながら一層大きな聲で吠え出した。その同伴の犬はロマショーフの後にくつついて來た。そして好奇さうに彼の外套の裾を嗅いだりした。庭の奥の綠の若草の上には小さな羊が立つて、

春の日光を浴びながら、さも滿足さうに眼を細めて、耳をぴく〳〵動してゐる。そこには牝鷄や、いろんな色の雄鷄や、鴨や、嘴に瘤のある鶯鳥などが歩いてゐた。珠鷄がけたゝましく鳴いてゐる。華かな七面鳥の雄が尾を垂れて、翼を地面に引摺りながら高慢さうに、なまめかしく、頸の細い牝の周圍を駈け廻つてゐる。水槽の傍には大きな薔薇色のヨルクシール種の豚が、横腹を地面に着けて寢ころんでゐる。

ブレーム中佐はスウェーデン型の上表を着て窓の傍に、入口を後ろにして立つてゐた。で、ロマショーフの入つて來たのに氣が付かなかつた。中佐は硝子の水槽の傍を歩き廻りながら、その中に手を肘まで突込んでゐた。で、ロマショーフは二度ばかり大きな咳拂ひをした。すると中佐はやつと舊式な龜甲緣の眼鏡を掛けた痩せこけた髯むしやな長い顏を振り向けた。

『あゝ、ロマショーフ少尉か！さあどうぞ、どうぞ……』とラフアリスキイ中佐は愛想よく言つた。『免〻して呉れ、手が出されない—濡れてるので。見給へ、俺は新しい吸揚器を拵へたよ。前のやつを簡單にしたところが奇妙に出來上つたのさ。お茶を飲むかね？』

『ありがたう存じます、もう飲んで參りました。私は、中佐殿、實は……』

『君は聽いたかな、聯隊がよそへ移動するとかいふ噂があるさうだが』と、ラフアリスキイ中佐はさも今途斷れた許りの話を續けるやうな調子で言つた。『君どうだな、俺はまつたく失望してしまつたよ。まあ、考へて見給へ。俺はどうしてこれだけの魚類を持つて行かれよう！半分は死んでしまふぢやないか。それから水槽と來たら猶更厄介だ。硝子は御覽の通りに長さが二間近くもあるのだ。あゝ君！』と、彼は急に他の話題へ飛び移つて、『俺はセバストーポリで何といふ水槽を見たらう！まるで貯水池だな……實際この室に海水を流し込んだやうな石造の水槽だつた。それに電氣が點いてるのさ！立つてゐて上から魚がどんなに住んでゐるかゞよく見えるのだ。鱈魚、アクーラ、鮪魚、海鷄！どれもこれも可愛いゝ顏をしてゐたねえ！それから海猫もゐたが、それが君直經三尺五寸もある薄餅のやうさ。かう浪形に尾鰭を動して、後ろに矢のやうな尻尾がくつついてね……俺は二時間も立つて見てゐたよ……何を君は笑ふのだ？』

『御免なさい……今あなたの肩の上に白鼠が坐つてゐるのを見ましたので……』

『あつ、この野郎！どこへ這ひ上るんだ！』

と、ラフアリスキイ中佐は頭を振向けた。そして非常に細い鼠の鳴聲のやうにチュウと唇を鳴らした。それが接吻のやうであつた。小ッぽけな、眼の赤い、白い動物は彼の顔のところまで下りてきて、身體中をぶるつと慄はせて、慌てたやうに自分の顔を中佐の髯と口とに頰ずりした。

『ほんとによくあなたを見知つてゐるんですね！』とロマショーフは言つた。

『さう……見知つてるよ』と、ラフアリスキイ中佐は溜息を吐いて頭を振つた。『だが、不幸なことは我々が彼等を知らないことだね。人は犬を馴したり、馬をしつけたり、猫を教へたりするが、そんなことがなんだ——我々はそんなことは知りたくもない。ある學者などは下らない大洪水前の言語などを説明するために一生を獻げてゐる。して、それを彼等は生きながら聖人にでもされたやうな名譽だと思つてゐる。だが……君その犬でもいゝから例に取つて見給へ。我々とごく接近して生きて考へてゐる怜悧な動物だ。しかも一人の助教授でも彼等の心理を研究してゐるものがあるか！』

『あるひは幾許か努力はしてゐるかも知れませんが、我々はそれを知らないのでせう？』

とロマショーフは悸々しながら言つた。

『努力？ふむ……勿論中には偉い奴もあるさ。ほら見給へ、僕のところにも圖書館がある』と中佐は壁際にズラリと並んだ本棚を指示した。『書いてることはみんなえらいことで頗る徹底したものだ。なんしろえらい博識さ！素晴しい驚くべき鋭敏な能力だ！……しかし俺の言ふのはそんなことぢやない！彼等は一人として目的を達したものはない。いや犬や猫をたつた一日だけでも注意して觀察した者はない。まあ君、來て見給へ、犬がどんなに生活してゐるか、何を考へてゐるか、どんな狡猾いことをするか、又どんなに苦しむか、どんなに喜ぶか、まア注意して見給へ。それから俺は動物表情の巧い滑稽者達が動物をどれほど研究してるかを見たことがあるよ。それは實に素的なものだね！……まあ君あの催眠術のことを考へて見給へ。僞りのないほんとうの催眠術をさ！キエフのある旅館で一人の動物表情の巧い滑稽者がどんなことをして見せたか——それは實に吃驚するやうな、殆ど信ぜられんほどのことだつた！だが君考へて見給へ、

それが普通の滑稽者なんだ！だがもしそれをまじめな學識のある實驗のうまい動物學者が彼等の學術の方法でやつたとしたらどうだらう。さうしたら犬の智力や、性質や、數の智識や、まだいろんなことに就いてどんな驚くべきことを聽いたゞらう！まア一つの世界だね――大きな面白い世界だよ。君はどうか知らんが、僕は犬には犬の言語、非常に複雜な言語があるといふことを確信してゐるね。』

『そんならなぜ學者達は今までそれを研究しなかつたでせう？』と、ロマショーフが訊いた。『ごく單純なことぢやありませんか！』

ラファリスキイ中佐は毒々しく笑つた。

『それがさ……へ、、、つまりその單純なためさ。諺にもある通り繩は只繩だ。彼等に取つては犬なんかなんでもない。脊椎動物で、哺乳動物で、猛獸で、犬屬だとかなんだとか言つてるだけだ。勿論それには違ひないさ。だが、君、人間や赤子や思想のある生物に親しむやうに犬に親しんで見給へ。學者達の持つてゐる學術上の誇りなんていふものはくだらないものさ。犬には靈の代りに湯氣があると思つてる百姓達とさう變りはないよ。』

から言つて中佐は默つた。そして腹立たしく鼻息をして唸りながら水漕の底につけてゐた護謨管を弄り始めだ。ロマショーフは氣を落着けて、

『中佐殿！私はあなたに大變なお願ひがあつて參つたんですが……』

『お金かな？』

『あなたに御心配を掛けましては、誠に濟みませんがちよつと、その、二三十留ばかり。すぐに御返しすることはできないかも知れませんが、しかし……』

ラファリスキイ中佐は手を水から引拔いて、それを手拭で拭き始めた。

『十留ならできるが、それ以上はむづかしい。十留なら喜んで貸すよ。君はしかし下らんことに使ふんぢやなからうね。いや〳〵、俺は戯談を言つたんだ。さあ彼方へ行かう。』

彼はロマショーフを連れて五つ六つの室からなつてゐる自分の家の中を引張り廻した。室の中には器具もカーテンもなかつた。空氣は小さな動物の棲家に特有な鋭い臭に浸つてゐた。板の間は足が滑る程汚れてゐた。

隅々に動物の棲や穴が、小屋の形や、空洞の木片の形や、底のない槽の形に造れてゐつ

た。二つの室には枝の茂つた樹が立つてゐた。一本は鳥類のため、一本は貂鼠や栗鼠のためで、どちらも巧みな空洞と巣とが附いてゐた。これらの動物の棲の造り方を見ても手間のかゝつた工夫と、動物に對する愛と、一方ならぬ注意とが感じられた。

『君はこの獸を見たことがあるか？』と、ラフアリスキイ中佐は鐵條網で造つた細かい垣で圍んである小さな小舍を指示した。小舍にはコップの底ぐらゐの半圓形の孔があつて、その中から二つの黑いギラ〳〵した點が光つてゐた。『これは世界で一番獰猛な、一番慓悍な動物だ。貂だ。此奴に較べると獅子や豹は柔順しい犢も同じだ。獅子は食ふだけの肉を食つてしまへばそれを離れてちやうど山狗が滿腹した時のやうに心地よさゝうに見てゐるばかりだ。ところがこの優しい先生が鷄小舍へでも入つたら、一羽の鷄だつて殘しはせぬ——必ず後ろからその腦天に喰ひ付くのだ。先生それまでは決して承知しないのだ。それにこの貂といふ奴は獸のうちでも一番暴い、一番馴し難い動物だ。おゝささま、この惡黨奴！』

中佐は手を垣の中へ差込んだ。と、直ぐに圓い入口から、小さな口をだらりと開けた、

怒つたやうな醜面が突出た。口には白い、鋭い齒がぎら〳〵してゐた。貂はちやうど腹立たしい咳のやうな聲を出して敏捷に出たり引込んだりした。

『見給へ、どうだ！もうまる一年も飼つておくんだが……』

中佐はロマショーフの願ひを全く忘れてしまつたらしかつた。彼はロマショーフを穴から穴へと連れ廻つて、彼に自分の寵愛者等を示しながらそれ等の動物について非常な興味と、非常な優しさと、また彼等の習慣や性質に關する深い知識とを傾けて、まるで自分の善良な親しい知人のことでも話すやうに話した。實際彼の獸舍は寂しい田舍町に住んでゐる同好者のためにはこの上ない整頓した動物陳列場であつた。白鼠、飼兎、天笠鼠、針鼠土撥鼠、それから硝子箱に入つてゐる五六匹の毒々しい蛇や、數種の蜥蜴や、二匹の尾長猿、黑いオーストリヤ種の兎、珍しい綺麗な白猫が一匹……

『どうだ？綺麗だらう？』とラフアリスキイ中佐は猫を指示しながら訊いた。『立派だといふのは嘘かね……だが、あまり感心しないて、馬鹿猫だから。どの猫よりも馬鹿だから。わ、まだ一つある！』と、突然彼は元氣づいて來た。『我々が家畜の心理に對して無頓着だとい

ふ證據がまだある。例へば猫や、馬や、牛や、豚について我々は何を知つてるだらう！ねえ、君、どれが一番優れて悧巧だらう？豚ぢやないか。いや、君、笑つちやいかんよ。』しかしロマショーフは笑はうとも思はなかつた。『豚は素的に悧巧だよ。俺の家の豚は去年えらい惡戯を考へ出したことがある。それは畑の肥料と豚の食料とに、ある砂糖製造場から俺のところへ酒糟を運んだ時のことだつた。それを見ると奴さん堪らなくなつて運搬人が俺の從卒のところへ行つてる間に、牙で樽の栓を引つこ抜いて、酒糟が零れ出るのを、鰐腹御馳走になつたのさ。それどころぢやない。一度などは栓を引つこ抜いたばかりでなく、それを畑へ持つて行つて畦の中へ埋めたこともあつたよ。君、豚は此の通り悧巧なものだ。實をいふと』と、ラフアリスキイ中佐は片方の眼を細めて狡猾さうな顔をして、『實をいふと、俺は今我家の豚の事に就いてちよつとした論文を書いてるよ……だが、シッ！……祕密だよ……誰にも。なんだか、キマリが惡いからな。名譽あるロシヤの陸軍中佐が俄かに豚のことなんか書きだしたといはれては。今俺のところにはイオルクシル產の豚がゐるよ。見たかね！見たければ見に行かう。あすこの俺の庭にはまだ雛もゐる。若い、可愛い雛

だ……行かうか？』

『ご免なさい、中佐殿！』と、ロマショーフは吃つて、『私は喜んで拜見致したいですが、實は少し急ぐことがありますので。』

ラフアリスキイ中佐は掌で自分の額をぴしゃんと打つて、『あゝ、濟なかつたね、免してくれ。俺は老耄れつちやつて、つひ無駄言ばかり言つてゐたもんだから……さあ、さあ、彼方へ行かう。』

彼等は小さな明き間へ入つて行つた。其處には舟底のやうに敷布團の凹んでる低い野營臥床と、寢室用の卓と、床几との外は一切何もなかつた。ラフアリスキイ中佐は卓の抽斗を開けて金を取出した。

『さあ、君の用に立つなら喜んで貸さう。少尉！喜んで貸すよ。さあ、これだけだ……なに、お禮が要るものか！……なんでもないさ……俺は喜んで貸すよ……また、閑があつたら寄り給へ！話さう。』

街道へ出ると、ロマショーフはいきなりウェーッキン中尉に出遇した。中尉の鼻髭はば、

さ〜〜に亂れてゐて、ハイカラに兩方へ壓圓められたやうな、錫の附いた帽子は雄々しく斜めに被さつてゐた。

『あゝ！ハムレット王子！』とウェーツキン中尉は嬉しさうに叫んだ、『どこからだ。どこへ行くのだ？おや、君はまるで誕生日でも祝ふやうに輝かしい顏をしてるね。』

『え、誕生日を祝うんですよ』と、ロマショーフは微笑んだ。

『さうか？それは素的だね。では、僕の熱い抱擁を受けてくれ給へ！』

彼等はそこの街道で熱い接吻を交した。

『ではどうだ。集會所へ寄らうぢやないか？』と、ウェーツキン中尉が勸めた。

『いや、駄目です、中尉殿！私そんなことをしてはゐられません。ですがあなたは今朝はどもうさんざ駈け廻つたと見えますね！』

『おゝ！』とウェーツキン中尉は意味ありげに傲然と下顎でしやくつた。『僕は今日カルタに勝つて例の大藏大臣をやきもきさせてやつたよ。』

『それはほんとうですか？』

ウェーツキン中尉のコムビネーションは至極簡單ではあるが、實に奇拔な遣口だつた。恰度聯隊附裁縫師のハイムが仲間に入つてゐて、ウェーツキン中尉から二組の軍服の受取證を貰つたのだが、實際は發明なウェーツキン中尉が裁縫師から受取つたのは軍服でなく、現金三十ルーブルであつた。

『そしてどゝのつまり二人共滿足したといふ譯さ』とウェーツキン中尉は嬉しさうに言つた。『あの猶太人も三十ルーブル吐出した代りに軍服支給所から四十五ルーブル貰へるから滿足さ。それから僕も今日集會所であの遊び仲間の腹を溫めてやることができるから滿足さ。どうだね？うまくやつてのけたらう？』

『うまいですなあ！』とロマショーフは點頭いた。『今度また詳しく承はりませう。では失禮致します、中尉殿！うまくやつてお出でなさい。』

彼等は別れた。が、行きかけて直ぐウェーツキン中尉は友を呼返した。ロマショーフは振返つた。

『眼含を見たかね？』とウェーツキン中尉は肩越しに母指でラファリスキイ中佐の家を指示して、狡猾さうに言つた。

ロマショーフは點頭いた。そして力强く言つた。『ブレーム中佐ははんとにえらい方ですね！』

『まア申し分のない人間さ！』とウェーツキン中尉は同意して、『一種の精神家だね！』と、言つた。

十三　誕生日

ロマショーフは五時頃にニコラーエフの住んでゐる家まで馬車に乘つてきた。が、今朝あれ程に今日の首尾を嬉しく思つてゐた心が、いつの間にやら消えてしまつて、その代りになんだか變な譯の分らない不安が起つてきたのを感じて彼は今更のやうに驚いた。彼はそれが今突然起つたのではなく、いつかずつと前に起つたやうな氣がした。不安はあるちよつとした瞬間から始まつて、知らないうちに彼の心のうちにだん〳〵と擴がつてきたのだ。これは一體なんだらう？かうしたことは以前小兒の時代にもよく起つたことがある。して、彼はその不安を鎭めるためにはその曖昧な不安の最初の原因を探し出さねばならないといふことを知つてゐた。ある時はこんな風に一日悶え通して夕方になつてから、やつとその原因に思ひ當つたことがある。それはちやうど正午に停車場附近の軌道を横切りながら不意に汽罐車の耳を聾するやうな汽笛に驚かされたのであるが、自分ではそれと氣が附かずに、たゞ何となく不快な氣分になつたのである。ところがその原因が分ると、忽ち

氣が清々して來て愉快にさへなつた。

で、彼は急に今日中の印象を逆さに記憶の中で數へて見た。スウキデールスキイ商店。香水。レイバを馭者に雇つたこと。彼が巧みに馭したこと。郵便局で時間を質したこと。晴々した朝。ステバン……ほんとにステバンが原因ぢやないかしら？いやさうぢやない。ステバンのためには懐中に特別に一ルーブルだけ準備してある。はてな、これは一體どうした譯なんだらう！なんだらう？

ニコラーエフの家の塀の傍にはもう三臺の二頭馬車が立つてゐた。二人の從卒が鞍を置いた馬の手綱を持つてゐた。それはこのあひだオリザール中尉が軍馬拂下所から買つた栗毛の年老つた去勢馬と、ベーク・アガマーロフ中尉の怒つてるやうなギラ〳〵した眼付をしてゐるすらつとした性急な金色の牝馬とであつた。

《あゝ、手紙！》とロマショーフはふと思ひ出した。《「いろ〳〵の事情も有之候へど」といふあの變な文句……それに圏點まで打つてある……何事があるといふのか？或はニコラーエフが俺の事を怒つてるのかも知れん！嫉妬でも燒いてるのか？或は誰かの中傷かしら

！さう言へばこのあひだからニコラーエフは俺には妙に素氣ないやうだ。いつそのこと、通り過ぎて了はう！》

『先へ！』と彼は馭者に叫んだ。

が、すぐに家の戸が開いたのを、彼は聞いた譯でも見た譯でもないがそれと感じた。自分の心臓の甘い烈しい動悸で感じたのである。

『ローモチカさん！貴方まあどちらへいらつしやるの？』と彼の後ろからシューロチカの愉快さうな甲高な聲が聞えた。

彼はレイバの帶をちよつと引張つて馬車から飛び降りた。シューロチカは開いた入口の暗い闇の中に立つてゐた。彼女は右脇から帶のあたりにかけて赤い花模樣の附いた、白い、滑々した着物を着てゐた。同じやうな花が彼女の髪の毛にも輝かしく溫かさうに赤らんでゐた。妙なことにはロマショーフはこれがまがひもなく彼女だといふことを知つてはゐたが、なんだか、確と見別けることができなかつた。今日の彼女はなんだかまるで人が異つてゐて、華やかに光つてゐた。

ロマショーフがお祝ひを述べてゐる間、彼女は彼の手を自分の手から放さずに、優しく親しさうに引張つて、薄暗い應接間へ連れ込んだ。そして彼女は口早に低い聲で言つた。

『お出で下さつてほんとに有難いわ、ローモチカさん。私はまたあなたが聽いて下さらないかと思つて、氣が氣でならなかつたのよ。ようございますか、今日は溫順しく、愉快に遊んで下さい。どんな事にもお氣を留めないでね。あなたはほんとに可笑な人ですもの。ちよつと觸つてもすぐに悄げ返つてしまふんですもの。ほんとにあなたは合歡の木のやうな羞みやさんですわね。』

『シューロチカさん……今日のあなたのお手紙には吃驚しましたよ。あれに一つ變な文句がありましたね。』

『あなた、あなたそんなことを仰有つてはいけません……！』彼女は男の両手を取つて強く握り緊めながら、彼の眼を眞正面に見詰めた。その眼色にはまたしてもロマショーフの全く見知らぬ宥めすかすやうな優しさと、戀しさと、不安とが浮んでゐた。そのもつと奥の謎のやうな青い瞳の底には隱れた暗いものを語つてゐる妙な、了解し難いあるものが潛ん

でゐた……

『どうぞ、大したことではありませんから、今日はそのことを考へないで頂戴……私がしよつちうあなたのお通りになるのを見張つてゐたのが、あなたのお氣に召さないの？私はあなたが臆病者だといふことをよく知つてますからね。そんなに私を見詰めてはいやよ！』

彼女はそわ〳〵して、急に笑ひ出して手を放した。

『さあ、もう充分よ……ローモチカさん、あなたはそゝつかしやね、まだ私の手を接吻なさらないわ！えゝさう〳〵、今度は此方の手を。さうよ。お利巧さんですこと。さああちらへ參りませう。ね、今のことをお忘れなさらないで頂戴！』彼女は慌だしく熱して呼いた。『今日は私共の日なのよ。アレキサンドラ（シューロチカの名）女王と、彼女の騎士ゲオルギイ（ロマショーフの名）の日なのよ。いゝですか？さア參りませう。』

『これはほんのおしるしですが……』

『まあ、なんですか？香水？あなたはなんて下らないことをなすつたんでせう！いえ、さ

うちやないのよ。私戯談なのよ。有難うございました。可愛いローモチカさん。ウォローヂヤや！』と彼女は客間に入りながら、大きな聲でさも自然らしく夫を呼んだ。『私共のビクニックのお仲間がもう一人殖えましたのよ。やはり今日誕生日に當つてるお方で。』

客間ではかういふ場合にいつもあるやうにがや〳〵と混雑してゐた。

春の光線が束ねたやうに斜めに窓から射し込んで、その光線に貫かれた濃い煙草の煙が空色に見えた。客間の中央には七八人の將校が賑かに話しながら立つてゐた。みんなの聲を壓して脊の高いタリマン大尉が間斷なく咳をしながら嗄がれた聲で大きく叫んでゐた。そこにオサッチイ大尉と、オリザール副官と、ペーク・アガマーロフ中尉と、尖つた棘々しい顔付の、背の小さい、元氣なアンドルセーウイチ中尉と、他にまだ誰かゐたが、ロマショーフはすぐには見分け得なかつた。めかした大きな人形のやうに髪粉を振かけて、こつてりと厚化粧をしてゐるタリマン夫人は微笑みながらミーヒン少尉の二人の妹と長椅子に坐つてゐた。二人の令嬢は揃ひの質素な、手縫の、緑のリボンの付いた白い柔らかな衣服を着てゐた。二人共髪の黒い、黒眼勝ちな娘で、薔薇色の顔には黄斑があつた。齒並が

二人共不揃ひで悪かつたが、眩いほど白くつて、彼女等の鮮かな口に特別な美しさを添へてゐた。二人共氣質のいゝ快活な娘で、お互によく似よつてゐた。取り分け醜男な兄にそつくりであつた。聯隊貴婦人のうちからはまだアンドルセーウキチ夫人も招かれてゐた。この女は顔の小さな、色白の、肥太つた愚かしい飄輕な女で、いろ〳〵に意味の取れるやうな卑しい物語が非常に好きであつた。それからお饒舌で舌縺れのするルイカーチエフの令嬢等も招待されてゐた。

いつもの將校集會所でのやうに婦人等は男子と離れて特別に一團になつてゐた。彼女等の側の安樂椅子には二等大尉ディーッが無作法にだらしなく寢ころんでゐた。この將校はそのデレ〳〵した體つきと、尊大な己惚れた顔とで、ちやうどドイッのポンチ畫に描いてあるプロシャ將校にそつくりであつた。彼はあるうしろめたい行爲のために近衛から歩兵聯隊へ移されたのだ。彼は男子に向ふと度し難い程尊大な態度を執る。婦人には大膽な冒險で有名な男である。そしていつも大勝負の運づよいカルタを取つてゐた。しかしそれは將校集會所ではなく、文官倶樂部か、市役人の家か、近くのポーランドの地主の家かで

あつた。聯隊では誰も彼を好かなかつた。が、しかし、みな恐がつてゐた。なぜかみんなは將來彼から何か口汚ないひどい攻撃を受けるやうな氣がした。彼は同じ町に住んでゐる老耄れた旅團長の若い細君に關係してゐるやうな噂があつた。また彼がタリマン夫人と近しいことも公然の秘密であつた。で、彼女の相手に、いつも彼を客に呼ぶことに決まつてゐた—この聯隊獨特の禮儀と注意とがそれを要求したからである。

『よく來てくれたね』と、ニコラーエフ中尉はロマショーフを迎へながら言つた。『ほんとによかつたよ。なぜ君は朝のお茶に來なかつたのだ？』

彼は愛想よい微笑を浮べて何心なく言つた。が、しかしロマショーフには彼の聲と眼付のうちに例の他人行儀な態とらしい素氣ない表情が感じられた。それは近頃ニコラーエフと出遇ふ度毎に殆んど無意識に感ずる表情であつた。

《彼は俺を好かないのだ》と、ロマショーフはすぐ心に決めてしまつた。《なんだ彼奴は？怒つてるのか？　嫉いてるのか？　それとも俺は飽かれちまつたのか？》

『ご存じの通り……私共の中隊で武器の檢閲がありますので』と、ロマショーフは思ひ切

つた嘘を言つた。『その準備のために祭日でさへ休めません……ですが、なんだかきさりが惡いやうですね……私は全くあなたのところでピクニックがあるとは存じませんで、なんだか私の方からあつかましく押掛けて來たやうで、ほんとに變な氣がします……』

ニコラーエフ中尉はにた〳〵笑つて、輕蔑むやうな愛想のいゝ調子でロマショーフの肩を敲いた。

『そんなことはないさ。どうして君はまたそんなことを言ふのだ……人數が多いだけ愉快ぢやないか……なんだつて君は支那人じみた遠慮をするのだね……だが、たゞ四輪車に席が開いてるかどうか知らないが、まあ、どうにかして坐り込むさ。』

『私には馬車があります』と、ロマショーフはちよつとニコラーエフ中尉の手から肩を引いて彼を安心させるやうに言つた、『私は寧ろあなたの御用に立てたいと思つてゐるくらゐです。』

かう言つて振返る途端、ふとシューロチカの眼とぴつたり出遇した。《ありがたうございます、あなた！》と、彼女はいつものやうに妙に注意深い、ほてつてるやうな眼で言つた。

《彼女は今日は何といふ立派な姿だらう！》とロマショーフは思つた。

『さあ、これでちやうどいゝ』と、ニコラーエフ中尉は時計を見た。『どうです諸君！』と彼は皆の同意を求めるやうに、『出掛けませうか？』

『猫のワシカが鸚鵡の尾を籠から引張り出した時、鸚鵡の先生猫に向つて、出掛けるなら出掛けようと言つたことがある』と、オリザール中尉がふざけたやうに叫んだ。

皆叫聲や笑聲を立てゝ起ち上つた。婦人達は自分の帽子や洋傘などを探して、手袋を嵌めた。氣管肢加答兒を煩つてゐるタリマン大尉は暖かいハンカチを忘れぬやうにと室中に呶鳴つた。がや〳〵した混雜が起つた。

柄の小さなミーヒン少尉はロマショーフを側へ連れて行つた。

『ロマショーフ君！僕は君にお願ひがあるんだが』と、彼は言つた。『何卒僕の妹達と一緒に行つてくれませんか。でないとディーッの奴が彼女等と一緒に坐るので、僕はそれが不快でたまらんのだ。彼奴、いつも生娘が泣き出すやうな厭らしい事を言つて聞かせるので、閉口さ。實際僕はあんな汚辱を聞いては默つてゐられない。きつといつか彼奴の醜面

をはりとばしてやる！……』

ロマショーフはどうかしてシューロチカと一緒に乘つて行きたいと思つてゐた。が、ミーヒンがいつも彼に取つて愉快なのと、この愛すべき青年の晴々とした清しげな眼が祈るやうな表情をしてゐるのと、また自分の心がこの瞬間大なる喜びの情にすつかり充たされてゐたのとで――彼は否むことができなかつた。で、承知した。

玄關では馬車に乘るので長いことがや〳〵してゐた。ロマショーフはミーヒン少尉の二人の妹と一緒に席に就いた。馬車の間をレシチエンコ二等大尉が例の陰鬱な、遣瀬ない、悲しい顏をしてまで〳〵してゐた。今迄ロマショーフは彼に氣が付かなかつた。誰も彼を自分と一緒に乘せるのを厭がつた。ロマショーフは彼を呼んですぐ自分の前の腰掛をすゝめた。レシチエンコ二等大尉は濕んだ、溫順しい、人の好い眼付で少尉を見ながら、溜息を吐いて馬車に乘つた。

〳〵、とう〳〵みんなてんでに乘つてしまつた。どこか前方でオリザール中尉が自分の年老つた倦怠るさうな去勢馬の上で體を振り振り歌劇の一節を歌ひ出した。

急ぎ郵便馬車に乗らん、
急ぎ郵便馬車に乗ら――ん。
『駈足！進め！』とオサッチイ大尉が雷のやうな聲で號令した。と、馬車がゾロ〳〵と動き出した。

十四　野遊び

ピクニックは愉快といふよりはむしろ喧しく、亂雜で、騷々しかつた。三露里も來るとドウベチナヤに着いた。そこは長い緩かな傾斜の上に撒布された十五町歩もあらうと思はれる森であつた。その傾斜の麓には狹い清らかな小川がうね〳〵と繞つてゐた。森は稀らしい、美しい、勢のいゝ、百年も經つた樫の木であつた。その樹々の根元には一面に隙間なく藪が生ひ繁つて、所々に廣々した美しい鮮かな晴々とした原が殘されてゐた。それが柔かく明い若草の綠に覆れてゐる。かうした原の一つに先に廻つた從卒等が自沸鑵と籠とを持つて待つてゐた。

地上に、ぢかに卓布を敷いて坐つた。婦人連は肴や皿の準備をしはじめた。男子等も面白半分に愛想よく手傳ひをした。オリザール中尉は一枚のナフキンを表衣のやうに引掛けて、もう一枚を頭巾のやうに被つて將校倶樂部の料理番のルキーチの眞似をした。婦人と男子と相違ひに坐るため、ごたくさと混雜した。みんな窮屈さうに足をなげ出して横ざま

に坐つた。それが又た珍しく興があつた。そのために沈默家のレシチエンコ二等大尉が急にみんな吃驚して面白がるやうに仰山な恐かしい顔をして言つた。

『僕等の坐り方はちやうど古の羅馬人や希臘人のやうだね。』

シューロチカは自分の兩脇にタリマン大尉とロマショーフ少尉とを坐らせた。彼女はいつになく愉快さうにお饒舌して、みんなの眼に立つ程興奮してゐた。ロマショーフはまだ一度も彼女がこんなに人を魅するやうに美しいのを見たことがなかつた。彼は彼女のうちにある大きな目新しい熱した感情が溢れて、それが顫へて顏に表れてゐるのを見た。時々彼女は無言のまゝロマショーフの方を向いて、何時もより半秒も長いかと思はれるくらゐ、心持長く彼を見詰めてゐた。しかしその都度彼は彼女の眼のうちに不思議な、熱烈な、人を惹付けるやうな力を感じた。

一人食卓の上座に坐つてゐるオサツチイ大尉は、ちよつと立上つてひざまづいた。そしてフォークでコップを叩いて沈默を破りながら彼は低い重々しい聲で言ひ出した。その聲が液體のやうに彼を打つて森の清い空氣の中を漂うた。

『諸君……我々の美しい女主人の健康と貴い誕生日とを祝して最初の乾盃を致しませう。神よ彼女にあらゆる幸福と將軍夫人の位とを授け給へ！』

と、大きな酒杯を高く上へ擧げて彼は咽喉一杯の力を込めて哮えるやうに叫んだ。

『ウラー！』

森中がこの獅子の咆哮のやうな聲に響いて、木精が木の間を走つた。オサツチイ大尉と並んで坐つてゐたアンドルセーキチ中尉は、さも耳が聾したかのやうに見せかけて、滑稽けたやうに仰向けに倒れた。他の人々は一齊に叫び出した。男子はシューロチカと酒盃をかち合せに行つた。ロマショーフは態と最後に殘つた。彼女はそれを知つてゐた。そしてロマショーフの方を振返つて默つて嫵かしく笑ひながら白葡萄酒の入つた自分のコップを差出した。彼女の眼はこの瞬間に忽ち、パッと擴つて、そして暗くなつた。唇は何か言つてるやうにぴく〳〵動いてはゐたが、一言も聲に出さなかつた。が、すぐと彼女は振返つてタリマン大尉と何か言つた。《何を彼女は言つたのだらう》とロマショーフは思つた。《あゝ何を彼女は言つたのだらう？》と、これが彼の心を驅がし、又刻立たせた。彼はそつと雨

手で顏を覆うてシユ！ロチカのしたと同じやうに唇を動かさうとした。彼はかくして彼女の言つた言葉を自分の想像で解しようとしたのである。が、無駄であつた。（我戀人よ）と言つたのか、（あなたを愛します）と言つたのか、（ローモチカさん）と言つたのか。いやさうぢやない。ただ、その言葉が三綴音であつたことだけは確かである。

それからニコラーエフ中尉の健康を祝して酒盃を擧げた。ついでに彼の未來の參謀本部附勤務のためにも祝盃を擧げた。そしてみんなは彼が必ず成功するといふことを、また彼が大學に入るといふことを疑はないといつた心持で乾盃した。それからシューロチカの發言でロマショーフ少尉の誕生日を祝して厭々ながら祝盃を擧げた。それから列席の紳士淑女のために、また一般婦人のために、自分の隊聯旗の名譽のために、最後に强大なるロシヤ陸軍のために乾盃した……

タリマン大尉はもうかなり醉つてしまつて、立上つて感激したやうに嗄れ聲で叫んだ。

『諸君、僕は我々の叡聖なる陛下の御健康を祝して酒盃を擧げます。陛下のためには我々は誰一人自分の血を流すことを辭さないのです！』

咽喉に息が切れたので彼は最後の言葉を急に細い口笛のやうな假聲で言つた。黃色い白眼のあるツイガン人のやうな、盜賊のやうなその黑い眼は急に遣る瀨なく憐れつぽくしばだゝいて、涙がドス黑い頰を傳つて流れた。

『國歌だ！國歌だ！』と、柄の小さなふとつちよのアンドルセーウキチ中尉が有頂天になつて催促した。

みんな起立した。將校等は擧手の禮をした。

不調和ではあるが、感動に充ちた響が森の中に鳴り響いた。誰よりも大聲で、誰よりも態とらしく、そしていつもより愁はしそうな顏をして感情家のレシチエンコ二等大尉が歌つた。

みんなはいつも聯隊で飲んでゐるやうに澤山飲んだ。お互に客に呼ばれた時や、集會所や、嚴かな晩餐會や、ピクニックやで飲んでゐるやうに澤山飲んだ。みんながみんな同時にがや〳〵と話をしてるので銘々の聲を聞分けることが出來なかつた。シューロチカは白葡萄酒を大分あほつたので、眞赤な顏をして、眼は瞳の擴がつたために全く黑くなつてゐ

た。唇は赤く温んでゐたが急にロマショーフの傍近く身を屈めて、

『私こんな田舍じみたピクニックは嫌ひですわ。これにはなんだか下らない卑しいことが含まつてるんですもの』と、彼女は言つた。『實際、これは夫の出發前にやらなければならないことですが、しかしなんて馬鹿げたことでせう！こんなことは私の家の庭でだつてできるぢやありませんか。あなたも御存じの通り私共にはあんな美しい古い日蔭の多い庭がありますのに。しかしそれでも私はどうして今日はこんなに無性に幸福なんですか、解らないくらゐですわ。あゝどうしてかう幸福なのでせう！あ、ローモチカさん、私なぜだか解つてゝよ。私、後であなたにお話いたしますわ。後でお話いたしますわ……きつとよ……あゝ否、々、ローモチカさん、私何も知らないのよ。』

彼女の美しい眼瞼は半ば閉ぢてゐたが、その顏全體には人をそゝるやうな、何か約束してるやうな、そしてたゞならなくぢれつたさうなある思ひが浮んでゐた。それが卑しいほど美しかつた。ロマショーフはシューロチカを支配してゐる情熱の動搖をまだ判然解してはゐなかつたが、ある神秘的な本能でそれを感じてゐた。自分の手や足や胸をさつと流れた

甘い戰慄によつて感じたのである。

『あなたは今日はいつもとは異つてますね。どうなさつたんですか？』と、ロマショーフは低聲で訊いた。

彼女は急に一種の無邪氣な溫和しい吃驚したやうな調子で言つた。

『私にも解らないのよ。ほんとに解らないのよ。御覽なさい、あの蒼い空を、蒼い光を……私の心にもなんだかかう不思議な蒼い氣分が、蒼い喜びがありますの！ローモチカさん、もつと私に酒を注いで頂戴な！私の可愛い坊ちやん……』

卓布の向ふの端ではその當時多數の人々が既に決まつたことのやうに思つて期待してゐたドイツとの戰爭の話をしてゐた。と、五六人の口から一度に騷しい、譯の分らない爭論が起つた。突然オサッチイ大尉の怒つたやうな決然した聲が聞えた。彼は殆ど醉つてゐた。それは彼の美しい顏が恐しくまつ蒼になつて、大きな黑い眼が一層暗くなつたので分つた。

『下らない！』と彼は決然叫んだ。『僕はそんなことはみんな下らないことだと思ふね。戰爭などはもう變態して來た。いや、世界のあらゆることが變態してゐる。子供は白痴で生

れる。女は横腹がまがる。男子は神經質になる。(あゝ血だ！あゝ僕は卒倒しさうだ！)と、彼は誰かの鼻聲を眞似て、『こんなことを言ふのは眞の荒つぽい殘酷な戰爭時代が過ぎ去つたからだ。果してこんなことが戰爭と言はれやうか？十五露里も向ふにゐるものがバッ！と射擊して、英雄になり濟して、鄕里に歸つて、大した手柄をしたやうに思つてる！俘虜になればなるで、(あゝ可愛さうに、煙草はどうですか？それともお茶に致しますか？可愛さうに、寒くはありませんか？敷物は柔かいですか？)などゝ言はれる。いやはや！』と、オサッチイ大尉は恐しく哮えはじめて、ちようど牛が發怒つて何か突かうと身構へしてる時のやうに頭を下へ傾けた。『中世時代にはよく戰爭したものだ。そりや俺も知つてる。それが夜襲なんだ。で、全市がバッと火炎に包れてしまふんだ。(三日間は市を兵卒等の掠奪にまかす！)といふ命令が下ると忽ち突擊する。まるで血と炎だ。酒樽の傍では貴族等が踏み殺される。酒と血とは街道に流れる。あゝ廢墟の血腥い酒宴はどんなに愉快だつたらう！裸體にされて泣いてる美しい女達は、髮の毛をムザと掴まつて曳ずられて行く。憐憫なんかありやしないさ。女達は勇士の甘い獲物だつた……』

『ですけどあなたあまりお言葉が過ぎはしませんか』とタリマン夫人は戲談に言つた。

『毎晩人家が限りなく燒けて、物凄い風が吹いて、絞首臺に吊れた黑い死骸がその風にゆら〳〵と煽られて、その上で烏がガア〳〵鳴くのだ。絞首臺の下には篝火が燃えて、勝利者が酒宴をしてゐる。俘虜なんか一匹だつてゐはせん。またゐる筈はないさ。なんで彼等のために餘計な世話をする必要があらう？あゝ！』と、オサッチイ大尉は齒を喰ひ縛つて腹立たしく唸つた。『なんといふ勇猛な、不思議な時代であつたらう！あゝ戰爭！胸と胸とを突當てゝ數時間も殘酷に、勇猛に、死物狂ひになつて戰つた時代、驚く程巧みに鬪つた時代にはどんな人々がゐたらう！どんな恐しい體力を持つてゐたらう！諸君！』と、彼は立上つて大きな身體をぐつと延したが、その聲には歡喜と亂暴とが響いた。『諸君！僕は知つてるよ！諸君は皆士官學校で現代の人道的戰爭について下らない淺薄な知識を學んだだらう。けれども僕は祝盃を擧げる……たとへ諸君のうち一人も僕に賛成するものがなくてもいゝ。僕は一人で昔の戰爭の歡樂とその愉快な血腥い殘酷とを祝して乾盃する！……』

みんなは沈默してしまつた。いつもは陰鬱で、口數の少ない大尉のこの思ひ儲けぬ興奮

に打たれたかのやうに沈默してしまつた。そして好奇と恐しさとに一同は思はず彼を眺めた。が、不意にベーク・アガマーロフ中尉が自分の席を起上つた。それが餘り出し抜けだつたので多くの人は震へ上つた。ある夫人なんかは吃驚してキャッと叫んだ程である。アガマーロフ中尉の眼は飛出したやうにはげしく輝いてゐた。きつと喰ひしばつた白い齒を猛獸のやうに露き出してゐた。そして、せか〳〵息をはずませて言はうと思ふ言葉さへ見付からなかつた。

『おゝ！おゝ！……それ〳〵……それです、私はよく解りました!!あゝ！』と彼はさも深い遺恨でもあるやうに猛烈な力を揮ひ出してオサッチイ大尉の手をギュッと握り緊めて酷く振つた、『なんだ糞ッ！悲哀だとか、憐憫だとか、そんなものは下らんです！そんなものは、ぶつ切つちまうがいゝ！』

アガマーロフ中尉の野蠻な心の中には古からの遺傳的な殘忍性が潜んでゐて、それが平日は眠靜まつてゐるのだが時折何物かに破裂しなければ止まなかつた。彼は血走つた眼であたりを見廻して、突然鞘から劍を引拔いて發狂したやうに樫の灌木を斬つた。で、枝と

若葉がバラ〳〵と雨のやうに、坐つてる人々の頭上に散つた。

『ベークさん！狂人さん！野蠻人！』と婦人等が叫んだ。

ベーク・アガマーロフ中尉はすぐ正氣に歸つたやうに坐つた。彼は自分の激烈な發作のためにひどくキマリ惡げに見えたが、荒い息をしてゐた細い鼻孔は膨んで顫へてゐた。憤怒に歪んだ黑い眼は上眼使ひに挑むやうな調子で居並ぶ人々を見廻した。

ロマショーフはオサッチイ大尉の言ふことを聽いたり、聽かなかつたりした。彼は夢のやうでもあり、また何か此世にない不可思議な飲物に甘く醉つたやうでもある妙な心持がしてゐた。彼には溫かい優しい蜘蛛の巣が身體中を柔くふゝわりと取卷いて、愛想よく探つて、彼の心の中を嬉しい笑聲で滿してるやうに感じられた。彼の手は彼自身にすら不意であるかの如く屢々シュールチカの手に觸れた。が、彼も彼女も一度も互に顏を見合せなかつた。マロショーフはまるで假睡んでるやうな心地であつた。オサッチイ大尉とアガマーロフ中尉の聲がどこか遠い幻影の霧の中からでも聞えるやうに聽き取れるには聽き取れたが空であつた。

（オサッチイ……彼は殘酷な男だ。彼は俺を愛してゐない）と、ロマショーフは思つた。そして彼が今思つてるのは以前のオサッチイではなくして、新しい、恐しく遠い、現實の人でない、恰度活動寫眞の布に動いてゐる人のやうに思はれた。（オサッチイの妻君はちつぽけな、痩せこけた、憐れな、そしてしよつちう妊んでばかりゐる女だ……彼は細君をどこへも一緒に連れて出たことがない……彼の部下の兵卒が去年縊死したことがある。オサッチイ……さうだ……一體オサッチイとはなんだ？……おや今度はベークが呶鳴つてゐるな……彼奴は一體何者だ？俺は彼奴を知つてるのか？うん俺は彼奴を知つてゐる。が、どうして彼奴はあんなに俺と緣遠い、氣の知れない、妙な人間だらう？だが、誰か俺と並んで坐つてゐるな……お前は誰だ？お前の體からは喜びが溢れ出てゐる。して俺はその喜びに醉つてゐる。蒼い喜びだ！……やア俺の前にニコラーエフが坐つてる。彼奴は不愉快さうである。彼奴はしよつちう默つてる。それとなく眼を滑らせてはちよい〳〵こちらを覗いてゐる。えい、怒るがいゝさ――なんでもわりやしない。おゝ蒼い喜びよ！）

暗くなつた。靜かな連翹色の樹蔭が原に横はつた。ミーヒン少尉の妹は不意に思ひ出したやうに言つた。

『皆さん菫は如何です？此處は菫の名所ださうですね。摘みに參りませうか。』

『もう遲いですよ』と、誰か言つた。『今時分草の中では何も見別けられません。』

『もう草の中では探すより失くす方が容易い。』と、ディーツ二等大尉が厭らしくにた〳〵笑ひながら言つた。

『では、焚火をしようぢやないか』と、アンドルセーキチ中尉が言ひ出した。

枯枝や去年の落葉などを澤山集めてきて焚火をし始めた。愉快さうな、太い火の柱がスーッと立上つた。最後の夕映が驚されたやうに不意に消えてしまつて、それに代つて森から這ひ出した夕闇が焚火の上に蔽ひ被さつた。紫色の斑點が悸々と樫の梢に沿うて慄へた。それがちようど樹木が動搖して眞赤な明い空間を覗いたり、後ろの暗の中に隱れたりしてゐるやうに思はれた。

みな食卓から立上つた。從卒等は硝子の蓋を被せた蠟燭を點した。若い將校等はまるで學生のやうに巫山戲た。オリザール中尉はミーヒン少尉と角力を取つた。そして柄の小さ

なノロ〳〵したミーヒンが、自分より脊の高い身體のがつしりした相手を二度までもぢべたに投げ付けたので皆は吃驚した。それから今度は火の上を飛越す遊びを始めた。アンドルセーキチ中尉は蠅が窓硝子にぶつ突かる樣子や、鳥屋の婆さんが鷄を捕へる眞似や、それから藪蔭に隱れて、鋸やナイフを砥石で研ぐ音を眞似たりした。それが彼の十八番であつた。ディーッ二等大尉でさへ空壜を巧みに手玉に取つてみんなを面白がらせた。

『さあ、諸君、私は諸君に素晴しい奇術をやつてご覽に入れます』と、不意にタリマン大尉が叫んだ。『これは決して奇跡でも魔術でもありません。唯手先の早業に過ぎないです。先づ皆さん、私の手に何もないことにお氣を留められてご覽を願ひます。さあ始まり、ワン、ツー、スリー、……』

タリマン大尉は皆の笑つてる時に素早く隱袋から二組の新しい骨牌をひよいと取出してばら〳〵とそれを掌の上に擴げた。

『骨牌です、諸君！』と、彼は言つて、『どうだ、この凉しい所で、一番、え？』とすゝめた。

オサッチイ大尉とニコラ！エフ中尉とアンドルセーキチ中尉とは骨牌を取り始めた。レ

シチェンコ二等大尉は深い溜息を吐きながら彼等の後ろに坐つた。ニコラーエフ中尉は長いことぶつ〳〵言つて贊成しなかつたが、最後には矢張仲間に引入れられてしまつた。坐りながら彼は心配さうにシューロチカの眼を探さうとして幾度も後ろの方を振向いたが、焚火の光の所爲でよく見別けることができなかつたので、その都度彼は顏を緊張つて、顰めつ面をして、情ないやうな苦しさうな醜い表情をした。

殘りの人達は次第々々に焚火の近くの原に散ばつた。鬼ごつこも始めたが、この遊戯は姉のミーヒナがディーッ二等大尉に捉まつてから、急に泣く程眞赤になつて、決然遊戯を止めてしまつたので、まもなくお止めになつた。彼女が物を言つた時、その聲は嫌惡と侮辱とに顫へてゐたが、それでもその原因は言はなかつた。

ロマショーフは狹い小徑を通つて森の奥へ行つた。彼は自分ながら何を待つてるのだか解らなかつた。が、しかし彼の心はぼんやりした幸福の豫感から甘く疲れたやうに惱んでゐた。彼は立停つた。と、彼の後ろでかさこそといふ梢の輕い音がして、まもなく忙しげな足音と絹袴のさら〳〵する音が聞えた。シューロチカが急いで彼に近いたのである——

ちやうど輝かしい森の靈のやうに身輕くすらつとした脊の低い彼女は、バッとした白い着物を着て、大きな樹々の黑い梢の間を縫うて來た。ロマショーフは彼女の方へまつすぐに歩いて行つたが、一言も言はずに彼女を抱きしめた。シューロチカは急いで駈けたのでせかせかと深い息をしてゐた。その呼吸がロマショーフの頰や唇に溫かく、間斷なくかゝつた。ロマショーフは自分の腕の下で彼女の心臟がドキ〳〵と鼓動してるのを感じた。

『坐りませうよ。』とシューロチカが言つた。

彼女は草原の上に坐つて兩手で後髮を搔き撫でた。ロマショーフは彼女の足元に横になつた。そこは土地がひどく低かつたので、彼は彼女に眼を注いでゐたけれど、唯その襟足と下顎の優しい判然しない輪廓とが見えるだけであつた。

突然彼女は靜かな顫へ聲で言つた。

『ローモチカさん！あなた氣持がよくつて？』

『いゝですとも』と、彼は答へた。そしてちよつと考へたが、ふと今日中のことを思ひ出して、熱心に繰返した。『あゝさうです。私は今日はほんとに心持がいゝんです。なんとも

言へないです。ですが、貴女は今日は何故そんなですか？』

『どんな？』

彼女は男の傍へ身體を傾けて、彼の眼に見入つた。で、ロマショーフには彼女の顏が俄かにすつかり見えるやうになつた。

『貴女は今日はいつもと異つて不思議なほど美しいんです。こんなに美しかつたことはこれまで唯の一度もありませんでした。あなたの心の中では何者かゝ歌つて、輝いてるやうです。あなたの心にはなんだか新しい、謎のやうな、私には解らないものがあります……ですがあなたは私に腹を立てゝゐるのぢやありませんか……貴女を褒めたのが惡かつたのですか！』

彼女は靜かに笑ひ出した。そしてその低い、あまへるやうな笑聲がロマショーフの胸に喜ばしい戰慄を起した。

『可愛いゝローモチカさん！可愛いゝお人善しの臆病なローモチカさん！私今日は二人の日だと言つたぢやありませんか。何も考へないで下さい。ローモチカさん、どうして私今

日はこんなに大膽なのでせう、あなたご存じ？ご存じぢやないの？私は今日あなたに惚れたのよ。いやよ、あなた、そんなに考へ込んでは。明日になればこんなことは過ぎ去つてしまひますわ……』

ロマショーフは彼女の身體を探らうとして彼女に手を延した。

『アレキサンドラ・ペトローウナさん……シューロチカさん……サーシャさん！……』と、彼は願ふやうに言つた。

『私のことをシューロチカなんて呼ばないで下さい。私、この名が厭ですもの。何かほかの名前で呼ぶにしても、それだけはよして下さい……それはさうと』と彼女は不意に思ひ出したといつた風に、『あなたはなんといふ立派なお名前をお持ちでせう——ゲオルギイなんて。ユーリイよりなんぼ好いか知れませんわ……ゲーオールギイ！』と、さもこの言葉の音に聽き惚れてゐるかのやうに悠然と引延ばして言つた。『ほんとに偉さうな音よ。』

『おゝ、可愛いゝ！』とロマショーフは熱情を込めて言つた。

『ちよいとお待ち！……まあお聽きなさい。これはごく大事なことです。私今日あなたを

夢に見ましたのよ。ほんとに吃驚するほど美しい夢でしたわ。私は貴方とどつか素的な室のなかでワルツを踊つてる夢を見ましたの。あゝ私は今その室の何から何までずつかり解りましたわ。毛氈が澤山あつて、眞赤な燈火がきら〳〵燃えてゐて、新しいピアノがてかてか輝いて、それから赤いカーテンの掛つた二つの窓がありましたつけ——何もかも赤かつたのよ。どこかで音樂を演つてゐましたが、それは見えませんでした。そして私はあなたと手を取つてダンスをしたのです……いや唯夢なればこそあんなに心地よく、あんなに熱して、びッたり密着いてゐることができたのでせう。私共はくる〳〵と無性に迅く踊り廻つてゐましたが、しかし足は板の間に觸れないで、ちやうど宙に浮んでくる〳〵廻り廻つてゐるやうでした。あゝ、それがほんとに長く續いて、そしてほんとに何とも云へない程不思議に氣持がよかつたのよ……ね、ローモチカさん、貴方は夢で飛ぶことがあつて？』

ロマショーフはすぐにはこたへなかつた。彼は恰度妙な、心を誘るやうな、同時に活々した不思議なお伽噺にでも聞き惚れてゐるかのやうであつた。してまたこの春の夜の溫かさや、薄暗りや、また聽耳を立てゝ靜まり返つてゐるやうなあたりの樹々や、彼の傍に坐

つてゐる白い着物を着た不思議な愛らしい女や――それらのものが何れもお伽噺のやうであつた。そしてこの魅力から覺めるには彼は少からぬ努力を用ゐなければならなかつた。

『それはもう飛ぶこともあります』と、彼は答へた。『ですが一年毎にだん〳〵低く低くなつて行きます。以前小兒の時分にはよく天井を飛び廻りました。上から人々を見下すのが素的に可笑かつたですよ。ちやうど人々が逆立ちして歩いてゐるやうに見えました。そしてみなが私を箒で突かうとしてもな、か〳〵達かなかつたのです。で、私はいつも飛んで、いつも、ニコ〳〵笑つてゐるのでした。今ではもうあんなことはありません。今は私は唯跳るくらゐが關の山です』と、ロマショーフは溜息を吐いて言つた。『足でとんと地を蹴つて飛び上るのです。さうして二十歩ぐらゐ飛ぶのですが、それも低くてやつと一尺ぐらゐの高さしか飛べません。』

シユーロチカは全くぢべたに身體を投げ出して肘を衝いて掌で頭を支へてゐた。稍々暫く默つてゐたが、また沈んだ調子で話し出した。

『そしてね、この夢を見た朝、私は貴方に過ひたかつたんですよ。それはもう堪らなく堪

らなく過ひたかつたんです。もしあなたがお出でならなかつたら私は何をし出かしたか知れませんわ。私、屹度自分で貴方のとこへ駈け付けたかも知れませんよ。だから私は貴方に四時過ぎに來て頂くやうにお願ひしたのです。私は自分が心配でしたの。あゝあなたーあなたはもう私のこゝろがお解りでせうね？』

ロマショーフの顏から半尺程のところに彼女の重ねた足があつた。二本の優しい足に薄いスリツパを穿いて、變な白い矢の模樣の付いた黑い靴下を穿いてゐた。ロマショーフは頭がぼうつとして來て耳鳴りがするのを覺えて、不意にその活々した彈力のある冷たい肉體に、靴下を透して齒をきつと壓し着けた。

『ローモチカさん……いけません』ロマショーフは自分の上で彼女の微かな、引延すやうな懶いやうな聲のするのを聞いた。

彼は頭を擧げた。そしてこの瞬間彼には何もかも奇怪な神祕な森のお伽噺のやうに思はれた。薄黑い草や、眞黑い沈默した樹木の疎らに生えてゐる森が傾斜に沿うて一樣に延びてゐる。樹木は假睡みながらもじつと鋭く耳を澄して何物にか聽き入つてゐる。傾斜の絶

頂には遠い樹々の幹や梢を透して高い平らな地平線の上に夕映の細い線が紅るに燃えてゐた。それは赤でもなければ紫でもなく、ちやうど消えかゝつた炭か、または濃い赤葡萄酒を透して屈曲した炎のやうな稀しい濃紅色であつた。そしてこの山の黒い樹々の間の暗い香りの好い草の中に不思議な美しい白衣の女が恰度憩へる森の女神のやうに横たはつてゐる。

ロマショーフは彼女の近くへずり寄つた。彼にはなんとなく彼女の顔から蒼白い後光が射してゐるかのやうに感じられた。彼女の眼は見えないでその代りに二つの大きな暗い斑點が見える許りであつた。けれども、ロマショーフは彼女が自分を見詰めてゐると言ふことを感じた。

『まるでお伽噺のやうだ！』と彼は靜かに口を動かして囁いた。

『さうよ、あなた、お伽噺よ……』

ロマショーフは彼女の着物に接吻して、そして彼女の手を探し出して、その細そりした、溫かい、匂ひのする掌に顔を當てゝ、同時にせか〳〵喘ぎながら斷れ斷れな聲で言つた。

『サーシャさん……私はあなたを愛します……あなたを愛します……』

今度はもつと上へあがつたので彼には大きく黒々した彼女の眼が判然と見えた。その眼は或はぢり〳〵と細くなつたり或はぱつと見開いたりした。そしてその都度彼女の見慣れたやうで見慣れない顔が、暗闇のうちに不思議に變つて行くのであつた。彼は餓えたやうなばさ〳〵乾いた唇で彼女の唇を探したが、彼女は避けて靜かに頭を振つた。そして悠然した呟きで繰返した。

『いやよ！……あなた、いけませんよ……』

『あなた……何といふ幸福でせう！私はあなたを愛します……』と、ロマンショーフはなんだか幸福な囈語でも言つてるかのやうに繰返した。『私はあなたを愛します。ご覽なさい、この靜かな夜を。私共のほかには誰一人ゐません。あゝ私は幸福です！私はどんなにあなたを愛してるでせう！』

が、彼女は全身をぢべたに横にして深い息を吐きながら、（いやよ、いやよ）と呟くやうに言つた。とう〳〵彼女はさも言ひ難さうにやつと聞えるくらゐの聲で言ひ出した。

『ローモチカさん、なぜあなたはそんなに……弱いんでせう。私は隱すのはいやですから申しますが、實際私はあなたに惹き付けられてるんです。私にはあなたの何から何まで可愛いのですよ——その羞恥んだところも、純潔なところも、そのお優しいところもみんな可愛いゝんですわ。私はあなたの前で愛してゐるとは申しませんが、しかし私はしよつちうあなたのことを思つてゐます。私はあなたを夢にさへ見ます。私は……しよつちう心の中にあなたを感じてます。あなたが私に近寄つたり觸つたりすると、私は氣がそは〳〵します。だけどあなたはなぜそんなに憐れつぽい方でせう！憐れつぽいといふことは輕蔑の兄弟分よ。考へてもご覽なさい。私はあなたを尊敬することができません。あゝもしあなたがお強い方だつたら！』と彼女はロマショーフの頭から帽子を脱つて彼の柔かい髪の毛をそうつと撫でたり、弄つたりしはじめた。『もしあなたが大きな名譽か、大きな位置を得ることができたら！……』

『私はそれを得ます！私はそれを得ます！』と、ロマショーフは靜かに叫んだ。『だゞ私のものになつて下さい。私のところへ來て下さい。私は一生……』

シューロチカはロマショーフの言葉を遮ぎつて言ひ出した。彼はその聲の調子で彼女の愛嬌と悲しさうな微笑とを聽き取つた。

『あなたがそれを得たいと思つていらつしやることはよく知つてゐます。だけどあなたは何も爲得ません。私はそれをよく知つてゐます。あゝもし私がほんの少しでもあなたに望みを置くことができたら、私は何もかも捨てゝあなたに隨いて行くでせうに。あゝ、ローモチカさん、わたしはある神話に、神樣が始めに凡ての人々を一體の者に造つたが、やがてなぜかその一人々々を二つに割いて、世界中へ撒き散らしたので、その半身宛がお互に永久探し合つてゐるんですけれど、いつまでも見付からないのだといふ話を聽いたことがありますが、ねえ、あなた、私共二人はその半身ではないでせうか。私共は何もかも一致してゐますもの、好きなものも、嫌ひなものも、思想も、夢も、希望も。私共はお互に僅かな言葉や、それのみか言葉なしで唯心だけでも解し合ふことができますもの。それでも、わたしはあなたを避けなければならないのですよ。あゝこんなことが私の生涯ではこれでもう二度目ですわ。』

『えゝ、私も知つてゐます。』

『彼人がそんなことを話したの？』とシューロチカは早口に訊ねた。

『さうぢやありませんけど、遇然したことから、私は知つてます。』

二人は默つてしまつた。空には最初の星が、震へてゐる水色の點のやうにきら〳〵と輝き出した。右手の方から話聲や、笑聲や、誰かの歌ひ聲が微かに聞えた。柔かい薄闇にぼんやり沈んでゐる森の一部は神々〳〵しい、愁はしさうな靜寂に充ち滿ちてゐた。焚火はこゝからは見えなかつたが、つひ近くの樫の木の梢を時折赤い顫へてゐる光が恰度遠い夕燒の反映のやうにちら〳〵と掠めた。シューロチカは靜かにロマショーフの頭と顏を撫でゝゐた。彼が唇で彼女の手を探し當てた時、彼女は自ら掌を彼の口に壓し着けた。

『私は自分の夫を愛してゐませんの』と、彼女は思ひ沈んでゐるやうに悠然と言つた。『彼人は粗笨で、鈍くつて、武骨ですからね。あゝ——こんなことを言ふのは羞しいんですけど——しかし、私共、女は自分の受けた最初の壓制をいつまでも忘れることはできません。それに彼人はあんな、大の嫉妬家ですからね。彼人はいまだに私をあの不幸なナザンスキ

イのことでいぢめてゐるんです。いろんなつまらんことを根掘り葉掘り訊ねたり、變な臆測をしたり、ふん！… 厭らしい質問をしたり——それは堪らないことをいたします。あんなことはほんの無邪氣な子供らしい小說に過ぎないのに。彼人はナザンスキイと言ふと、もうその名を聞いたゞけでも發狂のやうになるんですよ。』

彼女が話してる間その聲は時々顫へた。男の頭を撫でゝゐた手もやはり顫へてゐた。

『あなたはお寒いのですか？』とロマショーフは訊いた。

『いゝえ、私大層好い心持ですわ』と彼女は簡單に言つた。そして突然抑へ切れない情熱に溢れて叫んだ。

『あゝ私あなたのお傍にゐるのがほんとに嬉しいですわ、私の戀人！』

その時ロマショーフは悸々しながら不確かな調子で、彼女の手を取つて、彼女の細い指にそ〻つと觸つた。

『どうぞ私に仰有つて下さい…お願ひですから。あなたは自分で夫を愛してゐないと仰有りながら… なぜあなた方は御一緒になつてゐらつしやるんです？』

が、彼女はつと起ち上つてゐずまゐを正した。そしてちやうど眼覺めた時のやうに手で神經的に額や頰を撫でた。

『ですが、もう遲いですわね。參りませうか、また向うで探してるかも知れませんから。』

と彼女は調子の異つた全く落着いた聲で言つた。

彼等は草原から立上つて、互に眼と眼を見合せてはゐたが眼には何も映らずに、たゞお互の呼吸を聽きながら默つて立つてゐた。

『さやうなら！』と彼女は高い聲で叫んだ。『さやうならあなた！』

彼女は男の頸を兩手で抱き廻して熱い濕つぽい口を男の唇に壓着けた。そして齒を喰ひ縛つて情熱の唸きを發しながら身體中足から胸までを彼にピタリと壓し着けた。ロマショーフは黑い樫の木が皆一方へ傾いて、地がその反對の方へ退いて、時の歩みがはたと止んだかのやうな氣がした。

やがて彼女はやつと男の手から脫け出て、決然と言つた。

『では、もう澤山です。さあ、參りませう。』

ロマショーフは彼女の前の草の上に突伏して、寢轉んだやうになつて、彼女の足を抱いて、その膝を久しいこと强く接吻した。

『サーシャさん、サーシエンカさん！』と、彼は夢中に呟いた。『どうしてあなたは私に身を任せるのが厭なんです？どうして？、どうぞ私に身を任せて下さい……』

『參りませうよ、さア參りませう！』と、彼女は彼をせき立てた。『さあさ、お起きなさいつたら、ローモチカさん！みつかつたらどうします！さア早く參りませうよ。』

彼等は人聲のする方へ行つた。ロマショーフは足が慄んで、がた〳〵慄へて、顳顬がづき〳〵して、歩きながらも蹣跚してゐた。

『私は虛僞が嫌ひです』と慌てたやうな口調で未だ喘ぎながらシューロチカが言つた。『然し私は虛僞に超然としてゐます。だけど私は臆病が嫌ひです。虛僞のうちにはいつも臆病が含れてゐます。私はあなたに眞實のことを申しますが、私は今迄一度だつて自分の夫に背いたことはありません。これからだつてなにかのために彼人をすてるやうなことがない限りは決して背きません。ですけど彼人の愛嬌や接吻は私にはほんとに怖しいで

す。それは私に可厭な感を起させます。お聽きなさい、私は今始めて――いや或はもつと以前あなたのことや、あなたの唇を思ひ浮べた時からかも知れませんが――私は今始めて自分を戀人に捧げることが一種の快樂でもあり、一種の幸福でもあることが解りました。然し私は卑怯なことが嫌ひです。窃盗が嫌ひです。それから……ちよいと私の方へ屈んで下さい。私はあなたに、そうつと申します、恥しいことですから……それから――私は赤ん坊が嫌ひです。あゝ！なんて嫌なことでせう！四十八留ぐらゐの月給しか貰へない下級將校夫人でゐて、六人の子兒があつて、纏衣だの、貧乏だのと……おゝなんといふ怖しいことでせう！』

ロマショーフは怪訝な顔して彼女を見た。

『ですが、あなたには夫といふべきものがあるぢやありませんか……それは避けられないでせう』と彼はもぢ〳〵しながら言つた。

シューロチカは大聲で笑ひ出した。その笑のうちにはなんとなくロマショーフの心に冷たいものを吐き掛けるやうな、一種の本能的に不快なものがあつた。

『ローモチカさん……あなたはまアなんといふ鈍間なんでせう！』と、彼女はロマショーフの聞き慣れた細い小兒らしい聲を放つた。『ほんとにあなたはこんなことがお解りにならないの！いや、ほんとのことを仰有つて下さい――お解りにならないの？』

ロマショーフは慌てゝ肩を悚めた。彼はなんとなく自分の露骨なのがキマリ悪くなつた。

『惡うございました……ですがどうもさうよりほかには言へませぬ……ほんとうです。』

『まあ、どうだつてようございますわ。そんなことはもう止めにしませう。あなたはなんといふ純潔な、可愛いゝローモチカさんでせう！まあ、何れあなたがもつと大人におなんなさつたら私の言つたことがお解りになりますよ。夫にできることは戀人にできないといふことを。ですけどまあこんなことは考へないで下さい、お願ひです。こんなことは穢しいことで、どう仕樣もないのです。』

彼等はもうピクニックの場所へ近付いた。焚火の炎が樹の間を洩れて見える。炎を遮つてゐる曲つた樹の幹が黑い金屬で鑄造されたやう。そしてその兩側には赤くゆらめいてゐ

る光がチラついてゐる。

『では、もし私が自分の思ふ通りになつたら？』とロマショーフは訊ねた。『もし私があなたのをつとの望んでゐるやうなことか、或はもつと大きいことに成功したら？その時は？』

彼女は男の肩に頰をぴつたり壓着けて斷れ斷れに言つた。

『その時こそよ――さうよ、さうよ。』

彼等はもう野原へ出た。焚火と其周圍の小さな黑い人影とがすつかり見えた。

『ローモチカさん、もうこれがお終ひよ』とシューロチカは慌だしく、しかしかなしいやうな心配さうな聲で言つた。『私は今夜あなたの機嫌を損ねたくなかつたから申しませんでしたが、あのねローモチカさん、あなたはもうこれから私の家へお出でなすつてはいけませんよ。』

ロマショーフは吃驚してがつかりしたやうに立停まつた。

『あゝ、どうしてです？サーシャさん！……』

『さア〳〵參りませう……私は誰の惡戲ですか知りませんが、彼人のところへ匿名の手紙

が澤山舞ひ込んだのですよ。彼人はそれを私に見せはしませんでしたけど唯それとなくほのめかしました。私とあなたのことについて何か穢しい野鄙な厭らしいことが書いてあるんですよ。とにかくお願ひですから私共へはお出でなさらないで下さいね。』

『サーシャさん！』と、ロマショーフは彼女に手を延しながら願ふやうに唸つた。

『あゝそれは私自身にも苦しいんですよ。ねあなた、戀しいあなた！ですけど、これは仕方がないのですもの。それからね、私は彼人が自分でこのことをあなたにお話するやうなことがあつては心配ですからね、どうぞこれからは控へて下さいよ。それを私に約束して頂戴な。』

『ようございます』と、ロマショーフは悲しげに言つた。

『ではもうこれだけよ。さやうならあなた、不幸なお方！あなたのお手をお出しなさい。そして私の手を痛くなる程きつく〳〵握り緊めて頂戴。えゝ、さうよ……あら！……ではもうさやうなら、さやうならあなた！』

焚火の傍へ行かないうちに二人は別れた。シューロチカは眞直に上の方へ昇つて行つた。

が、ロマショーフは遠廻りをして下の方の河のほとりを行つた。カルタはまだ終つてゐなかつた。が、二人のゐないことはもう氣が付いてゐた。少くともディーツ二等大尉は焚火の方へ近づいて來るロマショーフをつんとした傲慢な態度で眺めた。そして態とらしい嫌味たつぷりな咳をした。で、ロマショーフは癪に觸つて彼に燃えさしを投付けてやりたいやうな氣がした。

やがてロマショーフはニコラーエフが骨牌の席を立つてシューロチカを傍へ連れて行つて久しいこと怒つたやうな身振や意地の惡い顏付をして何か話してゐる樣子を見た。彼女は不意にきつと身體を延して不滿とも輕蔑とも名狀しがたいやうな表情を浮べながら夫に二言三言言つたらしかつた。するとあの大きながつしりした强さうな男は急に從順に小さくなつて、ちやうど溫和しくはなつたが恨みを隱してゐる猛獸のやうな風に、つと彼女から離れた。

やがてピクニックは終つた。夜は次第に凉しくなつて河から濕氣を吹いてきた。歡樂の種子も疾うに盡きてしまつて、みな疲れて、不滿足さうに、無遠慮に欠伸をしながら、散

り散りに歸つた。ロマショーフはまたミーヒン少尉の妹達と向き合つて馬車に坐つたが道中默つてゐた。彼の頭の中には眞黑な、穩かな樹木や、暗い山や、その頂きの夕映の血のやうな線や、暗い、香りの高い草原に横になつてゐた女の白い姿などがまざ〳〵と浮み上つてゐた。が、それでもなほ衷心の深い鋭い悲しみを通して時々自分のことを痛切に考へた。

（彼の美しい顏は哀愁の雲に蔽はれた。）

十五　閲兵式

五月一日に聯隊は町から二里程隔つた鐵道線路の向う側の毎年同じ場所にある舍營へ移つた。下級將校等はその任務として舍營生活の間は木造の兵舍の中の所屬中隊の傍に居らなければならなかつた。しかしロマショーフはやはり町の營宅に殘つてゐた。それは六中隊の將校宿舍は恐ろしく古ぼけてゐて、今にも壞れさうなのに、費用が足りぬので修繕することが出來なかつたからである。で、彼は日に二回づゝ往復しなければならなかつた。朝の敎練へ行つて、それから將校集會所へ晝飯に歸つて、また夕刻の敎練に出掛けて、再び町に歸るのである。それがロマショーフを刺々させ、また疲らせた。舍營生活の最初の半ヶ月で彼は目立つほど瘦せて、眞黑に日に燒けて、眼が落込んだ。

然し將校にも兵卒にも誰にも辛かつた。五月の閲兵式の準備に夢中になつてゐるので、慰撫や疲勞を言つてゐる餘裕がなかつた。中隊長等は二三時間宛練兵場で自分の中隊を苛めた。敎練の時は方々の中隊や小隊から間斷なしにビシャ〳〵と頰を打つ音が聞えた。ロ

マショーフは二百歩も隔つた向うの方で、手荒な中隊長が部下の兵卒を左翼から右翼にかけて順々に笞で毆り付けるのを度々見受けた。手を振つたかと思ふと一瞬の後には、ビシャッといふ打擲の音が二度三度四度と續けさまに聞えた……それを見ると自分を侮辱されたやうで、實に切ない感じを起さずにはゐられなかつた。下士は部下の兵卒を「學科」のほんのちよつとした過ちのため、または步調行進に步調を違へたくらゐのことでひどく殘酷に擲つた。血が流れるまで擲つたり、齒をぶッかいたり、耳を擲つて鼓膜を破つたり、地べたに掌で擲り倒したりした。が、それを上告しようなどゝ思ふものはなかつた。一種のある一般的な氣味惡い惡夢の時が來たのだ。聯隊中がある馬鹿げた催眠術に掛つてゐる。そしてそれが恐ろしい酷暑のために一層劇しかつた、此年の五月は非常に暑かつたので。

誰もかも極度まで神經が緊張してゐた。將校集會所では晝飯と夕飯の時いつも度々下らぬ爭論や、理由のない侮辱や、口論が燃え上つた。兵卒等は骨と皮ばかりになつて白痴のやうな眼で見合つてゐた。偶に來る休息の時間にも天幕の中からは戲談も笑聲も聞えなかつた。然しそれでも毎夜點呼の後では彼等を樂しませた。で、彼等は一團に塊つて、興醒

めた顔であつけないやうにがや〳〵叫ぶのであつた。

大ロシヤの兵卒に、

榴彈、散彈、なんのその。

そは我等の兄弟ぞ、

我等の前に敵はなし。

やがて手風琴でダンスの曲を奏すると、曹長が指揮した。

『グレコラン！スクウォルツォフ！輪を造つて踊れ！この犬ころ共！』

彼等は踊つた。が、その舞踏にも歌にも生氣のない、死んだやうなところがあつて、泣きだしたい氣がした。

たゞ第五中隊だけは氣樂でも自由でもあつた。この中隊は他の中隊より一時間遲く教練を始めて一時間早く仕舞つた。この中隊のものはみんな揃つて滿足さうで活潑で、何の上官の顔でもまともに大膽に悧巧さうに見ることのできる兵卒等であつた。軍服やシヤツの着け方までが他の中隊に比べると何處かハイカラであつた。この中隊の指揮官はステリコ

ーフスキイ大尉といふ變人であつた。彼は獨身者で聯隊中ではなか〳〵の金持である——彼は毎月どこからか二百ルーブル宛も仕送りして貰つてゐる——朋友には頗る冷淡で、引籠り勝ちで、人嫌ひな我儘者で、おまけに不身持であつた。彼は女中といふ口實の下に若い、大抵は年頃にもならぬ娘達を百姓の家から雇つて、二三ヶ月も經つと娘に少なからぬ金を持たせて生家へ返すのであつた。かうしたことが彼のところでは何年も、決りのやうに續いた。彼の中隊内では掴み合ひはさらなり罵る聲も聞えなかつた。それでゐて決して締りがなくなるといふことがなかつた。それに彼の中隊はその立派な整頓と訓練とでは近衛部隊にも劣らなかつた。ステリコーフスキイ大尉は隨分と勘忍强い、落着いた、自信のある强情な性質を有つてゐた。又それを部下の下士等に敎へ込むことが巧みであつた。ほかの中隊で打擲や懲罰や怒號や混雜やを重ねて一週間もかゝらなければ得られないものを彼はてもなく一日仕事で濟すことができた。そのために彼はあまり言葉も費すといふこともなく、めつたに聲を荒らげることもなかつたが、彼が一度口を開くと、もう兵卒等は石のやうに固くなつた。同僚は彼に對してあまりいゝ心持をしてゐなかつたが、兵卒等は心

から彼を愛してゐた。彼等は大方大尉を目してロシヤ陸軍内での唯一人の模範であると思つたのであらう。

愈々軍團長の命令によつて、閲兵式が行はれる五月十五日が來た。この日は第五中隊のほかの中隊の下士等は朝の四時に兵卒等を起した。暖い朝ではあつたが、寢足りないで、欠してゐる兵卒等は手織の縞シャツを着て震へてゐた。晴れ渡つて雲影を止めない朝の喜ばしい薔薇色の光のうちに、彼等の顔は灰色で、膏ぎつて、憐れッぽく見えた。

六時には將校等が中隊にやつて來た。聯隊の總集合は十時に定めてあるのだが、ステリコーフスキイ大尉を除いては、凡ての中隊長には閲兵前に兵卒等をゆつくり寢かしておくといふ考へが浮ばなかつた。却て反對にこの朝は彼等の頭に、特別に強く學科や射擊教練が泌み込んで、口汚く罵る聲があたりに殊更はげしく響いた。そしていつもよりひどく劒で突いたり、齒を擲つたりした。

九時に各中隊は舍營から五百歩程前の練兵場に集つた。もうそこには銃の尖端にいろい

ろの旗を付けた十六人の標兵が半露里も長く一直線に立つてゐた。

今時の重な勇士の一人と稱せられる標兵將校コワコ中尉は馬に跨つて線列の前を後前に駈けながら、物狂ほしい叫聲を上げて列を整頓した。彼は手綱を放ち、帽子を後ろに辷らし、汗塗ろになつて、顔はあまりに精出したためか眞赤になつてゐた。佩劒は馬の脇腹へガチャ〳〵當つた。白い、痩せた馬は年老いたため右の眼に白い雲がかゝつて、短い尾を痙攣的に振りながら、その拙い駈歩は射擊の音のやうに鋭い切れ切れな音を出した。今日はコワコ中尉には大變な責任があつた。彼の指揮によつてこの聯隊十六個中隊が殘らず立派な線列を造られなければならなかつたので。

ちやうど十時十分前に第五中隊が舍營を出た。ガッシリとした濶大な歩調で大地をどよめかせながら百人の兵卒が聯隊の目前に駈け集つてきた。みな揃ひも揃つて輕快な、勇敢な、スラリとした姿勢をして、そして生々した、綺麗に洗ひ清めた顔をして、右の耳の上に雄々しくずり下げたコザック帽を被つて、トットと密集して來た。

極廣い騎兵ズボンをはいた脊の低い痩せたステリコーフスキイ大尉はゆつたりと歩調も

取らずに右翼から脇の方へ五歩くらゐ離れて歩いて來た。そして愉快さうに眼をしよぼつかせながら首を傾げて左右を見比べつ整頓に注意してゐた。大隊長リョーフ中佐は凡ての將校等のやうに朝から落着かず、譯の分らない興奮狀態にあつたので、ステリコーフスキイ大尉が練兵場へ出るのが遲いといつて喰つて掛つたが、大尉は平然と濟まし返つて時計を出して見ながら殆ど輕蔑むやうに素氣なく答へた。

『命令書には十時に集合せよとありました。まだ十時に三分前です。私には兵卒等を無暗に苦める權利はありません。』

『文句を言ふな！』と、リョーフ中佐は手を振つて馬を止めながら呶鳴つた。『服務上のことで上官の注意する時は默つてゐ給へ！……』

が、しかし彼は自分の正しくないのが分つたので、すぐさまそこを離れて第八中隊に酷く當り散らした。この中隊では將校等が背嚢を調べてゐた。

『えゝと、これはなんといふみつともないことだ！市場でも開いたのかッ？雜貨店でも出したのか？それとも獵に出掛けるので、犬でも飼つてるのか？何を今迄考へてゐたのだ。

早く背嚢を負へ！』

十時十五分に中隊を整頓させた。これは時間のかゝる世話の燒ける苦しい任務であつた。標兵から標兵へ杭で長い繩をピンと引張つた。前列の兵卒はその繩に爪先を必ずきちんと附けなければならなかつた。それが規定の隊列の整頓なのである。が、これはまだしもであつた。そのほかに爪先の間隔が銃床尾の入るくらゐの程度であること、それから敬禮の時兵卒の姿勢が一齊に斜めになることが要求された。そして中隊長はまるで氣でも違つたやうになつて呶鳴つてゐた。《イワーノフ！上體前へ！セロシタン！右肩下げ！左足後へ、もつと……》

十時半に聯隊長が來た。彼は足が四本共膝まで白い、赤栗毛の、一面に黑みがゝつた星のついた、大きな去勢馬に乘つてゐた。シュリゴーウキチ大佐は馬上では人目を惹くやうな堂々たる姿で、しつかりと乘つてゐたが、しかし頗る短い鐙の上に極めて歩兵らしい姿勢をしてゐた。

聯隊と挨拶しながら彼はふざけたやうな愉快さうな熱心を籠めて活潑に呼んだ。

『やあ諸君、今日は！……』

ロマショーフ少尉は自分の第四小隊に氣が付いた。殊に脾弱な小兒らしいフレーブニコフの姿を思ひ浮べた。そして微笑まずにはゐられなかつた。《なに申分はないさ、皆立派だ！》

聯隊附音樂隊が歡迎の曲を奏し始めるや間もなく軍旗が來た。たまらなく待遠しくなつた。軍團長の着する停車場の前にはずつと長く一聯の信號兵が連つてゐた。その信號兵は軍團長の到着を豫め信號で報ずる任務を帶びてゐた。幾度も思ひ違ひをしては騷ぎ出した。繩を張つた杭は急いで引拔かれた。聯隊は整列して氣を張りつめてぢつと待ちあぐんでゐた。しかし重苦しい二三分が過ぎるとまた位置を變へないで休むことが許された。隊列の前方三百歩ぐらゐのところに婦人連の着物や、傘や、帽子が斑にさま〳〵な色をして目の醒めるほどであつた。それは閲兵式を見ようとして集つた聯隊貴婦人等が立つてゐるのであつた。ロマショーフはその晴々としたまるで祭日のやうな群集の中にシューロチカがゐないといふことをはつきり知つてゐた。が、しかし彼はそこを見る度毎に心臟の周圍

が冷りとして、妙な理由の分らぬ胸騷ぎから、せか〳〵と呼吸がせはしくなるのを覺えた。ふと一つの慌だしい短い言葉がちやうど風のやうに悸々と列を傳つて通り過ぎた、《來た、來た！》と。直ぐにみんなの頭には今度こそほんとの眞面目な瞬間が來たといふことが判然した。朝から聯隊中の騷ぎで氣がはりつまつて、ばねを掛けたやうになつてゐる兵卒等は命令も下らないのに我から慌てゝ整頓して心配さうに咳拂をした。

『氣を着け！標兵は各部署に就け！』と、シュリゴーウキチ大佐が號令した。

ロマショーフは右手の方を横眼で見た。と、練兵場の遙か向うの端に、ちつぽけな騎士等のちよんぼりした塊りが黃色い輕い砂煙を立てゝ迅速に隊列の方へ駈けて來るのを見た。シュリゴーウキチ大佐は嚴格な、さも感に打たれたやうな風をして聯隊の中央から普通よりは少くも四倍程遠くの距離に離れてゐた。そして自分の銀色の腮髯を上へしごいて、重重しい態度をして、聯隊のぢつと動かない黑い塊りを嚴しいやうな、喜ばしいやうな、また絕望したやうな眼付で見ながら、練兵場中に響き渡るやうな聲で、

『氣を着け！捧――げ――え……』

大佐はちやうどこの何百人といふ大勢の人に對する自分の大なる權力を樂しむかのやうに、そしてこの刹那の快味を持續しようとするかの如く、態と長い間を置いた。そして不意に渾身の力を籠めて、顏を眞赤にして、頸筋を緊張させて喉一ぱいに、

『……銃！』と、呶鳴つた。

一、二！と、手が銃の負革に當り銃の閉鎖機が帶圈に當つてがちやゝ〳〵鳴つた。右翼から愉快さうには、つきりした歡迎の進行曲が響いてきた。急調の笛やクラリオネットがちやうど惡戲好な笑上戸の小兒のやうに一齊に響く傍から、長い眞鍮のラッパが勝ち誇るやうに嚴かに鳴渡る。太鼓の低い音がその喇朗たる響を逐うて行く。その後から遲ればせに重々しいトロムボンが落着いた柔かい音を出した。停車場では汽罐車が長い、細い、透徹るやうな汽笛を鳴した。そしてこの新しい柔かな響きが管絃樂の嚴かな響きと入り交つてある不思議な喜ばしい調和をしてゐた。一種の元氣のいゝ勇敢な波動がふとロマショーフを捕へて輕々と心地よく彼を空中へさらつた。彼は俄に暑さのために蒼ざめた青空と空中に慄へてゐる金色の光線と、そして遠野の暖かい綠とをすぢ〳〵と愉快さうに見入つた——恰も

以前はそれに氣が付かなかつたかのやうに——それで突然彼はとある見えない意志の力で、變に型に鑄られたやうな、是等の不動の姿勢をとつた剛毅な人々の群に自分が屬してゐるといふことを意識して、我ながら自分を若い、强い、敏捷な、傲慢なものだと感じた。

シユリゴーウキチ大佐は自分の顏のすぐ傍に拔劍を支へて重々しい駈歩で軍團長を迎へに行つた……

軍樂隊の荒い愉快さうな勇ましい響きを通して、將軍の穩かな、溫和しい、なだらかな聲が聞えた。

『第一中隊！御機嫌よう！』

兵卒等は一齊に力を込めて、大聲で叫んだ。とまた停車場で汽罐車が汽笛を鳴らした。今度は短く、まるで怒つたやうに鳴つた。軍團長は中隊毎に挨拶して徐に正面を通つた。

ロマショーフはもう軍團長の肥え太つた、ドッシリした姿を見分けた。胸の下と便々たる腹の上に太い横筋の附いた夏服、兵卒の方へ向いた大きな四角な顏、猛々しい橡栗毛の馬にかけた、名印の付いた派手な鞍褥、控へ皮の象牙の環、漆塗りの半長靴を穿いた細い足

などを見分けた。

『第六中隊、御機嫌よう！』

ロマショーフ少尉の周圍の兵卒は咽喉が裂けるかと思ふやうな、態と大きな聲を張上げて叫んだ。軍團長は傲然と無雜作に馬の上に跨つてゐた。馬は血走つた眼をして、頸を美事に差延して、口中でから〳〵轡を鳴らして輕い白泡を落しながら舞踏でもしてるやうな輕快な小刻みな步調で步いて行つた。（軍團長の顴顬のところには白髮が生えてゐる。が、鼻髭は黑い。大方白髮染でもしたのだらう）といふ思ひがロマショーフの頭にチラと閃いた。

軍團長は金緣の眼鏡を通して自分の黑い若々しい悧巧さうな、そして冷笑してるやうな眼で、彼に向つてゐる兵卒の眼を一人々々注意深く見入つた。やがて彼はロマショーフと並んで、手を帽子の庇へ擧げた。ロマショーフは身體をヌッと延して、足の筋肉を緊張させて、ぶら下つた佩劍の柄を痛いほど强く擦つた。柔順しい幸福な歡喜がふと彼の手足の表面に鳥肌を立てながら氷のやうに冷くサッと走つた。彼は傍目も振らず軍團長の顏を見守りながら心の中で例の無邪氣な子供らしい癖でかう思つた。（勇敢なる將軍の眼は若き少

尉のすらりとした纖弱な姿の上に滿足さうに留まつた。）

軍團長はかうして順次に凡ての中隊を一々挨拶しながら見廻つた。彼の後からよく訓練された美しい馬に乘つて、約十五人の參謀將校の隨員が不揃ひな輝かしい服裝をして、ぞろ〳〵と隨いて來た。ロマショーフは彼等をもやはりその柔順しい眼で見たが、隨員の一人も少尉に眼をくれるものはなかつた。凡てこれ等の閲兵や、軍樂隊の歡迎の曲や、この小さな步兵將校等の不安などは彼等に取つてはもうずつと以前から慣れきつてしまつてなんの興味も惹かなかつた。ロマショーフにはこれ等の隨員がある特別な美しい、彼の達し得ない高尙な生活をしてゐるやうに思はれてなんとなくぼんやりした嫉みと惡意とを感じた。

誰か遠くから軍樂隊に奏樂を止める合圖をした。軍團長は馬を躍らして聯隊の隊列に沿うて左翼から右翼へと駈けた。と、彼の後からその隨員がさま〳〵な波を打ちながら斑な華やかな行列のやうに續いた。シュリゴーウキチ大佐は第一中隊へ駈け付けた。自分の赤栗毛の去勢馬の手綱を引張つて、肥え太つた身體を後へ反り返らせて、彼はちやうど火事

の時に消防長が叫ぶやうな不自然な猛々しい嗄れた聲で叫んだ。

『オサッチイ大尉！中隊を指揮せい！活潑に！……』

聯隊長とオサッチイ大尉とはどの教練でも絶えず可笑しな聲の競爭をしてゐた。今も第十六中隊まで聞えるやうなオサッチイ大尉の氣取つた、徹りのいゝ號令が聞えた。

『中隊、擔へ銃！中央規準、並足、進め！』

彼の中隊は長い間の熱心な努力に由つて行進の際特別稀しい確りした歩調が訓練されてゐた。それに兵卒等は力一ぱい足を上げてはまた力一ぱい地に踏み付けた。その音がドッシリと大きく力があつて人の心を惹いた。そしてそれが他の中隊長等の嫉妬の標的となつた。

しかし第一中隊がまだ五十歩も行進しないのに忽ち軍團長の堪へ切れないやうな聲が聞えた。

『これは一體何ぢや？中隊を止め！止めろ！中隊長、俺の所へ來い。君は今何をして見せたのだ？あれは一體お葬式の行列か？提灯行列か？兵隊ごつこか？それとも跛の行進か？

今日は二十五歳までしか服務しなかつたニコライ帝時代とは違ふぞ。こんな舞踏のためにどれだけ無駄な日を費したんだ！貴重な日を！』

春の高い、石の樣な、澁面のオサッチイ大尉は拔劍を下して軍團長の前に立つてゐた。軍團長は暫く默つてゐたが、やがて悲しげな嘲るやうな表情をして靜かに續けた。

『大方部下を歩調學でいぢめてるんだらう？え、このアニカ・ウォインめ！（お伽噺に現はる〜死と戰つた勇士）ちや訊ねるがね……あの若者の姓は何といふ？』

軍團長は左翼から二番目の兵卒を指で示した。『イグナアチイ・ミハイロフと申します、閣下！』と、オサッチイ大尉は素氣ない軍隊式のドラ聲で答へた。

『よろしい。ちや君は彼のことに關して何を知つとる？彼は獨身者か？妻帶者か？子供があるのか？或は彼の生家に何か悲慘なことか不幸なことはないか、それとも困つてゐはせんか、どうだ？』

『そんなことが分りますものか閣下！百人もをりますからとても憶え切れません。』

『憶え切れない？』と、軍團長は苦々しく繰返した、『あゝ驚いた！聖書に（靈を損ふ勿

れ』と書いてあるのに君は何をしてゐるんだ？この貴い灰色な奴共がいざ戰爭となれば、君を胸で蔽ひ、君を背負つて砲火の中から救ひ出してくれるぢやないか。また嚴寒の時には君を自分の破れた外套で蔽つてくれるぢやないか。しかるに君は分らないなんかと言つてゐるのか。』

軍團長は用もないのに手綱を神經的にいぢりながら絶えずいら〳〵して、オサッチイ大尉の頭越しに聯隊長に叫んだ。

『大佐、この中隊を引込め給へ。もう見んでもいゝ。引込め！引込め！すぐに！なんだこの旅役者共！この滑稽者奴！この馬鹿野郎共！』

これから聯隊の失敗が始まつた。兵卒の疲勞と、臆病と、下士の無意味な殘酷と、將校等の勤務に對する氣のない慣れ切つた無責任な態度などが、すべて剝き出しに醜く檢閲中に暴露した。第二中隊の兵卒等は『天に在す我等の父よ』の天主經を知らなかつたし、第三中隊では將校までが散兵隊次の時にまごついたし、第四中隊では兵卒の一人が操銃の時に失敗つたし、殊にひどかつたのは、どの中隊でも騎兵の不意打に備へる操作に就ての觀

念がなかつたことである。その癖その準備は充分にしたし、その重大なこともよく承知してはゐたのだが。その操作は軍團長自身が創設して實施させたもので、それは指揮官の沈着と敏捷な想像力と大なる機智とを要する迅速な隊形變換のことである。ところが第五中隊の外はいづれもそれで失敗つた。

中隊を檢閲した後、將軍は隊列から凡ての將校下士を遠ざけて兵卒等に向ひ、皆滿足か、皆相當な取扱ひを受けてゐるか、上申することも、不滿足なこともないか――そんなことを訊いた。しかし兵卒等は一齊に、《さやうであります、皆滿足してをります》と答へた。第一中隊を尋問してゐる時にロマショーフは後の方で自分の中隊の曹長ルインダが嗄れた威嚇すやうな聲で、かう言つてゐたのを聞いた。

『誰でも要求があるなら俺に言へ。俺が後で軍團長に取り次いでやる！』

しかし、第五中隊はどの中隊よりも華々しくやつてのけた。勇ましい元氣のいゝ兵卒等は頗る輕快に敏捷に活々した歩調で中隊教練をやつた。さも閲兵などは彼等に取つては恐ろしい試驗ではなく、むしろ愉快な、氣樂な遊戯でもしてゐるやうに巧に自由にやつてのけ

た。軍團長はまだ苦い顔をしてゐたが、第五中隊の成績にやつと滿足して、《みんなよくやつた》と投出すやうに言つた——これが閲兵中で初めての讃辭であつた。

騎兵の襲擊に對する操作で、ステリーコフスキイ大尉はとう〳〵軍團長を負かしてしまつた。將軍自身が不意に口早に、《右方八百歩の地點に騎兵現はる。》と言つて、大尉に敵を示した。で、ステリコーフスキイ大尉は一瞬間もまごつかずにすぐさま正確に、落着いて、中隊の行進を止めて、疾驅して來る假定の敵に向け、ちやんと時を計つて小隊を密集させた。そして先頭部隊は膝射、第二部隊は立射と決めて、照準を定めて二三發空彈射擊をして、それから《執れ銃！》と號令した。と、軍團長は《立派々々！諸君うまいぞ！》と褒めた。

訊問の後で中隊はまた横隊に造り變へられたが、軍團長は却々それを元の位置へ返したくなかつた。彼は隊列に沿うて靜かに試みるやうに乘り廻しながら特別な興味で兵卒等の顏を見入つた。そしてその重く垂れかゝつた瞼の下の悧巧さうな眼には眼鏡越しに微な滿足さうな微笑が輝いてゐた。突然彼は馬を止めて、すぐ後の參謀長を振返つて、

『いや、君見給へ、大佐。彼等の顏付はどうだ！大尉！君は彼等を饅頭でゞも養つてゐるのか？おい、ささまふとつちよ！』と軍團長は一人の兵卒を顧でしやくつて、『ささまの名は確かコーワリといつたね？』

『さやうであります、閣下！ミハイロ・ボリイチュクと申します』と愉快さうに、小兒らしい滿足さうな微笑を浮べて兵卒は叫んだ。

『や、さうか、俺はまたコーワリかと思つた。ちや違つたのちやな』と軍團長は戯談を言つて、『仕方がない、間違つたんだ……』と、彼は氣持よい、くだけた言葉を附加へた。

ミハイロの顏は全く愚かしい嬉しさうな笑ひに溢れた。

『いえ、さうではありません、閣下！』と彼は更に大きな聲で叫んだ。『田舍では鍛冶屋をしてをりました。ですからコーワリ（鐵打職と云ふ意味）でありました。』

『それ見ろ！』と將軍は親しげに點頭いて、部下の兵卒をよく知つてゐることを誇つた。

『どうだね、大尉！彼奴は君の隊では好い兵卒かな。』

『非常によろしうございます。私の隊では兵卒は皆よろしうございます』と、ステリコー

フスキイ大尉はいつものやうな自信のある調子で答へた。

軍團長の眉は腹立たしさうに震へたが、しかし唇は微笑んでゐた。それがために顏中が人の善い老人らしい可愛い顏付になつた。

『や、それや君、大尉！大方その……だが間人はどうだ？』

『一人もありません、閣下！五年になりますが一人もありません。』

將軍は鞍の上にどつしりと身を屈めてボタンを掛けない白い手袋の中の肥太つた手をステリコーフスキイ大尉に差出して、

『君に大いに感謝するよ、君！』と彼は震へ聲で言つた。そしてその眼は急に涙に輝いた。彼は多くの風變りな勇將のやうに時々泣くのが好きであつた。『君に感謝するよ。君はこの老人を慰めてくれた。みんなありがたう！勇士達』と彼は力を込めて中隊に向つて叫んだ。

ステリコーフスキイ大尉の與へた快い印象のお蔭で第六中隊の檢閲も比較的無事に濟んだ。將軍は褒めもしなかつた代りに罵倒もしなかつた。けれどもこの中隊は兵卒が木の框に縫付けられた藁人形を斬る時に失敗つた。

『さうぢやない、さうぢやない、さうぢやない！』軍團長は鞍の上にキッとなつて怒鳴つた。『まるで違ふぞ！ささま達はよく聽け！もし心からやるなら眞中の所へ銃劍を柄まで突込まなけりやならん筈だ。それで恥しくないか！ささま達はパンを煖爐の中へ入れてるんぢやあるまいし、敵を殺すのだぞ……』

他の中隊もそれからそれと失敗つた。軍團長は終ひにはやきもきしたり、例の獨特の峻烈な注意を與へたりすることさへ止めてしまつて、馬の上に默つて脊を屈めて、怠屈さうな顏をして坐つてゐた。第十五中隊と第十六中隊とは檢閲もしなかつた。そして唯疲れたやうに手を振つて、嫌惡の情を抱いてかう言つた。

『まあ、あのざまはなんだ……なつてないぢやないか。』

まだ分列式が殘つてゐた。全聯隊が半中隊づゝに別れて密接した縱隊になつた。再び標兵が前方へ駈け出して行進の線を示しながら右翼に對してずつと一直線に長く延びた。たまらなく暑くなつてきた。兵卒等は狹い場所へつめ込められた息苦しさや、人蒸や、靴や、煙草や、汚い汗みどろの皮膚や、胃の中で消化れてゐる黑パンなどの臭氣ですつかり疲れ

てしまつた。

然し分列式の前になると皆元氣づいてきた。將校等は皆兵卒に願ふばかりにかう言つた。

(貴樣達は、、、と軍團長の前では無理にでも勇しく通るのだぞ。失敗つちやいかんぞ)と。

そして上官が兵卒等に對するかうした態度のうちには一種の媚びるやうな、自信のない、後めたいやうな氣持が仄いてゐた。恰も軍團長のやうなとびはなれて高貴な人の怒りが忽ち將校をも兵卒をも同じやうに重苦しく壓迫して、彼等を平等にし、一樣な程度に悸々した、狼敗した、惘然なものにしてしまつたかのやうであつた。

『氣を着け！……軍樂隊、横隊！』遠くの方からシユリゴーウキチ大佐の號令が聞えた。で、千五百人の人が瞬く間に低い、慌だしい呟きを漏しながら動き出した。そして急いで氣を張つて注意深く身を延して、しんと靜まり返つた。

シユリゴーウキチ大佐は見えなくなつた。が、また彼の響きのいゝ、ほとばしるやうな聲が聞えた。

『擔へ……』

四人の大隊長は馬上から各自の部隊に向つてゝんでに彼方此方で號令した。

『大隊擔へ……』

かう言つて四人共聯隊長を凝つと見詰めてゐた。

どこか聯隊の前面の遙か向うの方で、劍が空中に閃いてすぐに下へ下りた。これが總指揮の合圖であつた。で、四人の大隊長は一齊に聲を張上げて、

『……銃！』と、叫んだ。

聯隊は銃を靜かにガチヤつかせて不揃ひに擔つた。どこかで銃劍がガチヤ〳〵と鳴つた。

すると、シユリゴーウキチ大佐は態と言葉を引延して、莊重に、嚴しく、嬉しさうに喉一ぱいの聲を張上げて、

『分――列――行――進！……』と號令した。

すると十六人の中隊長が銘々に態とらしい樣々な聲で歌ふやうに叫んだ。

『分列行進！』

と、どこか縱隊の殿の方で――一人の後れた中隊長が他の中隊長等の後で狼狽へたや

うな、羞しさうな聲で曖昧に叫んだ。

『分列行……』と急に悸々したやうに途切れてしまつた。

『半中隊づゝ！』と、シュリゴーウキチ大佐が呶鳴つた。

『半中隊づゝ！』と、中隊長等がすぐ後を續けた。

『二小隊の距離！』とシュリゴーウキチ大佐は叫んだ。

『二小隊の距離！……』

『右翼規準！』

『右翼規準！』と、さま〳〵の斑らな反響が繰返された。

シュリゴーウキチ大佐は二三秒ほど待つて斷れ斷れに投げるやうに叫んだ。

『第一中隊——並歩！』

と、みつしり重つた隊列を通して底力のあるオサッチィ大尉の號令が低く地上をかするやうにして前方に響き渡つた。

『第一中隊、右翼規準、並歩……前へ進め！』

前方で一齊に中隊鼓手が大鼓を敲いた。

斜めに突立つた銃劍の林から、整然たる長い一列が離れて、揃つて空中にゆらめいて行くのが後ろから見えた。

『第二中隊、前面！』といふアルチャコーフスキイ大尉の甲高な女のやうな聲をロマショーフは聞いた。

すると次の銃劍の列が離れて、同じやうにゆら〳〵と動き出した。太鼓の音はだん〳〵鈍く靜かになつて、地の下へ低く沈んだかと思ふと、急に樂しい、輝かしい、鮮かな管絃樂の波がその上へのしかゝつて、それを壓倒してしまつた。それは聯隊附樂隊が奏したのであつた。と、聯隊中が一時に元氣づいて延び延びして來て、頭は自然と上へそり返る、身體は一層眞直に延びる、灰色の疲れ切つた顏までがはつきりして來た。

半中隊づゝ順に離れて行つた。そしてその度毎に聯隊進行曲の響が益々はつきりと元氣づいて樂しさうに聞えた。今や第一大隊の最後の半中隊が動き出した。リョーフ中佐が痩せこけた黑毛の馬に乘つて、オリザール中尉と一緒に前方へ進んだ。兩人共劍を翳して手

首を顔のところに支へてゐた。

いつものやうに落着き拂つたステリコーフスキイ大尉の無造作な號令が聞えた。夥多しい銃劍の上へ眞直に高く軍旗の竿が揭げられた。猫脊の、でぶ〳〵太つた、そして大きな、老耄れた、怠屈さうな、猿のやうに手の長いスリーワ大尉は濕んだ飛出したやうな眼で隊列を見廻しながら前方へ出た。

『第一半中隊……前面！』

輕快な強い歩調でロマショーフは自分の半中隊の中央前面へ出た。心の中には一種の幸福な、美しい、誇りがな心持が湧いた。彼は前列の兵卒等の顔を一々ずらつと見渡した。

(老練な劍術家が部下の老兵を鷲のやうな眼で見廻した)と、こんな華かな言葉を頭の中で考へながら彼は強く節を付けて引延すやうに叫んだ。

『第二半中――隊！……』

(一、二！)とロマショーフは胸の中で數へながら靴の爪先で拍子を取つた、(左足だぞ、左右)。そして幸福さうな顔付をして後へ頭を反して彼は練兵場中へ響き渡るやうな高い中

音で叫んだ。

『前面！』

と、もう片足で彈機のやうにくるりと廻轉して後を振向きもせず、節を付けながら二拍子で低く附け加へた。

『右翼規準！』

刹那の美にロマショーフはすつかり醉うてしまつた。ちよつとの間、彼には音樂が燃えるやうな、さら〳〵した、眩い光の波で彼を圍んで、銅の歡喜の叫びが空の太陽からでも落ちて來るやうに思はれた。そして先刻の歡迎の時のやうに甘い、顫へてゐる冷感が彼の身體をサッと走つて、同時に皮膚が硬ばつて、髮の毛がよだつて、ブル〳〵と震へた。

音樂の調子に合せて、第五中隊が軍團長の賞讃に答へて一齊に叫び出した。はつきりした進行曲がちやうど生きた肉體の障壁を脱して、その自由を喜んでるかのやうに一層大きく愉快さうな音をしてロマショーフの耳に達した。今少尉の眼には自分の前方の右手に當つて椽毛の馬に乘つた將軍のどつしりした姿や、彼の後に凝と動かずにゐる隨行員等や、

そのずつと向ふに眩い眞晝の光を浴びて、何かのお伽噺の中の燃え立つ花のやうないろいろな衣服を着た婦人の群がはつきりと際立つて見えた。左の方には管絃樂で奏してる金色の喇叭がピカ〳〵と輝いてゐた。そしてロマショーフは軍團長と樂隊との間に、見えない不思議な絲が繫がつてゐて、その絲を踏み越えるのが非常に嬉しく、また切ないことのやうに思はれた。

しかし第一半中隊はもうその線内に入つた。

『みんなよくやつた！』といふ軍團長の滿足さうな聲が聞えた。『あゝゝゝ』と兵卒等は甲高な聲で答へた。樂隊の響きが一層大きく前方で響き渡つた、（おゝ！可愛らしい人！）とロマショーフは將軍のことを優しく思つた、（悧巧な人！）

今やロマショーフは一人になつた。彼は足を地に觸れるか觸れないばかりにして靜かに根氣よく定めの線へ近づいだ。彼の顏は傲然と後へ反り返つて高慢さうに挑むやうに左の方へ傾ひてゐた。

波は不意に飛揚の力でも授けられたやうに輕快と自由の感じが全身に漲つてゐた。そし

て自分を一般歡喜の對象として、また全世界の美しい中心と自覺しながら彼は一種の虹のやうな嚴かな夢心地のうちに我と我が心に言つた。

『ごらんなさい、ごらんなさい――これはロマショーフが歩いてるのです。貴婦人等の眼が歡喜に輝いた。一、二、左！……半中隊の前に美しい若い少尉が立派な歩調で歩いてゐる。左、右！……（シュリゴーウキチ大佐！あなたの部下のロマショーフは實に立派ですな。俺は彼奴を自分の副官にしたい）と、軍團長が言つた。左……』

もう一秒時間だ。もう一瞬間だ――、ふとロマショーフは魅するやうな空想の絲を切つた。軍樂隊が非常に勇ましい、燃え立つやうな凱旋の曲を奏した。（今に讃めるだらう）と、ロマショーフは思つた。そして彼の心は喜ばしい輝きに充ちた。軍團長の聲が聞えた。續いてシュリゴーウキチ大佐の聲とまた誰かの聲が聞えた……（あの聲は無論將軍が褒めたのだ。だが、何故兵卒等は答へないのだらう？誰か後の列から呶鳴つたぞ……何事が起つたんだらう？）

ロマショーフはふと後を振返つて眞蒼になつた。彼の半中隊は眞直に整頓した二列の代

りに、まるで羊の群のやうに曲りくねつた、ゴタ〳〵した群になつてゐた。これは少尉が自分一人の歡喜と自分の華やかな空想とに醉うてしまつて自分の半中隊へのしかゝるやうに一歩々々と中央から右の方へ片寄つて、とう〳〵全隊の行進を亂しながら右翼へ逸れてしまつたのを自分ながら知らなかつたからであつた。ロマショーフはたゞ列兵のフレーブニコフが殆ど軍團長の目前で二十歩も隊列を離れて、跛を引いてゐるのを見て、初めて我に返つたのである。フレーブニコフは行進中倒れたのだつた。そして身體中塵埃だらけになつて、武裝の重みのために恰も四ん匍ひで駈けてるかのやうに身體をぐつと屈めて、片手で銃の中程を持ち、片手で矢鱈に鼻を擦りながら部下の半中隊を追つ掛けてゐた。

ふとロマショーフには、キラ〳〵と輝いてゐた五月の太陽が急に暗くなつて、彼の肩の上に砂山のやうな、死んだ、今迄に覺えのない苦痛が掛つて、樂隊は怠屈さうに調子が低くなつたやうに思はれた。同時に彼自身もぐづ〳〵と意氣地なく、重たい拙い縺れた歩調で歩いてゐる、小ぽけな、弱々しい、みつともない者のやうに思はれた。

聯隊副官が彼の方へまつすぐに、勢一杯に飛んできた。フエドゥーフスキイ副官の顏は

眞赤になつて、憎惡に歪んで下顎がが〳〵慄えてゐた。彼は憤怒と疾走のためにせか〳〵と喘いでゐた。まだ遠くの方から彼は言葉に咽びながら、切なさうに腹立たしく呶鳴つた。

『少尉……ロマショーフ少尉！聯隊長殿が君に……嚴重な罰を……七日間……師團司令部の……哨舍で……みつともない、下らない……聯隊中が、お……い！……このやくざもの！』

ロマショーフは彼に答へなかつた。顏さへ振向けなかつた。勿論副官は罵るだけの權利は持つてる！今兵卒等は副官が彼に呶鳴つたのを聞いた。《えい、なに糞、聞くなら聞くがいゝ、當り前だ、かまふものか》と、ロマショーフは自分に對して鋭い憎惡を感じながら思つた。《今俺に取つては何もかもおぢやんになつた。いつそ自殺でもしようかしら。俺は永久に恥をかいてしまつた。俺はもう駄目だ。俺は可笑な人間だ。小ぽけな人間だ。俺の顏は蒼ざめた醜い顏だ。世の中の誰の顏よりも厭な愚かしい顏だ。あゝ何もかも駄目だ！兵卒等は俺に隨いて歩きながら、俺の脊中を見てゐる。そしてくす〳〵笑ひながら互ひに肘でつゝき合つてゐる。それとも俺に同情してゐるのかしら？いや、俺はもう自殺に決

めた、決めた！）

各半中隊は軍團長から遙か遠く退いては順次に右へ廻轉して、元の場所に歸つた。そこで彼等を横隊に造りかへた。後の部隊が來るまでは兵卒等に休めの姿勢を免された。將校等は濶いで內證で煙草を吸ふために居場所を離れた。唯一人ロマショーフだけは正面の中央の自分の半中隊の右翼に殘つてゐた。拔劍の尖で彼は足下の土を夢中にほぢくつてゐた。そして俯向いたまゝ顏を擧げなかつたが、物好きな、冷笑するやうな、輕蔑するやうな視線が四方から彼に注がれてゐるのを感じた。

スリーワ大尉はロマショーフの側を通りながら彼を見向もせずに、ちやうど獨言を言つてゐるかのやうに憎惡の情を抑へながら食ひ縛つた齒を通して嗄れ聲で言つた。

『今日、他の中隊へ移すやうに報告を出しておくから。』

やがてウェーツキン中尉が來た。ロマショーフは彼の明るい、人の好ささうな眼と垂れ下つた唇の端に、ちやうど汽車に轢かれた犬を見てゐる人々のやうに、胸の惡い、苦しさうな心の現れてゐるのを見た。それと同時にロマショーフは自分自身の顏に、ある無意

味な退屈な微笑を感じて不快な心持がした。

『行つて煙草を喫はうぢやないか、ロマショーフ君！』とウェーツキン中尉は言つた。そして舌打ちをしながら頭を振つて彼は不與げに附け加へた。

『ねえ、君！……』

ロマショーフの願は、ブル〜〜慄えて、咽喉が苦しく切なくなつた。が、やつと泣くのを堪へて、苛められた小兒のやうな斷れ斷れな壓潰されたやうな切ない聲で答へた。

『いや、廢しませう……なんだつてそんな所へ……私はいやです……』

ウェーツキン中尉は脇へ退いた。《こゝで今スリーワの傍へ行つて、彼奴の頰つぺたを毆り付けてやらうかしら。》ロマショーフの顏にはそれやこれやの絕望からこんな思ひが閃いた。《それとも軍團長の所へ行つて、かう言はうかしら。ささまは老人の癖に兵隊ごつこをして、兵卒等をいぢめるのは羞づかしいぢやないか。彼等を休ませろ！ささまのためにもう二週間も兵卒等を擲つたのだと。》

が、ふと彼は先刻の堂々たる立派な自分の姿や、婦人連の歡喜や、軍團長の眼に溢れた

滿足などについて空想したことを思ひだした。と、急に彼は顏ばかりでなく、胸から脊中まで眞赤になるほど羞しくなつた。

『ささまは可笑しな、見下げはてた、穢はしい男だ！』と、彼は心の中で獨言を言つた。

『みな俺が今自殺するといふことを承知しろ！』

閱兵式は終つた。中隊はまだ幾度も軍團長の前で分列行進をした。始めは中隊毎に並歩で、次には駈歩で、その次には閉合縱隊で銃を捧げて走つた。將軍は稍々穩かになつた。そして幾度か兵卒等を褒めた。もう四時頃であつた。遂々聯隊中が停まつた。兵卒等に休めの號令を下した。喇叭手は「上官集合」の號令を吹奏した。

『將校諸君は軍團長の所へ――』といふ言葉が列から列へと傳はつた。

將校等は隊列から出て、繫がつた環のやうになつて軍團長を取卷いた。軍團長は馬上にぐつと脊を屈めて、首垂れて、ちよつと見たところでは非常に疲れたやうであつた。しかしその賢しげに細めた腫れぼつたいやうな眼は、生々して、嘲るやうに金緣の眼鏡の下から

ら覗いてゐた。

『簡單に言ふが』と彼は斷れ斷れにキビ〳〵した口調で言ひ出した。『この聯隊はなんの役にも立たないぞ。だが、それは兵卒が惡いのぢやない。上官等の罪だ。馭者が惡ければ馬が走らないと同じことだ。第一、諸君の心中には兵卒等に對する理解も配慮も見えないぢやないか。諸君は《友のために生命を捨つ。愛これより大なるはなし。》といふ聖書の句をしかと憶えとき給へ。諸君はたゞ上長官の檢閱に氣に入らうといふ一つの考へしか持つてゐない。そして兵卒等を馬車馬のやうに曳張り廻してゐる。將校等はまるで軍服を着た聖堂守でもあるかのやうな、だらしない、野蠻な顏をしてゐる。しかしそんなことは俺の命令書を讀めば分る。確か六中隊だつたか、七中隊だつたか、或る少尉などは整頓を失つて中隊を滅茶苦茶にしてしまつた。羞しいぢやないか。俺は跛の行進なんかを要求したんぢやない。唯何よりも先づ目測と沈着とが必要なんだ。』

『俺のことを言つてるな。』とロマショーフは怲々しながら思つた。そして彼はそこに立つてゐる人々が一齊に彼の方に振り向いたやうに感じた。が、然し誰も動かなかつた。みな

默然として、ぢつと身動きもせず、軍團長を見詰めてゐた。

『第五中隊長には俺は切に感謝する！』と、軍團長は續けた。『大尉！どこだ？　あゝ！そこにゐたな！』と將軍は幾度か芝居じみた風に兩手で頭の上へ帽子を擧げて、瘤のやうに出つ張つた皺だらけの拔上つた額を露き出してステリコーフスキイ大尉に低くお辭儀して、『も一度君に喜んで感謝する。そして君と愉快に握手しよう。若し俺の指揮してゐる軍團が戰爭でもするやうな運命になつた時は。』と言つて將軍は眼を瞬いたが、その中には涙が輝いてゐた。『その時は大尉、憶えて居給へ、一番危險な任務を君に賴むよ。では諸君、もう失禮する。諸君もゆッつり休み給へ。またいつか別な機會にお目にかゝらう。さあ道を開けてくれ！』

『閣下！』とシユリゴーウキチ大佐は前へ出た。『將校一同に代つて申上げますが、我々の集會所で粗餐を差上げたいと思ひまして。我々は……』

『いや、もうそんなことは！』と、將軍は大佐の言葉を素氣なく切つて、『御厚意は甚だありがたいが、實は今日レドホーヴスキイ伯爵に招待されてゐるので。』

將校等の開いた廣い道を越して彼は駈歩で兵隊の方へ駈け付けた。兵卒等は命令もないのに戰慄して、姿勢を正してひつそりと靜まり返つた。

『諸君、ありがたう！』と將軍はしつかり愛嬌よく叫んだ。『諸君に二日間の休息を與へる。では……』と、彼は愉快さうに聲を擧げて、『各自天幕へ、駈歩進め！ウラ――！』

あたかも將軍はこの短い叫びで、一時に聯隊中を衝き動かしたかのやうであつた。千五百人の兵卒等が耳を聾せんばかりの嬉しさうな喚き聲を擧げて四方へ散り散りに駈け出したので、大地が震動して、彼等の足下がづし〳〵と鳴つた。

ロマショーフは一團になつて町の方へ歸る將校等から一人離れて、舍營を越して遠い道を行つた。彼はこの瞬間聯隊の家族から追ひ出されたやうな、一種の憐れな背敎者のやうでもあり、凡ての人々に取つてなんとなく不快な仲間外れの人のやうでもあり、刹へ大人ではなくて、厭らしい、性質の惡い不具な腕白者でゞもあるかのやうに、自分を感じた。彼が自分の中隊天幕の背後を將校宿舍に沿うて通り過ぎた時、誰かの壓潰されたやうな、

しかし憤つた叫び聲が彼の注意を惹いた。彼はちよつと立止まつた。と天幕と天幕の間の入口で背の低い赤ら顔の身體の太つた、强壯な、自分の部下のルインダ曹長が亂暴に口穢なく罵りながら、フレーブニコフの顔を拳で擲つてゐたのを見た。フレーブニコフは暗い悲かしい賴りない顔をしてゐた。そしてそのどんよりした眼の中には動物的の恐怖が輝いてゐた。頭は憐れに彼方此方と搖れて、擲られる度毎にその顧が互にガタ〳〵とかち合つた。

ロマショーフは慌てゝ殆ど駈けるやうにして、その側を通り過ぎた。彼はフレーブニコフを庇つてやる元氣さへなかつた。同時に彼は自身の運命と、この苛められてゐる不幸な一兵卒の運命とが今日はなんだか妙に親しく、近く、そして不快に縺れ合つてることを惱ましく感じた。ちやうど彼等は同じ病氣を煩つてゐて、人々に一樣な嫌惡を起させる二人の不具者であるやうに感じた。そしてこの境遇が同じであるといふ意識がロマショーフに鋭い羞恥と嫌惡とを感じさせたが、又そのうちにはある非常に深い眞の人間らしい心持もあつた。

十六　煩悶

舍營から町へは鐵道線路を越えて行く一筋の道しかなかつた。——線路はこゝで險しい高い切通しを通つてゐた。ロマショーフは隙間なく踏み付けられた、殆ど垂直になつてゐる狹い小徑をばた〳〵と下へ駈け下りて、向ふ側の坂道へやう〳〵登り始めた。彼は坂の中程から誰か軍服を着て外套を引つ掛けた人が上の方に立つてゐるのを見た。ちよつと立止まつて眼を凝めて見ると、それがニコラーエフ中尉だといふことが分つた。

『今直ぐに不快なことが起るぞ！』と、ロマショーフは思つた。彼の心は不安な豫感で愁はしげに惱んだ。が、彼はやはり平然と上へ登つて行つた。

二人の將校は五六日も遇はなかつたのだが、なぜか彼等は今遇つても挨拶もしなかつた。そしてどうしたものかロマショーフもそれを別に變なことだとは思はなかつた——まるでこの重苦しい變な日にはそれよりほかにしやうがないといふ風であつた。そして二人とも擧手の禮さへしなかつた。